



飛行船

第 27 号

2021

もくじ

かすがい

桜雨

カーテンの隙間から……

折り合い

歌人・柏原千恵子と今年の夏

池の畔で(1)

おゆさ

竹内 菊世

4

渋谷 政子

21

高木 純

34

正木 孝枝

50

大石 征也

70

松崎 慧

75

乾 莊次郎

77



暴走の果てに

坂井 陽

97

蜘蛛の移り

林 宝珠

133

あるヒューマンが

二〇二〇年三月二十四日早朝に見た夢

増田 辰良

146

詩魂凜凜

松田 一美

160

募集小説

虹が見えた日

松尾 龍馬

183

募集小説

かずら橋

徳嶋ダイスケ

201

となりの同人誌 其ノ参

コロナ時代の詩精神

阿奈遠菓子

209

表紙絵

森吉 孝

「水芭蕉」

編集後記

高木 純

211



かすがい

竹内 菊世

やつとタクシーが来た。田舎町ではタクシーを捕まえるのはなかなか難しい。タクシー会社に電話を入れて場所を特定して呼ぶ方が確実だ。駅前とか飲屋街なら客引きのタクシーが並んでいるが、少し外れるともう真つ暗で、歩くのも怖い程だ。

アルコールが入ってご機嫌になっている金田は、思うように動いてくれない。

「もう、先生。放って行きますよ」

纏い付いてくる両手を振り払おうとするが、枯れ際の蕨のようなしぶとさで、絡みついて来る彼の腕に、亮子は辟易しながらも、突き飛ばして逃げ出す勇気もない

重たい金田の体重に振り回されながら、何とか後部座席に並んで座る。

「川辺町。三丁目です。川辺小学校があるので、校門の辺りで……」

彼のマンシヨンの前まで行くことにしようか、と一瞬思ったが、とりあえず小学校前を指定した。小学校から金田のマンシヨンまでは百メートルほどある。何とか歩けるだろう。今夜はマンシヨンの前までは行きたくない。前まで行けばドアまで、ドアまで行けば部屋へ、ずるずるとそんな構図が描けて、亮子は嫌になる。正体が無くなる程飲んでいるのに、手は執拗に亮子を求めて来る。びしっと叩いてやりたいがそうもいかず、払いのけ払いのけ掴んでは膝に戻し、彼からの距離をできるだけ取って、左側のドアにぴったりとひつつくようにして息を潜めていた。

（一人で乗せればよかった）。うっかり同乗してしまった迂闊さを悔いたが、後の祭りだ。金田のマンシヨンのある川辺町經由で、亮子の住む美坂町へは同じ路線系である。わざわざ二台のタクシーにしなくてもと咄嗟に考えた。長年、そうして来たことだし。

もう、見覚えのある学校の塀に沿った真直ぐな道に入った。亮子は急いでバッグから財布を取り出し、メーター表を見ながら千円札を二枚取り出した。校門の真ん前で車は止まった。前方のポストから細道をくねくねと入ってまた左折した所の、古い三階建てのマンションというか、アパートに金田はずっと住んでいる。

この辺りは区画整理をしないままに住宅が建て込み、複雑な町になった。アパートにエレベーターはない。当初の予定ではここで金田を降ろし、自分はこのまま自宅まで乗って帰るつもりであった。しかし正体もなく酔いどれている金田を見ると、いくら初冬とはいえ、急に気温の下がる深夜の町に放り出して去るには忍びない。お金を払い、いくばくかの釣銭を受け取り、金田の重い体を引っ張るようにして降ろした。

「先生。着きましたよ。降りて下さい」

大声で言いながら金田の大きな体をしゃにむに引っ張った。正体なく酔い潰れているように見えた金田は、意外に素直に自分の力で車を降りた。二人を残して車は去る。

「さ、歩きましょう。酔い覚ましにちよいどいいでしょ」

金田の持ち重りする皮靴と自分のバッグを左手に持ち、

右手で金田の腕を引っ張った。力を入れ過ぎたか、金田がよろめいて亮子に乗りかかる。一緒に倒れたら大変だ。亮子は四肢を踏ん張って金田を支えた。

「もう、自分で歩いて下さい。私は支えられませんから」

亮子は祈るような気持ちでつい大声になるのを、首をすくめて声を落し懇願する。左腕を亮子に預けたまま、金田は意外としっかり歩き出した。

マンションの方向へと路地を曲がりながら、（ああ、タクシーを待たせておくべきだった）と亮子は後悔した。また、電話をして呼んでも、なかなか捕まらない時間帯だ。

エレベーターのない古いマンションの階段を、よっこらよっこらと縛れるように二人で上った。生憎三階の端だ。（一階だったらいいのに）との願いは叶えられるべくもなく、亮子は喘ぎ喘ぎ、そして休みを取りながら三階への階段を一つ一つ登りつつ、次のことを考える。うまく部屋の中へ送り込めるだろうか。部屋の前まで送ったら、もう責任はない、そのままにして帰る方がいいか、部屋の中へ連れて入るのは嫌だ。老人男性がひとり住まいをしている部屋へ一緒に入るのは。どうして、私がこんな羽目にならなければいけなかったのか。男性だって何人かいる。金

田と親しい人もいる。なのに、なぜ私が？ 結局お人好しなのだ。金田が困っている姿を見れば放っておけない母性が働いてしまう。金田はそこをちゃんと計算している。ずるい男なのだ。男性の同人達はそこを見抜いている。

「はい、着きましたよ。鍵は？」

意に反して亮子は金田の面倒を見ている。ドアの前まで連れて来たのだからこのまま帰ったところで、もう心配はあるまい。責任は果たせたはず。頭ではそう考えているのだが、体がついつい面倒を見ってしまう。金田はドアの前にしゃがみ込んで、盛んにコートのポケットを探っている。右か左か、はてまた胸か裏か？ たくさんあるポケットの何処かに入れた記憶があるのだろう。しばらく静観していたがいつこうに埒があかないので、しゃがんで一緒に探す。なんのことはない、右ポケットにすぐ見つかった。亮子はそれを取り出し「はい」と金田の眼の前にかざす。にやりと笑って金田は鍵をもぎ取るように亮子の手から奪い、立ち上がって鍵穴に挿す。案の定鍵はうまく入らない。何度も何度も入れ直してがちゃがちゃ音を立てる金田にしびれを切らし、深夜に近所迷惑も考え、亮子は黙って鍵を取り、鍵穴に挿す。すっと入った鍵を右に回す

と、かちかと小さな金属音を立てて鍵が開く。そのまま奥へ押すとドアが開く。中は真っ暗。中へ入ろうとしない金田の体を押して一緒に入る。手探りで玄関の灯りを付ける。勝手知ったる他人の何とか。突っ立ったままの金田をそのままにして亮子は急いで外へ出た。間髪を入れない素早さでドアを閉め、階段を駆け下りた。一気に一階まで降りると、はあはあと息が弾んで苦しい。若いとは言え、アルコールが入っているし、百キロ近い金田を押したり引っ張ったりしていたので相当疲れている。

「成功！」

亮子は「やったあ」と小さく声に出してほくそ笑んだ。事の次第ではこうはいかなかっただろう。

住宅や田んぼが混在する深夜の道を、賑やかな灯を求めて歩きながらも、悪夢のようなあの日が蘇る。

中学生頃から詩作りに憧れ、日常のちょっとした出来事をノートに書いて担任に見せると、褒め言葉が並び、また書けたら見せて欲しいと結んである。その言葉に励まされたというか煽てられて、亮子はなんとなく詩を書く

ようになった。

大学生になっても続いていた趣味とも言えないほどの詩作りについて、「どう、真剣にやってみる気ある？」と高校時代の担任だった橋井から、金田を紹介された。金田は橋井の大学時代の恩師だそうで、県下ではその道の人なら誰でも知っている存在だと言う。亮子は県外の大学へ行っていたので、そこらへんの事情には疎い。金田は詩歴も長く、何度か有名な賞の対象にもなり、候補にもなったが、受賞歴はないそうで、後任の指導に力を入れているという。

県下では最古老の実力者佐野昇が運営していた「詩標界」の編集責任者である。というより、事実上の主宰であった。

橋井に連れられて指定された喫茶店で初めて会った金田は強烈な印象だった。一米八十を超す身長に、筋肉質巨体をのっしのっしと相撲取りのように揺さぶり、ケーキをパクつと一口で食べ、珈琲を一気に飲んだ。亮子が勝手に描いていた、繊細で神経質な感じの詩人というイメージからは程遠い金田に、亮子は呆氣に取られ、挨拶もできずに呆然と眺めていた。

「森下亮子さん。ペンネームは？」

「え？ ありません」

「じゃあ、森亮でどう？」

「あ、それで結構です」

「うん。森亮さん、何か書いたものありますか」

「いえ、ないです。これから勉強させてもらいます」

「ふーん、ま、書いたもの見ると何とも言えんな」

叱られているような感じで、黙って俯いていると、金田の幾分しゃがれた野太い声が頭の上から降って来た。

「ええんじゃ。ええんじゃ。持論を振り回すより可愛い」

そつと顔を上げて見ると、他の人よりずっと大きな顔に黒い太縁の眼鏡を掛け、その中の眼がじつと亮子に注がれている。言葉に似合わぬその目の鋭さに、一瞬亮子はぎよつとした。「怖い人」という印象であった。雑談をしている二人のそばで亮子は落ち着かず、早く帰りたくてうずうずしていた。何時までも話していたい人よという橋井の評価とは違った。

例会は月一回、金田が住む川辺町のコミュニティセンターで開催される。常連は十名ほどである。会員はこの集まりを略して「川コミ」と言っていた。

月一回の例会。夏には納涼会、冬は忘年会、新年会、春は新作発表会など、長い伝統と共に作り上げてきた川コミ行事が詰まっている。会報（川コミ通信）は年四回各季に出す。会員の消息に始まり、順番に身辺雑記を書く頁があり、後半分は詩の発表である。年一度出す詩集「詩標界」の基になるもので、原案というか叩き台だ。これが出た段階で、例会は熱を帯びて来る。一遍の詩を組板に乗せたら、これでもかこれでもかと叩く。切り刻み、挟り出してのあら捜しである。

亮子は自分の作品ではなかったものの、初めてこの場面に接した時、作者はまるで被告人のようだと思った。些細な罪を犯した被告人に対して、あれかこれかと質問を浴びせ、告白を強いる。うまく答えられないと口汚くののしる。これでもかこれでもかと畳みかけて罵詈雑言が飛ぶ。堪えきれなくて泣き出す作者に向かい、勝ち名乗りを上げて鬨の聲が上がる。作品を提出するということは、ある意味生贄になって身を差し出すことなんだと亮子は理解した。逃げ出したくなった。が、踏みとどまらせる何かがあったのも事実である。

そして亮子はこの環境に慣れていった。この凄惨な会

を仕切るのは金田であり、頂点に立つのも金田だ。直接手は下さないしろ、金田の思惑通りに会が進行しているのも事実だ。金田の下に編集委員会という組織があり、古くて実力のある会員三名が編集委員である。三名は常に金田と行動を共にし、金田の手下と言ってもよかった。いやいや、高邁な理想を掲げて創作をする集団であって、やぐざの組織ではない。だが、傍観すると幾分そんな匂いを発する組織ではある。いずれにせよ、金田の存在は絶対的なもので、金田の振る首一つで会の意向が決まる。同人の運命がかかっている。

当時の「詩標界」は、全国的にも注目される存在であり、実力派と認められていたから、同人も「詩標界」に属するだけで気分がよく、詩人としてのプライドが持てた。地元新聞に月一度掲載される文化面のトップを飾る短い詩も、金田が推薦する作品であり、金田に好意を持たれなければ推薦されなかった。

新米の亮子が、小さくなって末席に座る。

隣の席の初老の女性が笑顔を向けた。

「あ、初めてなんです。よろしくお願いします。森亮です」「森亮さん。いいお名前ね。私は美紗。平凡でしょ。詩は

個性的であれと思ってるんだけど」

今日のテキストになる会報を急いで繰る。美紗を探す。

一週間程前に送られて来た会報を、亮子は覚えるくらい読んだ。発表されている作品は九編。美紗は確かあった。何か自分らしい感じの人間を花に例えて美化した作品で、美しい言葉の羅列だと感じた。この人は詩を誤解している、と生意気にも思った。それを今ここので言う勇氣も必要もない。名乗ってくれた社交辞令を含めて、あなたの作品は？ と探す振りをしたのである。

コの字形に十一名が席に付き、正面に金田と側近の河井がでんと陣どつて会は始まった。河井は切れ者らしく、会の進行が鮮やかだ。金田に挨拶をさせ、初めての亮子を紹介し、一人ずつ簡単な自己紹介を兼ねて今回の会報の感想を述べていった。

作品のない亮子は気楽に作品と作者を見比べながら、勝手な想像をして楽しんでた。察するに、六十代以上が美紗ともう一人の男性。五十代が金田と河井とその他二名。この辺りがこの会の主要人物らしい。あと、三十代四十代の中年層が四名。二十代は亮子一人のようだった。（何だ。年寄りばかり。若い人はいないのか）。ちよつと

した落胆が走る。

大学の文芸部は楽しかった。用があつてもなくても毎日部室に行つてお喋りをした。必ず誰かがいたし、やつて来た。それぞれが自分の赴くままに勝手なことをしたり、議論を吹っかけたりしていた。突然板書をして講義のようなことが始まつたり、いきなり相談がまとまって飲み会に発展したり。そんな中で文学論は若者を酔わせる要素に満ちていて、亮子は分からないながらも、誰かの受け売りにしろ、声に出して意見を述べたり、質問したりするようになった。そんな環境の中で、詩作の力がついたかと言えばそうでもなく、適当に場の雰囲気にあわせてテクニクと言葉を身に付けただけのことだと、顧みて思う。無事卒業して故郷の中学校に国語教師として就職でき、「親孝行ね」と褒められた。亮子は一人娘なので、両親は婿入りをしてくれる相手をあちこちに頼んでいるようであった。

「生意気な子で、可愛いげのない子ですけど、氣立ては結構いいし、家の仕事もようしますんじや」

母親は場を見ては亮子売り込んでいたようだ。

真面目に働き、物事に真摯に取り組む亮子はいわゆる

腕切れで、感がよく、何でもできて職員間でも重宝され、生徒にも一応人気があった。若い先生がいらないという環境もあって、亮子の周辺には常に生徒が集まっていた。傍観者として見ると、亮子はよく出来たい先生で、向上心に溢れ、将来を囑望されている存在であった。亮子自身そこところがよく分からないのだが、うまく受け入れられ、うまく適応し、他人からはいいなと思われる存在に見えている自分を、何処かで否定している自分に気付く。

(何か違う)(こうではない)と、否定する自身に気付いた時、亮子は戸惑った。素直であれ、と両親に大事に育てられ、ひと様にわるい印象を与えないようにと注意されて成長した亮子は、自分の身の処し方が分からなくなった。

亮子は無口になった。自分から動かなくなった。意見を求められても、「ええっと。あのう、そうですね、それは……」と、訳の分からない受け答えしかなできない。生徒が怪我をしたとか、保護者が来たとか、来客があったとか、今までの亮子なら、一番に動き、現場に走っていたのに、誰かが動くのを待ってからしか動けなくなった。その症状はゆっくりと現れたので、周囲が気付いた時は、「森下先生って変なの」みたいな評価が流れてしまっていた。

教員の世界も競争社会だ。積極的にああしようこうしようという意欲を無くしてしまった亮子にとっては、非常に住み辛い所となった。

一方、家は家で、一人娘としての期待、責任。家の跡取り、親の面倒を見る、墓守、家を継ぐなどの重圧がのしかかってくる。亮子は行き場を失った。美人で聡明で切れ者で優しいと噂された亮子先生は、いつの間にか愚鈍でぼろうっとしていて気が利かない、役立たずになっていた。

このままでは、私の人生はダメになる。何とか気付くことができた亮子は幸いだった。いやいや不幸だったかもしれない。このまま気付かずにはうっつと役立たずのまま、変な先生として一生給料をもらい続けることもできたであろう。一歩も二歩も遅れながら、何とか仕事をこなすことはできた筈である。だが、それは亮子のプライドが許さなかった。こんな状態で務めを続けるのは給料泥棒だ。生徒を冒涇している。もっと他に自分を生かせる道があるのではないか。この症状は教員が自分に向いていない故に、体が拒否して起こった症状なのだと自己診断をした亮子は、二年間務めた学校をあつさり辞めてしまった。

「まあ、何て勿体ないことを」

「転勤でもしたら、また新しい環境になって、うまくいくかもしれないわよ」

「辞めてどうするのよ。あなたに何が出来るの」

「そんなに真剣に考えなくても。みんなそれなりに辛抱してやってるんだから」

「優秀な先生になろうと思うから苦しいのよ。ほどほどが一番いいのよ」

などなど。直接、間接に、さまざまな評価や忠告が飛び交った。小さい時から賢くて可愛いくてお利巧さんだった亮子ちゃんが、著名な大学を卒業して両親のために故郷へ帰って来て先生になった。これは地元の人にとっては本当に嬉しい話で、美談でさえあった。その話題のヒロインが、どういう訳か突然挫折して辞めるとは……。

学校を辞めた亮子は、周囲の心配を他に自分で学習塾を始めた。きつかけは、勤めていた学校の生徒の中に、ちよつとした動機で授業から零れ落ちる生徒がいたことである。それらの子に働き掛けて補習授業のための塾を開いたのだ。月日を追うほどに亮子塾は評判がよく、実態に即した授業をしてくれて実力がつくつと、生徒が次々に集まってきた。手が足りなくなつて後輩を講師として呼び、

家の庭を潰して教室を四部屋作つた。高校進学のための塾のつもりだったが、必要に迫られて高校生のための国語教室も開いた。授業は午後四時以降なので、午前は自由に使える。亮子は学生時代のように読書をし、思いつくまま創作などして楽しんだ。要するに亮子は教員に向いていなかったのではなく、教員の組織に馴染まなかったのだ。

川コミ例会の後、飲み会がある。これは希望者だけであるが、特別な事情のある人以外は、出席して当たり前の会だと知る。初回、美紗の後ろにくつつくようにしておらず参加した亮子に向かって、金田のだみ声が飛んだ。

「亮ちゃん、ここへおいで」

見ると、自分の前の席を指さしている。

「ほら、先生が呼びよ」

頼りにしていた美紗が亮子の背を強く推す。隣りでなくてよかったと思ひながら、亮子は金田の前の席へ座る。「はい、亮ちゃん。今日の感想は？」

とつくりを亮子の前へ差し出しながら金田が問う。相

変わらず鋭い目だと一瞬怯えたが、度胸を据えて亮子は何でも来いというつもりで盃を受けた。

「は、有難うございます。とんでもない会に入ったと後悔しています」

一瞬、みんなの眼が集まる。

「ほう、なかなか面白い感想じゃ。とんでもないとはどんなところか」

「はい、皆さんの意見が鋭いので、私なんかが来る所ではないと思いました」

「ま、誰でも始めはそう思うよ。でもなあ、ほれが病みつきになるんじゃない」

そうだ、そうだとする領きがあちこちで起こる。

「まるで、罪人のような作者が可哀そうで、見ていられますでした」

勇気を振るって思ったままを伝えようと必死に食い下がる亮子に、「まあ、まあ」と酒を注ぐ金田。何とか自分の思いを伝えようと焦る亮子は、思わず盃を空にしていた。酒には強い亮子だが、自分の思いを伝えようと焦る余り、冷静さを失っていた。

緊張する中で飲んだ酒は想定外の早さで体を回り、亮

子は自覚しないままにたかに酔ってしまった。

気が付いたのは金田のベッドであった。あろうことか全裸だった。おまけに隣にこれも全裸の金田が寝ている。大騒をかいて。

亮子は跳び起きた。急いで衣服を身に着ける。ブラジャーのフックがうまく入らない。手がわなわなと大きく震える。何が起こったのか？ 想像にかたくない。しかし、何の記憶もない。とりあえず大急ぎで靴を履き玄関出る。初めての場所で、ここが何処かさえない。泣き出しそうになりながらとりあえず階段を降りて外へ出た。夜風が火照った体に心地いい。蛙が賑やかに鳴いている。周辺は暗い。街頭が侘しくところどころに点いているだけで、商店らしきものもなければ、身を寄せる灯りも見えない。亮子は途方に暮れた。

「ここは何処？ なぜここにいるの？ 何が起こったの」泣き出しそうになりながら呆然と立っている側に一台の車がすつと止まった。金田が降りてきた。金田に誘導されるまま亮子は助手席によるよと乗った。

黙ったままの金田に亮子は聞きたいことが溢れている。というより、気付いてからの状況から判断して、おおよそ

の見当はつく。金田の顔をひっぱたき、唾を引っ掛けて飛び降りたい気持ちで渦巻く。だが、亮子はじっとしていた。まるで呪文を掛けられたように身動きができない。金田も黙っている。暗い田舎路をしばらく走ると大通りに出た。大通りを十分も走るとT駅であった。人影はない。タクシーが所在なさそうに並んでいる。

「気を付けて。タクシーで帰りなさい」

金田が口を開いた。

亮子は黙ったまま車のドアを開け、車の中の金田に一礼をして、見送った。午前三時を少し回っていた。

亮子が「詩標界」に入会したのは爽やかな初夏の風が吹く五月だった。酷暑に悩まされた八月。忘年会を兼ねた十二月。そしていよいよ一年の集大成となる、今年の代表作を掲載しての「詩標界〇号」発刊となる。

初心者であり、大した作品ができていないこともあって亮子は辞退したのだが、金田の推しもあった、一遍だけ七行の短い詩を発表したのが、ついこの間のように思える。

夢、希望、批判、理想、幻想、反省、写実、発見、驚き、感動、などなど精神状況を満載して新刊本は船出をする。船出をしてしまえば行先は自由であり、何処へ留まり、どんな仕打ちを受けるかは未定である。作者の思わぬところで思わぬ評価を受け、人の賛辞を浴びることもあれば、一顧だにされず急流に流され消え去ってしまうこともある。一年という月日の中で、どれだけの人が「詩標界」を手に取り、その中の亮子の詩に目を止め、声に出さなくとも目で追ってくれ、心の中に漠然とでも、亮子の意図したことを受け止め、心の襞の隅にちょっぴりでも印象として残してくれることを期待する。全て未知数である。そんな危うい賭けのような、空を掴むにも似た実態のないことに、大の大人が真剣に精力を費やしていること自体、不思議なことではある。詩が読めなくても、まして書かなくても世の中の動きはなんら変わらないし、経済も動かない。だが、会員は真剣だし、真面目だし、いい加減に思っている人はいない。命の次に大事な存在として詩と付き合っている。四六時中詩が頭から離れないと言っても過言ではない。見る、聞く、食べる、触る、匂う、感じるなど、生活の全てが、最後は詩に繋がっているのだ。

「思いは広大に、表現はシンプルに」。金田の言う言葉が既に亮子に沁みついている。

「大げさな言葉は捨てよ。日常の言葉を大切に無駄なく、素直であれ」

折に触れて話す金田の詩づくりの基本みたいなものが亮子に伝わっている。なるほどと亮子と思う。

二年、三年と、同じような月日が流れ、何時の間にか七年の歳月が流れた。詩と縁を切って去って行く者は年に二、三名はいる。そしてまた、憧れに似た気持ちを抱いて入会して来る者もいて、うまく新陳代謝を繰り返し、「詩標界」は厳然と県下の文学界にその存在を示している。金田は相変わらず実力者であり、会員の動静に目を光らせている。

亮子も三十歳をいくつか過ぎ、会の中堅となった。

事務方も引き受け、金田の右腕としてなくてはならない存在に成長している。

金田の助手として重宝されると同時に、亮子は金田の愛人として認知されているようだ。顔前で、とやかく批判めいたことを言う人はいないが、陰へ回ると何をどう噂されているか想像に難くない。しかし亮子は意外と平気

だった。言いたい者には言わせておけの心境である。だいたい亮子は性根の座った男勝りの性格である。金田の愛人として見るならそれもそれでよし。むしろその立場を利用して優位に立てばいいと思う。七十歳に近くなつた今も、金田は厳然として頂点に立ち、会員を束ね、後継をという感じは全くない。その威力迫力は益々勢いを増し、怖い存在であると共に、認めざるを得ない実力者なのだ。金田に睨まれたらこの世界では生きていけない程の、驚異的存在であることに変わりはない。その愛人なのだから、亮子も実力以上の扱いを受け、周囲の畏敬の眼を集めているのは当然のことなのだ。

亮子は結構毎日が楽しい。一つのことを除けばだが。金田を通じて詩の世界は言うに及ばず、文学界での顔も利くようになり、全国的にも少々は名前が知られるようになり、その方面の仕事もたまにはある。県内では若手実力者として、中、高生のための夏季詩作教室を担当し、月一回新聞紙上に、募集した詩の選者として選評を書き、一般の講座も開いている。これは、絶対に金田の口利きがなければ獲得できない仕事であろう。だが、そのことでわざわざ文句を言う会員はいない。金田絶対の世界は未だ

揺るがない。愛人と呼ばれていることに、亮子は本当のところは抗議したい。それは誤解だと大声で弁明したい。が、亮子は抗議したり弁解したりするより、その誤解を甘んじて受け、むしろしたたかに享受していた。

金田に犯されたと思い込んだ亮子は、しばらくは放心状態となった。塾も「都合により」と、一か月閉じた。部屋に引きこもる亮子を、両親は、また何が起こったのかと氣遣ったが、誰に相談できるものでもなく、亮子は閉籠っていた。金田のあの大きな体に凌辱されたのだと思うだけで身震いが起こり、悪寒が襲う。しかし、未経験者ではあっても、何らかの変化が感じられて然るべきだと思ふのに、亮子の体にはなんの変化も起らない。意識がない中で何をされたのかと、局所を手鏡で写して見たり、手でまさぐってみたりはしても、何の変化もない。以前と全く同じの白く艶やかに光る肢体は、亮子だけの物としてそこに存在する。経験がないことだから、犯された後、体がどう変わるのかなどの知識がない。本屋や図書館でそれらしき記事を見つけては調べてもみた。

月のものも正常に訪れた。

「もしかして、あれは夢？ 妄想？」

余りの苦しさに逃げ道としてそんな結論を出そうとしている時、金田から分厚い封書が届いた。青いインクのだっしりとした、が、意外に優しい文字に、亮子は吸い寄せられるように封筒を開けるのもどかしく、貪るように読んだ。

「亮ちゃん。あなたのいない川コミは灯が消えたようで面白くありません。次からはぜひぜひ、来て下さい。

あなたに告白しなければなりません。言い難いことです、言わなければならぬことなので、勇気を奮って告白します。あなたには何もしていません。あなたの体を眺めただけです」

亮子はあつと驚く。先へ目を走らせる。

「私は一度結婚をしました、妻を愛することができず、早々に離婚しました。それ以来独身を通していますが、女性に対する憧憬は強く、特に美しい女体にはたまらない魅力を感じてしまうのです。しかし、私は所謂性的不能者というのでしょうか。眺め愛撫するだけで、それ以上に進むことができないのです。哀れな男なのです。こんなこと

亮ちゃんに言うのは非常に苦しいのですが、真実は言わなければなりません。安心して下さい。あなたの体は純潔のままです。朝起きたらゆっくり説明しようと思っていた間に、私は迂闊にも寝込んでしまい、失態を演じてしまいました。あの夜の亮ちゃんの体の美しさは、今も臉の奥に焼き付いていて、未だに私を悩ませています。許されるなら、これからも付き合ってもらえませんか。時々、一緒にいるだけでいいのです。あなたを眺め、そっと触れ、あなたの寝息が聞けたらどんなに幸せでしょうか。」

まだまだ続く長い手紙を膝に、亮子の体から力が抜けていった。思い悩んでいた結果が出た安堵感、とも言えない無重力で、頼りない感覚が体を抜けていった。

月一回の川コミ例会の後、恒例の飲み会で、正体なく酔った金田の世話するのは亮子の役目、と決まってしまった。何時から？ 誰が決めたの？ どうして？ 亮子は大いに不満であるが、当然の事実として、「じゃ、お先に」「後はよろしくね」と、みんな去って行く。時として二次会、三次会に発展しても、結果は同じである。亮子は

変に言い訳をしたり遠慮したりはしない。金田が誰かに真実を打ち明けている訳はないだろう。

過去にも金田と付き合っていた女性を何人か知っている。みんな美人で独身を通して。ぺちゃくちゃと井戸端会議的なことはしないが、必要な意見ははっきり言うタイプ。亮子もその範疇かもしれない。これは金田の好みでもあるし、本能的防衛心が、そういうタイプの女性を選ばせていたのかもしれない。付き合った女性たちが金田の悪口を言ったり、真実をぶちまけたりすることはない。短くて一年、長くても五年程で関係を切っている。金田は老人になっても、女性遍歴を繰り返すタフなダンディだと、世間は誤解している。

亮子だって、金田との関係を誰かに話すことはない。縁談を進めたい両親にも真実は言わない。金田と約束をした訳ではないが、二人きりの秘密は厳然と守られている。金田は本能的に、自分のマイナスになる女性は避ける知恵を持っているのだろうか

川コミの日は遅くなるのが当たり前と、両親は睥睨されている。一人前になった亮子に、もう両親の小言や意見は届かない。むしろ、名前が売れ、新聞紙上で活躍する娘

を自慢に思っている節さえある。両親と同じ敷地内に居ても殆ど顔を合わさず、勝手気ままに亮子は暮らしている。

いつものように金田の古びたアパートに行き、二人だけの時を過ごす。金田の気持ちはこの数年ですっかり読めているから、抵抗したり逡巡したりする方がみつともないとわきまえ、亮子は自分から行動に出る。

さつさと衣服を脱ぎ、シャワーを浴び、自分の持つて来た真新しいシーツをベッドに敷き、その上に堂々と横たわる。「さ、どうぞ」という開き直った気持ちである。

亮子に主導権を取られた金田は、ベッドの脇でじっと眺めているばかり。シャワーを浴びて心地よくなった亮子は眠くなり、目を閉じるところとする。体に異変を感じて目を覚ますと、金田がベッドと一緒に横たわり、亮子の体のあちこちを触っている。「爺さん、いい加減にしてよ」と思いつつも、習い性となった体は無防備に開く。母親に全てを預けた赤ん坊のように。

いつとき亮子の体を眺めたりいじったりして遊んだ金田は、得心して軒をかき始める。亮子は潮を見てタクシーを呼ぶ。朝までいたことは一度もない。これで今月のお勤

めは終わり、と衣服を纏いマンションを出る。首筋で一直線に切揃えた髪を夜風に靡かせ、ハイヒールで闊歩する亮子は、どう見ても立派なキャリアウーマンである。内面に、どうしようもない鬱屈を抱えた存在には見えない。

金田との間に金銭的なやりとりはないし、話題になったこともない。一緒に食事に行ったり、県外の温泉地へ出かけたりの経費は金田が持つが、一夜の行為に対する代償は？ ふと考えるとやりきれなさが全身を覆う。

こんなどうにもならない関係、何時まで続くのかなあと、漠然とではあるが、考えないでもない。過去の様子から推し計っても、亮子とが一番長い。言いたくはないが、そろそろお払い箱になってもいい時期が来ている。何処かで決着をつけなければならないと頭の隅で考える。が、それらしいことを口にする、金田は逆上する。金田は役者だ。暴力沙汰になるかと思うほどの脅し、土下座しての懇願、縋りついておいおいと泣く泣き落とし。あの手この手で亮子を責める。そんな後、亮子の詩が全国紙に掲載されたり、有名な詩人の評価を得たりとの、餡が与えられるそれが分かってくると無下に退けてばかりいても仕方がない。何か結論を出さなければと焦るが、無残にも月日だ

けが経つ。

どうしようもない苦しさに襲われた時、過去に金田が付き合っていたという女性の顔が浮かぶ。思い切って相談してみようか。相談とまではいなくても、この苦しみを話してみようか。同じ思いで愚痴が言い合えるかもしれない。が、いざとなると、思い切って連絡を取る勇気が出ない。直面して質問するのも憚られる。

（何とかしなくちゃね。このまま、私の人生終わらせる訳にはいかない。こんな爺さんの思うがままになって、一方的にサービスさせられて……。普通の男女の関係なら、結婚という手があるのだけれど、金田と結婚する訳もないし。はてさて……）

金田と過ごした前後に、亮子はいつものことながら結論の出ない将来について悩む。出口のない落とし穴にはまった感覚だ。相談する人は周囲に誰もいないし、所詮は他人事だ。自分のことは自分で解決するしかない。（どうしたものかな。何かいい方法ないかな。金田を傷つけず、私も損をしない良策は？）亮子は頭を抱える。

「先生、来月の新聞は、美紗さんでいきましょね」

編集会議での亮子の意見に河井が難色を示したが、

「はいはい、それでいきましょ」

と、金田は機嫌がいい。ちっと河井の舌打ちが聞こえた。

「もう、先生、ボケてきて、亮ちゃんのいいなり」

という陰口があちこちで聞こえる。

亮子は「詩標界」が末路に入り込んでいることを漠然と感じている。（何とかしなくちゃ）と思う一方で、（私の知ったことではない）とうそぶく自分もいる。何人か優秀な会員が抜け、編集はベテランの河井以外は、亮子と新人になっている。パソコンが導入され、印刷やら製本など、自分で手軽にこなす人も出て来た。本を作る、ということが、そうたいしたことではなくなっていた。

七十歳を超した金田は時代を読むのが鈍く、何かと取り残される。舌打ちをしながら河井が埋める。河井も次期主宰といわれながら、だからと金田に付き合って、無駄な時間を費やしてしまったようだ。さっさと見切りをつけて新天地で活躍をしている元会員もいる。若者が入って来ないので、会の平均年齢は上がる一方だ。「若々しくあれ」と言われても、とうてい無理な老人の会になりつつ

ある。

「いいんじゃないの？ 私はここが好きだから、金田先生や亮ちゃんと運命を共にするわ」

八十代に入った美紗は、少しも変らぬ以前のままの態度で、進歩もなく後退もせずに励んでいる。

八月の暑い盛り。川コミ例会はなんとか終えたが、恒例の飲み会はお流れとなった。前代未聞の感染力の強い新型コロナウイルスが世界中に蔓延って、医療界は崩壊寸前の状態。日々の感染者数の多さに国民は怯え、なす術もなく縮こまっている。飲食を伴う会合は自粛との要請で、金田といえども禁を犯す勇氣も必要もなく、陽の未だ高い小径をマンションに向かった。亮子が従う。

「先生、鰻でも食べにいきましよう。疲れたわ」

「うん、ええなあ。何処にする？」

食欲旺盛な金田はすぐ賛成する。

「はい、今ネットで調べて予約入れました」

「なんと手回しのええこっちゃなあ。亮ちゃんとおったら不自由せんわ」

「そうでしょう。先生、私を養女にしませんか。便利ですよ。そしたら私、先生ではなくて、お父さんって呼べるし、ずっと一緒にいてもいいし、誰か結婚相手も探せるし」

亮子は何でもない感じで、さらりと切り出した。

金田の足がふっと止まった。組んでいた腕を亮子がぐいと引っ張る。金田は思い直したように、巨体を載せた足をのろのろと動かして歩き始める。

金田にとって、今や亮子ではなくてはならない存在、かすがいいのだ。亮子がいないと金田という母屋は簡単に崩れる。それが分かっているだけに亮子の態度は大きい。金田の一言で震い上がる会員を尻目に、むしろ金田を動かしているという自信すら見られる。が、一方で、金田の存在なくして自分は成り立っていないことにも亮子は気付いている。亮子にとっても金田はかすがいいになっていたのだ。

金田に利用されている、サービスをさせられている、私の一生を食い物にしている、とまで思い詰めても、金田のいない日常は、もう亮子には考えられない。金田というかすがいを失えば、亮子という実態はがらりと崩れてしまいかもしれない。

コミセンを出て、高層マンションが何棟か沿って建つ蛇行する細道を、古いアパートに向かう。

始めて訪れたあの日、まだ周囲には田んぼがあり、蛙が鳴いていた。田んぼの中に立つ三階建てのマンションは、結構レトロな特徴があつて目立っていた。

今、眺めやると、無作為に建て込んだ高層マンションや賃貸住宅に埋もれて、三階建てのアパートは所在さえ危うい。耐震が十分できていないとかで、まもなく退去命令が出るという噂もある。新しい住人が入らない古いアパートは、住人と共に古び、修理もしないから哀れな様相を醸し始めている。四十年近く住み慣れた金田も、早々に出ていかなければならないだろう。

金田が自分の生活に直結することを語ることはない。将来についてというか、やがては訪れる老いの行く末について、持てる資産について、その行方について、等々。どう考えているのかは誰にも分からない。一番身近にいる亮子にも不明だ。裸の王様になるまで、金田はこのまま、ただただ君臨し続けるのだろうか。

「ねえ、先生。私を養女として、正式に入籍して下さいよ。そしたら、先生は私のお父さんになるんやから、老後の世

話してあげますよ。ね、お父さん」

冗談めかして言いながら亮子の眼は真剣だ。これが一番いい方法だと、考えに考えた結果である。

金田は亮子の意図が分かつてか分からずか、黙ったまま重そうに足を運ぶ。心なしか、亮子を振り解いて先へ行くこうとしているように見える。

「ね、お父さん。いい考えでしょ。そしたらずうっと一緒にいてあげられるわ」

聞こえているのかいないのか。金田は何の反応もせず、前を向いたまま進む。

ここで引いたら私の負け。負けてみじめな立場になる自分を思えば、絶対「うん」と言わせなければならない。先を行く金田に取り縋るように腕を伸ばす。

マンションが取り壊されたらかすがいはもう必要なくなるのだ。毀された家のかすがいなど不要で邪魔なだけだ。しかしその事実には亮子は気づいていない。

家の建て込んだ路地から、地熱をはらんだ熱風が、二人を巻き込むように絡みながら吹き過ぎていった。

了

桜雨

渋谷 政子

師走にはいった。

ここ一週間あまり、雨は降っていない。

夜明けが遅くなっている。

六時過ぎではまだ薄暗く、台所に立つのも少々気合を入れなければ億劫になる。

湯を沸かす。この家に電気ポットは無く、ガスコンロに濃柿のほうろう引の小さなやかんを乗せて点ける。湧いたら白湯をカップ半分、飲む。木綿子の朝は、それから始まる。

眉山の塔のあたりから、ようやく陽の光が射し出して、稜線がくっきり見えはじめた。襟元をかき合わせながらヴェランダに立ってみる。花壇と菜園の境に植えた、染井吉野桜が随分と大きくなっていた。二階の、この位置から見ると、手を伸ばせば小枝に触れそうな程になっている。もう老木かも知れない。僅かに残っている桜の葉が紅葉

しているのを見つけた。それもやがて、散るのか。

老いて住むには広すぎるこの家で、今日もゆるゆると過ごさなければならない。

古民家ブームだという。

むかしながらの、建築様式と資材を使用して造られた家屋。過疎地と呼ばれて荒廃も避けられないそれらの空き家に再び人が住む。傷んだところに手を入れ繕いもう一度、丁寧心して住んでみる。

人は、一度手にした利便さを容易に手放せない。だが、そのことに一抹の不安を覚えることはないだろうか。

良くも悪くも、人生の大半をがむしゃらに生きてきた数多の人々。来し方を振り返ってみて思うことは無いか。棄ててきたものを愛おしく感じることは、ありませぬか。人も、物も、そして自らの在り様も。

小学一年生の木綿子は、朝から落ち着かない。今日は学校で「学芸会」があるのだ。

学校のひろい大きな講堂の舞台に上がらなければならぬ。

「絵日傘」という踊りをする。

振り袖を着て、六人で踊る。

「間違えないで踊れるだろうか」

「日傘を上手く曲に合わせて回せるだろうか」

「よその子の着物の裾を踏んだりしないだろうか」

木綿子のころの中には不安が充満していた。

あの頃の学校行事の中で、秋の運動会と並んで、節分過ぎに行われたこの学芸会は、地域の住民挙げての「お楽しみ会」だった。子供のいる家はもちろん、いない家庭の人々も、お重に食べ物を詰めて見物に来ていた。

この木綿子の学年は生徒数が少ない。太平洋戦争が終わった前後に出生した子らなのだ。この時代、大抵の学年は三学級だったが二学級しかない。ふた学級あわせて七十二人前後で、心なしかひ弱な感じがした、と後の担任教師が言っていた。

絵日傘は可愛らしかったとほめてもらえた。お世辞だとしても木綿子は満足感いっぱいだった。

学芸会の幕あいに、洋服に着替えて家族の待つ見物席に行く。お弁当の時間だ。朱塗りの重箱に木綿子の好きな物が並んでいる。やはり黄色の甘い卵焼きが一番好き。

昭和二十年代、卵焼きはご馳走だった。どこの家庭でもニワトリを飼っていた。ただ、生みたて卵をその家で食べるというより、小商いの、幾ばくかの金銭に代わったほうが多かった。

木綿子の家の生業は、農機具販売と小さな鉄工所を経営していた。

旋盤加工でできる、らせん状の渦巻き線、溶接のガスバーナーの青い色と匂い。そこには紛れもない新しい時代の息吹が満ちていた。

木綿子には、その渦巻き線をいくつも重ねて布紐に通し、遊び仲間とジャラジャラ、鳴らしていた記憶。他愛もないが結構、飽きずに振っていた思い出。

学芸会は小学生の間、ずっと行われた。二年生の時は「牛若丸と弁慶」の舞踊劇。木綿子は牛若丸。弁慶は土地の薬局屋の男の子。ずっと後に薬局屋は跡を継ぐ人がお

らず廃業したと聞いた。三年生の時は「元禄花見踊り」七人で舞う。赤色の着物に黒色の縹子織で文庫結びの帯、という本格的な衣装だ。その年は、学校創立八十周年記念行事の一環として開催された学芸会だった。小学生にとっては少々難易度の高い日本舞踊だったのかも知れない。稽古は相当厳しかった。稽古を一任された先生ふたり、九歳の子供相手に奮闘していたと、保護者の母親たちはありがたがっていた。あの時代、教師は尊敬されていて、先生の言うことはなんでも正しいと、子供には言う。「聖職者」だったのだから。

新任教師の女先生は、趣味で日本舞踊を習っていたらしく、こころ腕の見せ所とばかりに稽古をつけた。手で回す蓄音機から流れる曲を何回も聴かせ、「身体に染み込ませなさい！」と叫ぶ。

造花のさくらの小枝を持って踊る子と、金銀表裏の舞い扇で踊る子と。木綿子は扇を持って舞った。「指先までちゃんと気持ちを込めなさい」。あの時の、あの、狐目をした細面の先生の叫んだ言葉が、何故か今でも忘れられない。……ちゃんと気持ちを込めなさい、と。いまでも迷いが生じたとき、呪文のように唱えている自分がいた。

四年生になって、初めて音楽劇を学年全体ですることになったのだ。演目は「シンデレラ」。

主役のシンデレラは、木綿子のクラスからは選ばれなかった。王子さまも選ばれなかった。担任が男先生のクラスから、どちらも選ばれたのだ。

木綿子のクラス担任は、新卒採用の女先生だった。そのことが影響していたのだろうか。ひそかに期待していた木綿子は、シンデレラをいじめる継母の妹娘の役に指名された。家に帰った木綿子は母の膝に顔を押し付けて泣いた。もう学校へは行きたくない、としゃくりあげながら訴えた。学芸会ではいつも花形で、踊りの時でも「芯」だったと自負していた木綿子。決め、のところでは、ひとりで真ん中だったり真ん前だったり。

母は、そんな木綿子のちいさな背を撫でながら「でもなあ、ゆっこ。ゆっこの役が無ければシンデレラはだけへんで。もし、ゆっこがやらなかったらきつと誰か他の子がすると思うわ。それでもええんか?」。

あくる朝、木綿子はいつも通りに学校に行き、新卒先生の歌唱指導を頑張った。女先生が喉にいいからと皆にキヤラメルを配ってくれたのも、嬉しかった。初めての音楽

劇は大成功で、それまでの学芸会で一番多い拍手をもらったと、先生方は興奮して喋っていた。そして木綿子にとって、シンデレラの役になった子との友情は、その子が三十歳過ぎに胃癌で亡くなるまで続いたのだった。あの子に代わる友達はいない。

五年生、六年生での学芸会は洋舞で、「花のファンタジー」と「アラビアの旅人」だと記憶している。木綿子にとっては心の底にしまっている愛おしい思い出なのだった。

寒くなってきた。

冬らしくなってきた。

今日は、蔓遊びをしよう。

夏の終わりに少しづつ採取してきた山野の蔓ものが細工し易くなってきたのを、昨日知った。ふじ・あけび・くず・つた。剪定した葡萄の細めの枝も良い材料となる。ふじなど、太く、硬いものは睡蓮鉢の水に浸けておいた。

晩秋の頃から季節らしからぬ気温だったので、そのまま浸け続けておいたが大丈夫だろうか。元の硬さに戻ってはいないだろうか。厄介なことになっていたら如何に

しようか、等々気をもみながらの、作業開始だった。

今日は、野菜入れをつくる。

家庭菜園で出来た野菜を収穫して、台所に置いておく用の籠を編む。

本格的に蔓籠作りを習ったことは無い。けれども、子供の頃から周りの大人の誰かは、何かしらの手仕事をしてきた。それを眺めているのは、子供同士で戯れ遊んでいる楽しさと同じくらい面白さを、木綿子に与えてくれた。居間から「つるあそび」というタイトルの手仕事シリーズ本を持ってきた。

今年の梅雨あけ宣言後のある日、術後検診におもむいた。心臓の開胸術を受けてまる二年が過ぎた。ほぼ、五カ月に一度の頻度での予約検診だ。

血圧・体重・身長測定

血液検査

心電図検査

胸部レントゲン

心臓超音波検査

を受ける。

毎回、検査疲れて「もう、いいのに」と思ってしまう木

綿子。ただ、今回の検診では少し担当医師から注意を受けた。軽度の三尖弁逆流と肺高血圧の所見が認められるとか。

仕方ないです。

もう、入院も手術もいたしません。

このままでいいです。

そんなことがあって疲れたけれど、たまの外出だったもので本屋に寄った。やはり、本の匂いは、いい。落ち着く。

木綿子は、書架に整然と並んでいる本の背表紙を一つ一つ確認しながら、好みの本を探すのが好きだ。この頃は回転が速すぎて、じっくり読み手を待ったり、地味な作風の作家の著作物を息長く、並べておいてくれるという良心的な店は少なくなっている気がする。膨大な数の著作物は、いったい何を世に問うているのだろうと。日々、新聞紙上で出版物の広告を目にする度に思うのだった。

その日は、新書判、文庫本、単行本、それに園芸、手仕事入門書等々八冊を買った。とても嬉しい。早く、家に帰りたい。

「つるあそび」の本は、その時に買った。藤蔓を使ってみ

よう。

まずは底から編む。井げた組にした蔓を、ざる編みで好みの底のひろさ分、編んでいく。

適当に編んでいくのが木綿子のやり方だ。なんとなく、籠らしくなっているではないか。胴の部分も編んで編んで……。

珈琲を淹れる。

先ず、湯を沸かす。

豆を挽く。

木綿子は、二度挽きが好きだ。

一度目はガリガリと、二度目はザリザリと香りながら粉になる。

濃く淹れた珈琲は、微かな秘め事を孕んでいるように小さく揺れていた。はやく、飲み干さなければ。

年明けに、思いがけず小学校時の同窓会の通知が舞い込んだ。発起人の名前に記憶が無い。けれど、引越して二度した木綿子の住所が正確に記されている。もう何年か開けたことの無い、骨董ものの和筆筒の観音びらき戸

をひろげてみた。古い写真の何葉かが入った箱があるはずだ。箱は、華やかな艶紙で装丁され丁寧に仕舞われていた。

この艶紙には覚えがあった。

「なんばのおじちゃん」が大阪土産に呉れた物の中に入っていたものだ。もう半世紀以上も昔のはなし。

叔父さんも、もちろんもういない。

木綿子の小学校の卒業アルバムは無い。全員の集合写真が二枚あるだけだ。金刀比羅さんへの修学旅行記念撮影、卒業間際に校舎の正面玄関前に全員が整列して写したものの二枚きり。

七十二名。

ひとり、ひとり思い出してみる。名前の思い出せない子も何人かいた。この子、誰なんだろう……。

数日後、一番近場にいる幼馴染から電話が掛かった。勿論、小学校の同級生の女の子。

馴染み言葉で話す。

発起人が判明した。

その子は養子に行き改名までしたんだと。そりゃあわかりません。おまけにあの頃は、疎開児童だったらしく、

中学校は他県で行ったとか。この年齢になって、しきりと子供の頃の出会いが懐かしく思い出され、もう多分最後になるだろうと、この同窓会を思いついたのだとか。なんだか木綿子の近場の女の子は、そんな情報をよく知っていた。

そんな事情なら、なるべく声かけて、それなりの同窓会にしよう、と電話口で近場の幼馴染と話し合ったのだ。

同窓会の開催時期は春。場所は「千本桜」。

小学校の近くに「千本桜」とよばれていて、花の頃には近在から大勢の人が見物にやって来るような花見所がある。

元々は、県の家畜研究所の敷地内だ。

木綿子達が小学生の頃には、一年生の春の遠足の定番だった。子供の足で歩いて半時間もあれば行きつく場所だったので、引率も容易だったのだろう。昭和二十年代、自動車が道路を頻繁に走ることは未だ無い。ただ在所だったので、毎日研究所の横を通って学校に来ていた子供には受けが良くなかった。まして、その敷地内にある官舎

に住んでいた家庭の子から見れば

「自分の庭に来てみたい」と、嘆きの声しきり。

それでも、空いっぱいの桜の花の下で頬張る遠足弁当は、美味しく、嬉しいものだった。

あの頃、桜まつりが、地域の青年会、婦人会、商工会などの活動団体の呼びかけで開催されていた。日曜日など、人出の多い時には露店なども出て賑わっていた。花見のための敷物として、婦人会が「むしろ貸し」をしたりしていた。結構繁昌していて、母親についてきていた子供たちも、手伝っていたりした。天気が良く、花も見ごろで、仕事も休みがとれた日には、大勢の人がこの「千本桜見物」にやって来たものだった。

今、この賑わいは、無い。

研究所も管理がきつくなり、敷地内には申し出がなければ入れない。家畜への感染予防のためだそう。花見も決められた場所でのみ、許可されているという。ただ、牛などの放牧場があるために構内はひろく、花の咲きさまは外部からでもよく見てとれた。正門前の旧道沿いには研究所の牧草地があり、道との境目として桜木が植えられている。そこは地域民の優雅な散歩道として、今でも親

しまれているのだった。

声かけが功を奏したのか、卒業から六十年余も経っての同窓会にしては参加者が多かった。無論、おおかたの同級生は、小・中学校と同じ顔そのままの進級で、馴染みの顔ばかりだったのだが。

卒業生、七十二名。既に鬼籍入りしていた者十名。但し、当日までに確認できた者。

配布された名簿に記されていた備考欄記。

完璧な事務方処理能力に、ただ、脱帽。

何というか・つまりは木綿子の個人的な資質の問題なのだが。ほとんど、似た空間で育って来た者ばかりの空気の中は、息苦しい。無論、共通の風景・似た体験・遭遇した出来事など、共鳴しあえる事象も多々あるのだけれども、それで、癒されることは、無い。人の出会いなど、たいていは、たまたま、又は偶然の成せるところのもの、と考えている。

会わなかった時間は、とても混沌としていて他人の入り込む隙間など無いのではなからうか。真偽の確認作業

に見える懇談に、入り込めない木綿子なのだった。

会の始まりの時、誰かが「あとで千本校見に行こう」と言い出した。同窓会の会場は、この町に最近でできた宴会レストランだったので、送迎サービスで移動ができるらしい。今、桜の花は見ごろだろう。平日だから大きな込み具合はないだろう。いいかもしれないね。

同窓会に遅れてやって来た子がいた。

充分、立派なおじいさんだ。誰？。でも、通知をひらひらさせて笑顔で空いている席に割り込んできたのを見て、同級生だとわかった。ラフないでたち。人目には、もう私たちは紛うかたなき「老いた人」、に見えるのだということとを再確認した木綿子。その子の出現によって、再度、乾杯の音頭があげられた。

宴会後のお花見は、それぞれの思い出を語りながらの散策路となっていた。

同窓会がすんで、いつもの暮らしの時間が戻ってきた。家の桜も今がさかり。

枇杷の木の下に蔭の葉が重なり合うように生えている。茎の匂は、もう終わりかも知れない。我が家の蔭は早生蔭

だそうで、蔭のとうなども随分と早い時期に出る。早生蔭だといわれるだけあって、野の蔭より葉柄も太く長い。温室栽培されている蔭と野蔭との、丁度なかほどの大きさか、と思う。

茎の柔らかさそうなを選んで来よう。

春の名残りの味を、桜の花を見やりながら頂くことにした。

一通の手紙がきた。

やはり、あの子からだった。

同窓会に「遅れてやって来た子」だ。

シンデレラの王子さま。

小学校卒業以来初めて会った。あの子は、あの頃、県都にあった付属中学校に行っていた。あの子の家は、町で一軒だけの薬局屋を営み、父なる人は町の教育委員長だったと記憶している。学校行事の折には、いつも壇上で長々と喋っていたのを思い出す。校長先生が、何故かその人の後ろに従うような恰好で、学校の廊下を歩いていたのを見た時、とても不思議だった。校長先生より、エライ人、がいるんだなあと。

あの子の父なる人は、町の「名士」だったのだ。名士の

子は、付属に行った。

で、何故、今、木綿子に手紙なのか。

あの日、同窓会の日、千本桜を見に行った時にあの子から声をかけてきた。

「ゆっちゃん？」って。

宴会の席では離れていたので会話はせずじまい。木綿子は、みんなと話していたあの子を眺めながら、確信していた。絶対、弁慶と王子だと。おじいさんになっているけれど、あの弁慶になって、京の五条の橋の上、で牛若丸の木綿子になぎなたを振りかざした子に違いないと。

他愛もない話をぼつぼつ喋りながら、ふと

「シンデレラは亡くなったのか」と聞いてきた。そう言えば、この日、ここにいる大方の同級生たちは、そのことを知っている。みんな地元中学校に行ったから。

木綿子は遠い目をして、そうだと答えた。

いつだったのか、とか、どうして、とか聞いてきたけれど詳細には話せないまま、その日の会は終わったのだった。

木綿子にはその子の動揺ぶりが理解できなかった。た

だ、小学校が同じだったという関係だけではなかったのだろうか。その時、そんなことをほんの一瞬おもってはみたが、それだけのことだった。

あの日から、僅か半月後の手紙だった。

その子は、木綿子に又会えないか、と聞いてきた。シンデレラのことを教えて欲しいと書いてあった。少し、面倒だなと感じたが、県南地区から二時間余もかけてやって来るといふその健気さに、会う約束をした。

その子の生家はこの町にまだある。

旧家として、広大な屋敷も残っている。ただ、誰も住んではない。その子には兄と姉がいて、二人とも医者になり信州と山梨に住んでいるとか。複雑ないきさつがあるようだが、人の選択はそれぞれだと思ふ。本人が納得して決めたことなのだから。

自分の生家がありながら、その子は南の海沿いの小さな集落で暮らしているという。子供の頃からのあこがれで、決めた。今、生家は遠い親戚筋がおおまかな管理だけ、してくれていると話していた。そんなことだけ、同窓会の散策の折に話してくれた。

ふたたび、あの子と会う。

こんな田舎に珍しい、昔風の茶房があった。

木綿子の馴染みの店だ。

簡素な作りのお店だが、質の良い材木を使っているらしく、いつも澄んだ空気が流れていた。

飾り絵は無い。

ただ、入口近くに桧の一枚板のテーブルがあり、そこに真っ赤な薔薇の花が活けられていた。いつも、赤い薔薇だった。以前、店のマスターに「意味はあるのか？」とすこしぐりをいれたけれど、ただ笑っていただけだった。木綿子もマスターも、ながい馴染みの分だけ共に歳をとったね、と笑いあうのが挨拶がわりになっていた。

カウンターから離れた奥のテーブルに座る。

木綿子は香り立つ珈琲にすこしだけ、砂糖をいれた。今日はそんな気持ちになっていた。

あの子に、どんなことを話せばいいのだろうか。あの子はどんなことが聞きたいのだろうか。思案しながら、カップにスプーンをそっと差し入れた。

シンデレラを演じた子は、文子という。七月は陰暦で「ふみづき」だからと、七月うまれのふみさんは少し嬉し

そうに言った。四年生の学芸会からふみさんと仲良くなった木綿子は、よく山すそにあるふみさんの家に行った。その家には、いつの時期にも花が溢れるほどに咲いていたのが不思議だった。ふみさんには四人のお姉さんがいてあの頃に流行った、洒落た女性誌を読んでいた。お姉さんが留守の時にふたりでよくみたものだった。綺麗な挿し絵の「ひまわり」とか「ジュニアそれいゆ」とか。「それいゆ」とはフランス語で「太陽」のことだと、その時に知ったのだ。

なんだか田舎のそれも山近くの里だったが、ハイカラな文化の匂いがしていた、そんな家だった。ただ、その頃、ふみさんのお父さんは病氣勝ちで、勝ち気なお母さんが頑張って働いていたようだった。やがてお姉さんたちは、結婚したり、教職についたり、東京に出たりとそれぞれに家を出ていった。

その後ふみさんの家は、両親とふみさんと弟の四人家族だけになった。弟は、ふみさんのふたつ下。ふみさんが中学校を卒業する間近になって、お父さんが亡くなった。ふみさんは、高校を普通高から工業高に進路変更をした。大学進学をあきらめたのだった。

同級生七十二人中、一番か二番の成績だったふみさんにとって、辛い決心だったろう。高校教師になるのが、ふみさんの夢だった。

あのころ、郡部の田舎中学校から県立の工業高校に進学する女生徒は、稀だった。結構レベルは高かった気がする。昭和三十年代のはじめには、中学校を卒業してすぐに働きに出る子もまだ多くいた。やがて彼らは、集団就職だとか金の卵だとか、この国の戦後復興の要になっていく。それがこの世代の、時代に背負わされた宿命なのかもしれない。この地方のほんの片隅にも、時代の流れの兆候が見えだしていた。安保闘争とか学生運動とか、社会のあらゆる不合理に対しての闘いが勃発したのは、その象徴だったのではないだろうか。

茶房での会話。

そう、ふみさんとはよく会っていたんだ。

うん、汽車通だったからな。

始発駅だったから大体同じ席だよな。

うん。

いつも何、話してたの。

学校の行事とか、先生の気になる癖とか。

それだけ？

うん、それだけ。

ふうん。

あの、黒いけむりを吐き、すすをまき散らしながら走る蒸気機関車を木綿子も思い出していた。朝晩の通勤通学時に走っていた。混雑する時間帯が過ぎたら、ディーゼル機関車にかわっていて、それが不思議だったりしたものだ。

あの子は、自分からは、話し出さなかった。

ふみさんが高校にはいつてすぐの身体検査で、肺結核に罹患しているとわかった、ということ。すぐに、休学してサナトリウムに入ったということなどをいつ、知ったのか。

木綿子には、中学三年時の担任教師から連絡があった。多分、ふたりの親密さを知っていたのだろう。むかしの学校調査などには、よく あなたと仲の良い人はいますか。いればその人の名前を書きなさい などというのがあって、正直に書いていたりしたものだ。それがなんの役に立つのかは、未だにわからない。

あの子は、言った。

附属中学校だったあの子は、京都の県立普通高校に行くことが決まった。汽車通学には慣れていた。小学校時代に仲間だった子が何人も汽車通学するという。みんなは初めてと言っている。ひとり、浮いていると感じた。そんな時、ふみさんが声をかけてきた。

わたしのこと、覚えてる？ と。

ふたりにとつての共通の思い出といえば、あの、学芸会の劇しか無い。

些細なこと、可笑しかったこと、嫌だったこと、嬉しかったこと、楽しかったこと。思いつくままに喋りあつて時を過ごしていた。

それがほんの二週間もしないうちに、ふみさんの姿を見かけなくなつて、誰に聞いても要領を得なかった。そして何も分からないまま高校二年生の終わり頃から、下宿生活を始めた、あの子は今、話してくれた。

それから当然のように、誰にでも起こり得るさまざまな出来事が、それぞれに生じつつこまで来た、ということなのだろう。

ふみさんのたぎるほどの恋情。幸せな結婚。穏やかな

日々。思いがけない癌疾患。再発。

過酷な闘病生活。生を願う執念。遺児となる子への祈り。ふみさんは結婚後、滋賀に住んでいた。夫の勤務地だった。「国内留学」という制度があり半年くらい別居暮らしをしていたこともあった。その時には、娘ふたりと共に実家で暮らしていた。上の子を、地元の幼稚園に通わせていたりして、いつも明るい笑顔の元氣なふみさんだった。時折り、幼馴染の数人とおしゃべり会をしたりして、手製の蒸し菓子などを振る舞ってくれたものだ。

中学校卒業後、初めての同窓会は二十歳の成人式後だった。それから十年後に開催された同窓会に、もうふみさんは出席できなかった。お盆の頃、京都の病院で再発した胃癌と戦っていたふみさんを、いまでも木綿子は思い出すことが出来る。ふみさんの弟に乞われて、木綿子と一緒に病院までいったのだ。もう、最後だとおもった。ふみさんの生きている姿を見るのは、これが本当に最後だと。

ふみさんの親族の、悲鳴のような泣き声を、病室と控室との境のガラス戸越しにききながら、いつ、ふみさんの傍らに行つていいのか木綿子は判断しかねていた。誰も、海を越えてはるばる京都までやつて来た他人を、氣遣った

りしてはくれない。そこに、このこついて来た自分の滑稽さに、呆れていた。漸く誰かに促されて病室に入ってしまった。

「ゆっちゃん、声、かけてやって」 ふみさんのお母さんが、そう言う。「ふみさん」と耳元で言ってみた。「あらっわかったんじやろか。ふみこ、なみだ出ているわ」。

しらしらと夜が明けてきた。

始発の電車が動き出した。

難波に叔父が住んでいる。これから叔父の家まで行く。そこで少し休ませてもらって和歌山港から船に乗り、家まで帰ろう。疲れた。

叔父の家に着いた丁度その時、叔父んちの電話が鳴った。ふみさんの最期の知らせだった。京都の病院を出るとき、叔父の家の電話番号を書いたメモを、弟に渡しておいたのだった。これで、良かったのだと思ひながら受話器を置いた木綿子なのだった。

千本桜は散り初めでした。

もう、幾日も経たない間に散ってしまうだろう。

茶房で、ふみさんのあれこれを聞いたあの子は、穏やか

な顔をみせ、帰って行った。

気を付けて運転して帰ってね、と木綿子は角を曲がりかけた車に、ちいさく呟いて見送った。

そして木綿子も帰宅した。

簡単な夕餉の支度をして、また、つる編みを始めてみる。葡萄のつるの束をほどく。

外は、仄暮れていた。

庭の桜の花びらが微かな風に舞っている。

我が家の桜も散り初めているのか。やがてまた来る春には、枝がしなるほどに花蕾をつけて咲かせてくれるのか。その時に、この身はここに在る、だろうか。

ふいに小雨が落ちてきた。

桜雨。

散り敷くばかりの花びらは、おりからの桜雨にしとど濡れつつ、やがて土になる。

了

カーテンの隙間から……

高木 純

カーテンの隙間から朝陽が差し込んでくるころ、目覚ましのラジオがなる。ぼんやりと六時のニュースを聞きながらベットから起き上がる。少しばかりよろめきながら窓に近づきカーテンを開ける。体いっぱい朝の陽射しを浴びる。今日もいい天気だ、空が青い。

ガラス戸をあけたら、家の前にある森から小鳥の鳴き声が聞こえた。ラジオを止め、耳を澄まして鳥の声の方向を探してみる。あの桜の木の方から聞こえる。今度は目を凝らして鳥を探す。いた。一羽。あの鳥はエナガだ。雀より一回り小さくて見つけにくい小鳥だが、このエナガ、尾羽が長いのですぐに分かる。一羽見つけるとすぐに二羽目も見つかり、さらに三羽目四羽目と群れているのが分かる。さらに、桜の幹で黒っぽい鳥がちよこちよと動いている。あれはコゲラだ。キツツキの仲間で、日本で一番小さい種類。雀ぐらいの大きさだ。

コゲラを見ると、なぜか縁起がいい気分になり、その日何かいいことがありそうな気になる。自分で勝手に作ったジンクスだが。そう思うとちよつとしたことでも、いいことのように思えた。例えば、朝ご飯の目玉焼きがちよつどいい半熟に焼き上がっていたこととか、車で出かけたとき、初めての交差点を青信号で通り抜けられたこととか、そんなたわいのないことがコゲラのおかげと思う。

定年退職してもう三年。再就職などせず、気ままな田舎暮らしをしようと東京から、生まれ故郷の徳島に帰ってきた。幸い、亡き父が残っていた土地があったので、そこに平屋建ての小さな家を建てた。

妻と二人だけだ。大きな家など必要ない。二人の寝室とリビングに客間、あとは台所と風呂、トイレがあれば充分だ。そのかわりと言ってはなんだが、リビングの窓の外にオープンデッキを作った。南側だから冬はひなたぼっこ

ができるし、夏はタープで日陰を作って涼むこともできる。そして家の周りは庭ではなく畑にした。家庭菜園を楽しもうと考えたからだ。野菜だけでも自給自足ができたら、面白いのではないか、そう思ったからだ。

だが、思い通りにはいかなかった。家が完成して引越した矢先に体調を崩した。ひどい頭痛に見舞われ、病院に行ったところ脳に腫瘍があった。

まだ大きいので抗がん剤治療と放射線治療で治ると言われたが、これが苦しかった。ふさふさとしていた頭髮は全て抜け落ち、七十五キロあった体重は五十にまで落ちた。顔が痩せ、目が落ち込んで、恐ろしい顔になった。生きているのに死人のような顔だ。

簡単に治ると思っていたのに、どうしてこんなに苦しむのか？ 私の頭の中の腫瘍はホントのところ、もうどうにもならないほど大きくて、私はもう助からないんじゃないかって思ったときに、医師から「腫瘍がなくなっている」と聞かされた。すぐには信じられなかったが、もう退院していいという。

どうやらほんとうに治ったようだ。これでやっと、念願の田舎暮らしが楽しめる。なんだか生まれ変わったよう

な気持ちで新しく建てた家に帰った。

ところがだ、不思議な感じになった。なんというか前とは違う場所にいる気がしてならない。見える風景は同じなのにどこか違うのだ。家の前の畑や森の木々、遠くに見える山々。前と同じようで、しかし何かが違う。

そういえば病院から妻が運転する車で家まで帰るとき、道路沿いの光景に異変を感じて、いつもと違う道を通っているのかと思った。だが、おなじみのコンビニを見つけ、いつもどおりの道と納得した。

何がどうなって、いや、何がどう見えて、前と変わっているように見えるのか、なかなか気づかなかった。死の淵から這い出てきたことで、精神状態に異変を来したのかと思い、精神科で受診することも考えた。だが、やめた。特に困っていることはないからだ。

それからは、特に違和感がある畑で長い時間過ごした。何が違うのか見つけるためだった。家のなかでは、あまり違和感はないのに、外だと感じるのはなぜなのか？

三日たって、やっと分かった。信じられないが前とは別の音が聞こえる耳になっていた。

生き物の『声』が聞こえるのだ。猫とか犬の泣き声では

ない。そんなものは前から聞こえていた。草や樹木の声だ。それだけじゃあない、虫の声も。それも普段は鳴かない蜘蛛や芋虫、蟻、草花についた蛾や蝶の幼虫にいたるまで全ての生物の声が聞こえるのだ。

もちろん意味はわからない。その声は言語なのか、ただの鳴き声なのかそれも分からない。そしてみな全く違う声だった。人の吐息のようなものや、オカリナのようにであったり、ドラムの響きなどなど、それぞれ違う声を出している。聞こえはじめの頃は耳鳴りと思っていた。しかも小さなものなので気にもとめなかった。だが、一日経ち、二日経ち、三日目になって気づいた。これは『声』だと。

家の外に出て、妻が植えていたオクラから聞こえる音を聞いていたときだった。その音は自転車のタイヤがアスファルトの上を走っているときに出す、そんなノイズのような音で、聞いているうちに坂道を下っている感じになったり、スピードを出して走っている音になったりと、強弱とリズムを変え、時には音を出すのを止めたりしていた。聞いていると飽きないので耳を澄ましていると、その音は耳から私の心の中に溶け込むようになってきて、私はその音の微細な変化を体全体で吸収して、やがてオ

クラと同化した。そして私は太陽の光や、地中の根から吸い上げる水の流れを感じたり、吸い上げた水が葉に送られて、奇妙で複雑な音とともに変化していくことを心の中で体験したのだ。

まさかと思った。こんなことがあるはずがない。そう思った私は試しに、茄子に近づいた。だが、聞こえる声は二つあった。それぞれ違う二つの何かが私に向けて声をかけてきた。一つは茄子。さっきのオクラのように太陽の光や水の流れを感じたからだ。もう一つは？　なんだろう？　私はその声の方向を耳で探り、そして見つけた。アブラムシだ。これは茄子につく害虫だ。私はのけぞるように茄子から離れた。もし、アブラムシと同化してしまったら、いったいどんな気持ちになるのか、考えただけで恐ろしいと考えたからだ。

だが、一度耳に入ったアブラムシの声は私を捉えて放さず、スーッと心の中に入り込んだ。

まず最初に私が感じたのは、時間が凄まじい早さで進んでいることだった。めまぐるしく状態が変化し、成長と退化、そして生と死が繰り返されている。それを感じたのだ。私自身の時間は変わらないスピードで進んでいるの

に、心の中は早送りの風景を見ている。ひょっとしてアブラムシは早送りの、それも二倍とか三倍とかではなく、百倍速、いやいや千倍速で生きているのか。私の鼓動は急激に早まり、そのことに驚いて、ふっと我に返った。

私は茄子から離れてキュウリに近寄った。妻は私が入院している間に、近くのホームセンターから三本の苗を買ってきて植え、ネットも張ってあった。今、そのネットに蔓が巻き付き、上へ上へ、そして左右に広がり黄色い花を咲かせていた。その花を見つめながら耳を澄ませた。気のせいかな、黄色い花びらがパラボラアンテナのように私の方へ角度を変えた気がした。

キュウリの声は、そうリコーダーの音に似ている。何か歌っているような、囁いているような、笑っているようなも聞こえて楽しい。なんだか踊りたい気分になった。じっとして動かないキュウリの花も、実は踊りたいんじゃないかって思った。そしてキュウリの声はすーっと私の心の中に入ってきた。

私は新鮮で澄んだ水の中にいた。冷たくもなく温かすぎることもない。水なのに涼しい風に包まれている。そんな感じだった。そして水は私の中に溶け込んでいく。最初

は指先から、腕に、肩に、胸にと、流れ込み、私の体は清められていった。だが水は私の顔には流れてこない。だから私は極めて冷静にキュウリの水を感じることができた。そして、一歩だけ後退するとキュウリの声から離脱した。

キュウリのおかげで、コツを覚えたような気がして、今度はトマトに近づいた。これも入院中に妻が植えたミニトマトだ。妻は私が抗がん剤治療で苦しんでいる間、家庭菜園で気を紛らわせていた。そうでもしないと、いたたまれなかったはずで、私も自分が苦しむ姿を見せたくないだったので、せつせと病院に来る妻を『もういいから帰れ』と追い返していた。妻も苦しかったはずで、このトマトはそんな妻の心を受け止めながら成長したのかも知れない。そのトマトの声が私の耳に飛び込んできた。賑やかな声だ。まるで祭り囃子のような、いやいや保育園の庭で遊んでいる子供達の声のような、いろんな声が混ざり合っていて、時に調和がとれてリズムを刻んだり、たまに旋律を奏でたりして、私はその声に酔いしれ、あまりの心地よさに目を閉じた。すると甘い香りが漂ってきた。ただ私はそれを匂いとして感じているのかというところではない。心の中で香りを楽しんでいるような感じだ。

ふと目を開けた。途端に私はトマトから離脱したので、トマトのリズムや旋律は消え、甘い香りもどこかに飛散したようになくなった。だが目の前に熟れた赤いトマトがある。私はその一つをもぎ取って口の中に入れた。瑞々しい甘い香りが口の中で破裂した。

この私の『能力』は普通に理解されないように思えて、妻はもとより誰にも言わないことにした。もし言えば変人扱いどころか、病院に行くように勧められる。だから黙っておこうと。そして、しばらくこの能力を楽しんでみることにした。

家の前の森には、数十種類の樹木に雑草や草花が無数にある。もしこの中に入ったら、いったいどうなるんだろうと思った。植物の聲が押しよせてきて、私の頭はそれ进行处理することができののだろうか。植物だけじゃあない昆虫もいるだろうし小動物だっている。この公園は樹木が多いので野鳥もたくさん来ている。群れをなして来る鳥もいる。その全てが私に声をかけてきたら、私は圧倒されて耳を塞ぐ。そんなことにならないか？ 少し心配でもある。

だが、どうしても行ってみたい。この森には樹齢千五百

年と言われる楠がある。幹周りは十メートルをこえ、樹高は二十五メートル。四方に枝を伸ばし、この付近の森に君臨する主のような存在だった。その大樹の声を聞いてみたい。

しかし、いきなり行くのは無理かも知れない。大樹の楠は森の奥にあって、そこに至るまで数え切れない木々や草花がある。彼らは私に声をかけるはずだ、四方八方から立体的にそして連続して。そうなったら私はどうなるのだろうか？ 森にいる無数の生物の聲が、滝のように私に襲いかかってくる。私はそれに抗することができののだろうか？

試しに家の前の畑の真ん中に入ってみた。周りにはキユウリ、オクラ、トマト、カボチャ、ピーマン、獅子唐。何なのか分からない葉ものの野菜。よくもこれだけ植えたものだと思う野菜が至近距離にある。その中に立って耳を澄ませた。野菜以外の音も聞こえる。道路を走る車のクラクションやエンジン音、風が舞う音、遠くにいるカラスの鳴き声、小鳥の声も一つや二つではない。まずそれらの音を遮断する。そして、さらに耳を澄ます。

聞こえる。植物や、なんだか分からない生物の聲がシャワーのように私に降り注ぐ。私はその音のシャワーから

一筋、二筋と音を選別していく、そして今まで体験していない異質な音の一つ選んで、聞こえる方角に目を移す。ピーマンだ。ピーマンが私に話しかけてきた。

これは、どう形容していいのか、大まかに分類すれば弦楽器の音？ いや、水琴窟の音に似ている。張り詰めた弦の響きのようでもあり、仏壇にある、りんの音のような、とにかく澄み切った響きで私の体に滲透する。私はその声を心で受けようと目を閉じた。すると途端に体が軽くなりはじめた。なにやら重力が減衰していくような感じで、地面に着いているはずの足が心許なく浮き上がり、私は反射的に腰を落として踏ん張ってみた。だがそれでも私は軽くなりつづけ、ついには地面から足が離れ、宙に浮かんでしまった。もう抵抗するのはやめた。私は体の力を抜いて、その感覚に身を委ねた。すると閉じた目の中が緑色に染まった。明るい緑だ。ぼやけていた焦点がだんだんとあいはじめ、私は何を見ているのか分かった。そう私はピーマンの实の中にいた。あれは……種だ。白い種がびつとりと連なっている。本来、あれがピーマンの実なのではと思った。なんだか旨そうに見える。浮遊する私の体は宙を舞いピーマンの实の外に出た。明るい、眩しいほど明るい。

光が私を包んだ。体が熱くなった。体の芯まで熱せられ、私は膨張していく。

びっくりして目を開けた。私は一気に重力を感じて、その場に尻餅をついた。ピーマンから離脱した瞬間だった。地面に座り込んだまま私は息を弾ませていた。試しに軽い気持ちで声を聞いたピーマンに翻弄された。そんな気がした。たかがピーマンと思っていたから、怒ったのだろうか？

それと、私はピーマンが好きではなかった。もともと食卓に並べば食べるし、私自身が作る料理にも使う。だがそれは野菜を食べるためであり、料理の色合いとして、あの緑色が役にたつからだ。ピーマン自体が美味いと思っただことはあまりない。しかし、これからは考えを改めることにする。すまなかつたピーマン。このとおり謝る。私はピーマンに頭を下げた。

シャワーのような生物の声を体験して、ひとつ分かったことがあった。私はそのシャワーから、声を選別することができるようだ。さっきはピーマンを選んだ。そして、その声に身を委ねてしまった。それはそれで面白かったし、貴重な体験だったが、声を聞く度にこんなことをやっ

ていたのでは、身が持たない。だから目を閉じて聞き入るのをやめればいいのだ。早い話、無視だ。森の生物全てが私に語りかけてきたとしても、とりあえずは無視して、私が選んだ声を聞く。そうすればいいってことだ。

畑にいる私を心配して妻が駆け寄ってきた。そういう私は何も収穫していないし、雑草を取っているわけでもない。見ようによつては、ただ畑でボーッとしてただけだ。まだ病み上がりで、体重も戻ってない。そんな痩せこけたジジイがボーッと突っ立てたら、ほとんどの者が認知症を疑うはず。妻はそう思っているのかも知れない。ひよつとして、生物の声が聞こえるのは、私の能力ではなく認知症の症状なのか？ いや違う。断じてそんな事はない。だが今日は、妻の言うとおり家の中に入って、大人しくしていることにする。

カーテンの隙間から朝陽が差し込んでくるころ、目覚ましのラジオがなる。ぼんやりと六時のニュースを聞きながらベットから起き上がる。少しばかりよろめきながら窓に近づきカーテンを開ける。体いっぱい朝の陽射しを浴びる。今日もいい天気だ、空が青い。

ここまでは昨日と同じだ。そう、私は認知症なんかじゃない。昨日のことも覚えてるし、今日何をするかも、考えてもいる。私は寝ながら考えた。森に近づいてみる。少しずつ少しずつ近づいていく。慣らし運転みたいなものだ。慌てることはない。私には時間がたっぷりある。そのうちあの楠の大樹までいけるはずだ。

妻に急かされて朝食につく。発病する前に比べ、私は食が細くなった。米の飯など一口か二口食えば充分だ。あと漬物と味噌汁があればいい。だが妻はそれではいけないと目玉焼きと、ピーマンの炒めもの、味噌汁にはオクラを細かく刻んで入れている。悪くはない。昨日ピーマンとオクラの声を聞いた。なんだか前より美味しく感じるのは気のせいなのか。

食事のあと、妻が心配するのをよそに私は「散歩する」と言って家を出た。行く先は家の前にある森。整備された遊歩道もあるので、心配されるようなところではない。

しかし、森や遊歩道は心配ないが、私は普通ではない。ここに来たときに感じた違和感は、森に近づくにつれ大きくなり、遊歩道の入り口にある桜の木の前で私は立ち止まってしまった。何やら桜の木が大きく立ちはだかつ

ているように思えたからだ。今か今かと手ぐすねを引いて待っているような気配ではあるが悪意はなく、喜んで待ちかねているような、そんな感じだった。これは、物陰に隠れて、友達が来たら驚かせてやろうと待ち構えている、子供のわくわくした心とよく似ている。だから私はわざと気づかない素振りで近づいた。

はたして桜の木が私に語りかけてきた。桜だけじゃない。その向こうにある樺とか、銀杏や紅葉が一斉に私に向かって声を上げたのだ。数本の樹木の声が混じり合って私の耳に入ってくる。だがそれは調和がとれていた。ひよっとしてどこかに指揮者がいるのではないかと思うほどに、同じリズムで、高音部、低音部の分担もできていて、私はその美しいハーモニーに酔いしれてしまった。

この樹木の声を無視するなんてとんでもない。聞かないなんてもったいないではないか。そう思って私は目を閉じた。

樹木のハーモニーはすぐに心の中に浸透していき、私はあまりの心地よさに立っていられず、ゆっくりと腰を落として地面に座り込んだ。

私の意識は浮遊しはじめた。これがよく言う幽体離脱

であろうか。私は私の体を真上から見えて、そして桜の木にフワフワと風船のように近づき、いつの間にか私は微少な浮遊物になっていて、桜の木の幹のほんの小さな隙間から中に入り込んだ。桜の幹の中は赤一色だった。ワインレッドかな？ 赤ワインの中にいるみたい、そんな感じで、私はワインの微かな流れに揺られていた。

ふと気づいた。さっきまで聞こえていた樹木のハーモニーはなくなり、桜が独唱を始めている。桜の木だからサクラ、サクラのメロディに聞こえると思ったが、全然違う。これは蟬の鳴き声に近い。クマ蟬だ。ひよっとしてサクラの枝にいるクマ蟬の声かと思ったが、そうではない。音はよく似ているがリズムが全然違うし、たまに高音になったり極端な低音に変わったたりする。桜には申し訳ないがちよつとがっかりだ。春になると枝いっぱい花を咲かせ、劇的に変貌する桜だけに、その声もダイナミックで美しいものと期待していたのだが、期待外れもいいところだ。

いや、待てよ。今、桜は葉をつけて太陽の光を浴び、栄養を蓄えているところだ。次に咲かせる花のためにせっせと働いているのだ。とすると、これは桜の木の労働歌

か？　がんばろう！　それそれ！　か？　そう考えれば今聞こえる音も、なにか武骨な響きを持っているように感じるし、楽しんで働いているそんな風にも聞こえる。桜の葉が肩を組んで次に来る春を目指して、今頑張っているのだ。がっかりしたなどと、桜の木に失礼なことを思ってしまった。今度は花を咲かせているときの声を聞こう。そう思つて私は目を開けた。

なんと、目の前に妻が立っていた。地面に座り込んでいる私を悲しそう顔で見つめている。違う！　違うんだ。具合が悪いわけじゃあないんだ。と言つても妻は納得しない。座り込んだのがいけなかった。ズボンに泥がついている。妻がその泥を手で払ってくれて、私は家に連れて帰られた。

しかたない紅葉や櫟の声は明日聞こう。

カーテンの隙間から朝陽が差し込んでくるころ、目覚ましのラジオがなる。ぼんやりと六時のニュースを聞きながらベットから起き上がる。少しばかりよろめきながら窓に近づきカーテンを開ける。体いっぱい朝の陽射しを浴びる。今日もいい天気だ、空が青い。

ガラス窓を開けてみたが、野鳥は近くに來ていないみたいだ。来る日もあれば來ない日もあるし、ひよつとしたらさつきまで来てて、もういつてしまったのかもしれない。どちらにせよ、そういうことを考えてる私はいかに暇人か自分のことながら呆れてしまう。

昨日、妻にこつぴどく怒られた。妻から見ると私は充分に回復していないそうで、出歩くなどもつてのほかだ。しかし、私はそんなふうには思っていない。そりゃあ駆け回るほどの元氣はないが、普通に歩くのならなんの問題もないし、家の階段だつて平気で上がり下りしている。だから今日も森に行くつもりだ。

体が回復しているってことを示すために、朝食はしっかりと食べた。欲しくはないが、無理すれば食べられないことはない。キュウリの塩もみが旨そうだ。妻が言うには今朝もぎ取ったキュウリだ。なるほど、かすかにキュウリから声が聞こえるのを感じる。蔓から離れたとはいえキュウリはまだ生きている。これぞ生食だ。キュウリの声を聞きながらポリポリと食べる。この歯ごたえは、実は野菜の踊り食いの感触ではなかるうか。シロウオと違ってくねくねと動いたりしないが、この歯触りはキュウリの

微かな抵抗なのではなからうか？ 嘯んだ瞬間、キュウリの小さな悲鳴が聞こえるような気がする。

いかん。妻が怪訝な顔をしてみている。「いや……これ旨いなあって思ってた……」と言って誤魔化したのが、納得してくれず大きなため息をつかれた。

妻が家にいる間は、大人しく家について、見もしないテレビの方向に顔を向けている。

昨日、私が地べたに座り込んでいたことが、妻はショックだったようだ。どう見ても、あれは座り込んでいるんじゃないかって、へたり込んでいた。妻はそう言うのだ。だから、今日は絶対にあんなことはしない。座るのはベンチがあるところにする。家の前にある森はちよつとした公園にもなっているの、遊歩道もあるし、ところどころにベンチもある。ベンチなら座っていても不自然じゃあない。いや自然なことなのだ。

九時半になって妻は出かけた。公民館で何か講座を受けるのと、そのあと買い物に行くので帰るのは昼の十二時頃だ。私は妻が運転する車が見えなくなつて家を出た。まずは森の入り口まで行く。昨日聞いた桜の声はもちろん無視。悪いが樗や紅葉も今回は遠慮させて貰う。微かに

聞こえてくる昆虫らしきものの声も虫だけに無視。当分の間、植物だけに限定する。

森の入り口に來た。私が來たことを喜ぶように樹木の葉がざわめき、さつそく声をかけてきた。昨日聞いたハーモニード。私は素知らぬふりで木々の横を通り抜けようと一歩二歩と歩く。紅葉が独唱で私に囁いた。おっ……これはマンドリンのような音。「星空のコンチェルト」が好きでマンドリンの音はよく覚えていた。もちろん紅葉の声はメロディを奏でてはいない。強弱とリズムを変化させているだけだ。たぶん意味があるのだろうけど、それを感じさせて貰うのはまた今度にする。そうだ！ この紅葉にマンドリンの名曲を聴かせたら、どうなるのだろうか？ 今度試してみよう。

紅葉の横を過ぎたら、今度は樗が私に声をかけてきた。なんだか野太い声である。ふて腐れた猫の鳴き声に似ているし、怒っているような気もする。ふと、樗の木を見上げた。この樗、四方八方好き放題に枝を伸ばしている。いったい何の不満があるというのか。これも無視して通り過ぎる。

次に私に語りかけてきたのは銀杏の木だ。銀杏と言え

ばあれだ。♪銀杏返しに黒繻子かけて泣いて別れた隅田川♪ 島倉千代子の歌で、あれは名曲だ。でももう聞く人なんていないだろうから、忘れられるのかな。おっ！ 銀杏の木が歌ってる！ これはスキヤットだ。透き通った女性の声で短い旋律を繰り返して歌ってる。いいねえ……いいよこれ。銀杏の木やるなあ。そう言えば昔の映画音楽でこんなのあった。ミシェル・ルグランの風のささやきだ。これも同じ旋律を最初から最後まで繰り返すだけだけど名曲だった。よし、銀杏の声をじっくり聴くことにしよう。ベンチはないけど座るのにちょうどいい石がある。誰かに見られて、へたり込んでいるなんて思われたら困る。誰かあ……いいね。森の中で銀杏の木の歌を聴く。こんなことできるのはたぶん私だけだ。なんて贅沢なんだ。おっ！ これって四分の三拍子になってる。指揮をとってみよう。確か上から、いち、にい、さん、いち、にい、さん。子供の頃習ったのを思い出した。あれ？ ちょっと合わない、ずれてる。私が悪いのか？ 銀杏がずれたのか？ やっぱ指揮者に合わせるべきだ。仕方ない、銀杏の木に向かって立ち上がって、体全体で指揮をとる。そうすれば銀杏の木も合わせざるをえない。では始めよう。

いち、にい、さん、いち、にい、さん、合わないな。もつとオーバーアクションでメリハリをつけて、いち、にい、さん、いち、にい、さん、いち……。

いかん……人が見てる。あの人は近所の人だ。なに？ なんて優しそうに笑ってこっちに来るの？ いや、なんでもないって。ほんとになんでもないって。一人で帰れまして。

カーテンの隙間から朝陽が差し込んでくるころ、目覚ましのラジオがなる。ぼんやりと六時のニュースを聞きながらベットから起き上がる。少しばかりよろめきながら窓に近づきカーテンを開ける。体いっぱい朝の陽射しを浴びる。今日もいい天気だ、空が青い。

ガラス戸をあけたら、……シジュウカラが来ている。ツツピー、ツツピーと可愛い声だ。コゲラは……来てない。

昨日は散々だった。近所のおばさんに強引に連れて帰られた。私は一人で帰れますから大丈夫ですって言うのに、まあ、まあ、そう言わずに一緒に帰ってお茶でもって……どうして私がアンタと、お茶なんか飲まなきゃならないんだ。って言いたかったが、うちの妻と仲がいい

し、悪気があって言ってるのではないから、仕方なく言う
とおりにした。だが、よく考えると私は徘徊老人に見られ
ているってことだ。

近所のおばさんは、妻に言ったみたいだ。私が踊ってい
たと。私は四分の三拍子の指揮を執っていたのに、フラフ
ラと踊っていたって、あれが指揮者の舞だってことが見て
いて分からなかったのだろうか？ あのおばさんはク
ラシックコンサートに行ったことがないのか？ おかげ
で妻にこっぴどく怒られた。そして泣かれて、頼むから家
で大人しくしてって言われて、ほんとに困ってしまって、
つい、言ってしまった……銀杏の木が歌っているのが指
揮してたって、そしたらボーッと私を見て、また泣き出し
て、病院に行きましょって……。

私はどこも悪くないのに、どうして病院に行かなくっ
ちゃなんないんだって言ったら、診てもらってどこも悪
くないって言ってくれたら安心でしょ。って言うから、明
後日の月曜日に行くことにした。だが、ちょっと心配でも
ある。そもそも木の声が聞こえるなんて、普通に考えてお
かしいからだ。だけど、それがおかしいと自覚している私
は、おかしくないのではないか？ おかしいと思うこと

を、おかしいと考えているのは正常である証か？ こん
がらがってきた。もういい。

そんなことより、今日はどんなことがあろうとも、絶対
にあの楠の声を聴きに行く。途中にある樹木や草とかが、
ちよっかいを出してきても、絶対に相手にしない。脇目も
振らず一目散。楠に向かって突っ走るつもりだ。

妻が心配しないように、昨夜から気を付けている。病氣
になる前に私が家の中でやっていたことを、さりげなく
やるようにした。例えば部屋の片隅に埃があるのを見つ
けたら、ササッと掃除機を出して吸い取ったり、食事のあ
と自分の食器を流し台に片づけたり、「久しぶりに野球で
も見るか」って言って、テレビをつけて、実は全然興味の
ない巨人阪神戦を見たり、欲しくもないのに「なんかビー
ル飲みたくなってきたな」って言ってチラツと妻の顔を
見て、駄目よって言われて、わざと大げさにがっかりした
仕草をしたり、とにかく元気な時にやってたことをやり
つくし、昨夜は遅めの十一時就寝。

朝は朝で、新聞を自分で外のポストまで取りに行って、
自分でお茶を入れて、飲みながら、じっくり新聞を読んで、
「ほんとに政府は何をやっているんだ！」ってぼやいて

みたり、妻が作ってくれた朝ご飯を、「うん！ おいしいね茄子の味噌汁。それにキュウリの浅漬けも旨い！」などと褒めたり、無理してご飯のお代りを要求したり、とまあ考え付く限りのパフォーマンズで、正常に元気であることを妻に印象付けた。おかげで妻は上機嫌で、予定通りに講座を受けに公民館に行ってくれる。

妻は出がけに、今日はどこにも行かないで家でいてねって言ったけど、私の心の中は楠の巨樹でいっぱい。だから妻が車を出した瞬間、行動開始。

楠まで、ちょっと距離もあるのでウオーキング用の靴を履く。ペットボトルのお茶も持って行くことにする。家の前の森にいくだけなのに、ハイキングみたいだが、なにせ、あの楠は県の天然記念物に指定されている巨樹だ。今まで相手にした銀杏や桜とは桁違いの大物だ。その巨樹の声を聴くのだから、それなりの準備と心構えが必要だ。今日も陽射しはきつい。だが森に入れば歩く歩道はずっと木陰。風もあるので涼しいはず。森の小道を風に吹かれて歩く。しかも私の場合、木々の声を聴きながらだ。なんとも楽しい散歩ではないか。

昨日は銀杏の木の前で立ち止まってしまった。それは

それで楽しかったが、今日は無視。銀杏がどんな旋律を奏でも、透き通ったスキヤットで私を誘っても、私は誘惑には負けない。悪いがお前には飽きたんだよ。って言うてる。昨日、お前と遊んだことがバレて妻にこっぴどく怒られた。だから銀杏、お前とは縁を切る。

そんな馬鹿げたことを考えているうちに銀杏の木の前を通り抜けた。背中越しに銀杏の声。もの悲しく聞こえる。銀杏のメヌエツトだ。

銀杏から先は、まだ一度も声を聴いたことがない木の前を通ることになる。しかも何種類、いや何十種類の数百年の木と、これまた数え切れない種類の野草の声も。

聞こえた。都会の雑踏に出たみたいだ。まず手前にある松の木が私に声をかける。何か話しかけられてるみたいなりズムだ。『ねえねえ、ねえねえ』って言ってるように聞こえる。とげとげした針のような葉っぱなのに『ねえねえ』って馴れ馴れしすぎて気持ちが悪い。違う松の木も私に声をかけてきた。驚いた。いったいなんだこれは？ 松の木ってそういうタイプなのか？ これはどう聴いても『うっふーん』としか聞こえない。松の分際で私を誘ってどうするつもりなのか。まったくもってなんてことだろ

う、松の木はどこかしら威厳があつて、威張つているようにも見えて、髭を伸ばした陸軍大将みたいな木なのに、こんな声を出すとは。なんと気持ちが悪いことか。庭に松の木を植えて、形よく剪定してる家があつて、そんな家にはたいがい気難しそうな爺さんがいるが、そんな爺さんが、松の声を聴いたら、怒つて全部切り倒すと思う。

おつ、この声の主は？ 団栗がなる木だ。葉っぱからしてこれはクヌギだ。どんぐりころどんぶりこではない。この声は……声というより音だ。餅つきの音に似ている。それも機械ではなく、石臼を杵で搗く、餅搗きの音だ。なんとも懐かしい。搗き上がるの待つてみたい。そういえば、栗が入った餅があつた。たしかあれは栗子餅だ。あれは美味しかった。でも、ここにいて待つても食べられないわけじゃない。先に進む。

うるさいな……また松の木だ。今度は喘ぎ声だ。呆れたものだ。アッハー、アアッハーっと、ずいぶんと艶めかしい。聴いていてこつちが恥ずかしくなる。まさか松の木が、そつち系とは思ひもしなかった。

今度は梅の木だ。松があつて次は梅。竹はないのか？ だが、どうして梅が松より下なんだろう？ しかも梅は

竹よりも下。どうして？ 梅の声が聞こえてきた。これは……チューバだ。チューバの音色そっくりだ。足音のようになりズムだ。重々しい音。ゾウの足が土を押しつぶすような、そんな音だ。ゆっくりとゆっくりと歩いてる。凄い。梅は凄い。貫禄がある。私の中では逆転した。『ねえねえ』や『うつふーん』の松より絶対に梅が上。世間に公表してあげたい。松より梅の方が断然男らしいと。

いちいち驚いている場合じゃない。こんなことでは桶にたどり着くまで身がもたない。だが、さきほどからずつと草が声をかけてきている。木の声が大きかったから、気にならなかったが、ちよつと気にかけてみると、耳の中にスーッと入り込んできた。白い花を咲かせてるこの花はなんだろう？ 花の名前なんか知らない。ましてや野草の名前なんて知るわけがない。花の形は菊みたいだ。野菊か？ 白い野菊？ ズーっと歩道沿いに咲いてるから、その声が輪唱みたいに聞こえる。子供の頃やつたことがある。カエルの歌が聞こえてくるよ。ガッ、ガッ。だった。歌つてて途中で失敗したら、みんなで吹き出して笑った。逆に上手く最後まで歌えたら、オッーって歓声上げて喜んだものだ。あれはほんとに楽しかった。この白い花

も楽しいのだろうか？ 歌っているようには聞こえないが、お囃子みたいに聞こえる。音色は……笛だ。それも草笛。子供の頃やったことがあるが、今でもやれるだろうか？ 草笛とはいいが実は木の葉っぱを使ってた。名前忘れたが、生け垣に使う木の葉っぱを丸めて、口に咥えて吹いた。今やれたら白い花の輪唱に入れるが……残念ながら付近に適当な葉っぱがない。

それにしてもこの森、木の種類が多い。大きい木には名前を書いた立て札があるが、小さな木にはない。だからなんの木かわからない。まあそれはいいとして、知らない小さな木がしつこく声をかけてくる。しかも歩道沿いに何本も生えているから、合唱してるみたいに聞こえる。あ……なるほど分かった。この木は皆兄弟だ。同じ木の種がこちら辺に落ちて根付いたんだ。ということは、親にあたる木もあるはず。葉っぱの形は同じだろうから、気をつけていれば見つけれられるかも？ それと声も同じはず。大きい木で同じ声を出す木は……。あった！ 棕の木だ。懐かしい木だ。子供の頃、この木によく登って実をとって食べた。神社の境内に棕の大木があって、実が熟すころになると子供がいっぱい木に登ってた。黒紫の実を食べて口

の回りが紫色になった。

いかん、木の前を通る度に声を聞いてたら、前に進めない。ここは棕であろうと、懐かしくとも、心を無にしていただだ前に進む。あの巨樹に向かってひたすら歩くのみ。見えてきた。樹高があるから、遠くからでも目立つ。こんもりと梢が盛り上がっている。

見ていたら声が聞こえてきた。荘厳な声だ。海の底から聞こえる鯨の鳴き声のような……深い深い洞窟から聞こえる風の音のような……奥行き半端ない声だ。

行こう。もっともっと近づいて楠の幹に耳を当てて聴きたい。樹齢千五百年。それだけ生きて、今もなお勢いがある。いったあと何年生きるのだろうか。強い。とてつもなく強い。だから千五百年の間、生き延びてきた。そして、近づけば近づくほど、その大きさに圧倒される。

幹の近くに着いた。声がより深くなった感じがする。

よし、楠の幹に手をあてて声を聴こう。目を閉じて、耳を澄ます。

聞こえる、風の音がする。冬の風だ。ピューピューと鳴っている。楠の音がすきま風のように私の体の中に入ってきた。だんだんと体が軽くなっていく。いかん、立って

られない。幹にもたれかかって座ってみる。

ああ、体の力が抜けていく。座っていることさえ感じられない。風船のようになった体が風にさらわれた。私は楠の幹を登るように上に吹きあげられる。枝や葉の間をすり抜けて上へ上へ、そして私はふわっと止まった。

楠のてっぺんに私はいる。高い、すごい見晴らしだ。私の家も見える。畑に植えている野菜も。道路を走っている車も見える。あれ？　どの車も動かない。止まって見えるいや違う、時間が止まっているのだ。

明るくなった。どんどん明るくなって、真っ白になって何も見えなくなった。真っ白な空間で私はフワフワと漂っている。

何か見えた。黒い点が見えた。点は大きくなっていく、円形だ。中に何かが見える。そうか、これは窓だ。窓が大きくなっていく。窓の向こうの景色が広がっていく。

あれ？　違う。さっき見た景色じゃない。私の家がない。道路もない。あんなところに川がある。いったい私はどこを見てるんだろう？

今度は暗くなっていく、空に星が一つ二つ、だんだんと増えて、増えて、増えて、天空が星で埋め尽くされた。な

んてことだ、こんな星空は見たことがない。

光の矢が飛んだ。その光で夜空が切り裂かれ、また明るくなった。真っ青な空と大地に広がる緑。川や沼が見えるがさつきとはまるで違う。

なんだか分かったような気がする。これは過去の風景だ。私は楠の記憶の中を漂っている。ゆらりゆらりと時空散歩。ああ眠くなってきた。ゆりかごで寝ているみたいだ。あったかい。いい気持ちだ。眠いな……眠い……ちよつとだけ眠ろう……。

カーテンの隙間から……

了



折り合い

正木 孝枝

「わたしの毎日は、一から十で成り立っている」

つやま

津山みのりは右手に缶酎ハイを持ち、左手はポテトチップスの袋に突っ込んだままで、私に言った。左手をどう動かしているのか、袋の中でがしがしと乾いた音が聞こえている。

京都駅の近くにあるホテルに、みのりと泊まっていた。夕食を駅地下のレストラン街で済ませた後、コンビニで缶酎ハイやつまみのお菓子、ヨーグルトや缶コーヒーを買ってホテルに戻った。

二人の今夜の宿は七階にあるシングルルームで、部屋は廊下を隔てて向かいだった。少し飲もうということになって、私は自分の部屋に戻らず、そのままみのりの部屋に入った。

酎ハイはまだ二口しか飲んでいないが、酒に弱い彼女

の頬は、すでに赤く染まっていた。髪はいつも耳の辺りまで短く刈り上げていたので、うなじや耳たぶもピンク色になっているのがよくわかる。グレーの薄いセーターに、青いジーンズという飾り気のないすっきりした服装は、派手な顔立ちの彼女によく似合った。

「ん？一から十ってどういうこと」

なにを言っているのかわからず、私は尋ねた。みのりは、微笑んで私を見ている。

彼女が微笑むと、その笑顔は周りの人たちを温かい気持ちにしてくれる。そんな優しい笑顔が、私は大好きだ。が、今の笑顔はいつもと違って見えた。今日の顔は冷たい。なにやら私のことを小馬鹿にしているような、自分自身を蔑んでいるような、そんな微笑みだった。

部屋の中には木製の、とても小さくて丸いテーブルと黒い椅子が一つだけあったので、椅子に私が座り、みのり

はベッドの端に腰掛けていた。

みのりは三口目の缶酎ハイを飲んでゐる。それ以上飲むと危ないよ、と小さい声で私は言った。

「うん、わかつてる。前に迷惑かけたからね」

去年二人で飲んだ時、話してゐるうちに盛り上がってしまつて、いつもよりたくさん飲んだ。と言っても、みのりはビール一杯だったけれど、それは彼女の中では限界を超えていて、その後少々大変だった。

あの時みのりは「周りがみんな銀色に見える」と言い出し、席を立とうとしたけど立てなかった。「いまだ今田さんも銀

色。今田佳代ちゃんかよはギンギンだあ。宇宙人みたい」

そう言つて笑つてゐるみのりはとてもかわいらしくて、私には彼女の方がずっとギンギンキラキラして見えた。

いつもは七つ年上の私のことを今田さんと呼ぶのに、酔うと「佳代ちゃん」と呼んでくれるのもうれしかった。体はゆらゆら揺れて顔色は青白く、本当はうれしいなんて思つてゐる状況ではなかったのだが。

私はみのりの腕を抱えてなんとか立たせ、一緒に店から外へ出た。

確か十一月だったと思う。ひんやりとした空気は、私は気持ちよかつた。見上げると白く輝く月が見えた。昼間は過ごしやすくて、この頃は夜になると急に冷える。みのりは冷気を全身に受けて、大きく身震いした。その後も震えはしばらく続き、私は彼女の体を抱いて支えた。

しばらくすると「もう銀色には見えないよ」と、自分から体を離し、みのりは一人でトイレへ向かつた。席に戻つてきた時はすっかり落ち着いていて、ホツとしたことを覚えてゐる。迷惑をかけられた、というほどではなかったのだが、あの夜のことをみのりは言つてゐるのだらう。

「イチからジユウつて、なに？ 数字の一から十だよね？」

もう一度聞いてみた。

「たとえば」

薄っぺらいポテトチップを一枚口に押し込んでから、みのりは話し始めた。

「家でお風呂に入つて給湯の蛇口を閉める時、必ず数える。一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、つて。手は蛇口を握つたままで」

腕を前に伸ばし、空中で蛇口を閉める手のしぐさをし

て、一、二、三、と十まで数えた。

「それを三回する。シャンプーのあとも、排水口をさすつて一、二、三つて十まで数える」

同じように手を回すしぐさをする。

私はその手をじっと見た。

「毎朝、お父さんの仏壇のロウソクと線香に、火をつけて拝んでいてね。その後で、消したロウソクの、燃えて芯が黒くなっている部分と、まだ燃えていない白の部分を見て一から十数えている。一から五までは右のロウソクで、六から十までは左のロウソクを見ながら。それを三回ずつ数えるから、忙しいよ」

相づちを打つことができない。

「芯の、黒と白の部分がちゃんと見えたらいいんだけど。白い部分が見えなければ、もう一回数える」

みのりは一人っ子で父親は早くに亡くなり、母親と二人暮らしだった。毎朝起きると一番に湯を沸かして仏壇にお茶とコーヒーを供える、と彼女は言っていた。それから顔を洗って般若心経を唱える、と。

仏壇の前で正座し、数字を数えている姿を想像してみた。ロウソクを見つめて小さい声でブツブツと数えてい

る様は、普通には思えない。何のために、一体なにが気になって数を数えているのか。

二人で泊まりの旅行をするのは、これがはじめてだった。

同じ職場で働いていたが、今のようになんか仲良くなったのは五年前からだ。休憩中に話していて、二人とも四十年前にデビューした男性歌手Jの、今でもファンであることがわかった。

四十年前、Jが私たちの前に現れた時は衝撃だった。今でこそ普通になったが、その頃、Jのように髪を長く伸ばして、化粧をしている男性歌手はいなかった。金色や銀色の奇抜な衣装を身にまとい、派手な動きで熱唱する。瞬く間に人気が出て、新しい曲が出る度に必ずヒットした。今までの歌謡曲にはなかった斬新な曲調と、衣装やメイクはいつも話題になった。

だが最近、Jはほとんどテレビには出ていないし、ヒット曲も出していない。が、毎年CDは一枚出し、コンサートもしていた。根強く応援する何十年来のファンが彼には多くいて、会場はいつも満員だった。

私は中学生の頃から大好きで、大人になってからは一

人でコンサートに行っていた。みのりは年下だったけれど、ファン歴は私より長かった。小学校低学年の時は、当時熱烈なファンだった叔母に連れられ、コンサートに行ったという筋金入りだった。

みのりが今も、毎年コンサートに行っていると聞いて、私はびっくりした。周りにはJの存在を知らない人も増えている今、これは奇跡のような出会いだと、私たちは狂喜乱舞した。私が四十歳、みのりは三十三歳の時だった。

それから毎年、コンサートへは一緒に出掛けている。地元であることはめったにないので、ある年は神戸、その次の年は大阪、と日帰りで近畿方面に出掛けていた。

ファンクラブの会報で、翌年のスケジュールを調べ、チケットを予約し、高速バスの予約も全てみのりがしてくれていた。職場でも、Jのことで会う時も、ちつとも神経質な風には見えないし、むしろおおらかな子だと感じていた。数字を数えているところなんて、見たことがなかった。

コンサートの後は反省会と称して、毎年この時だけはいつも夜に会ってお酒を飲む。

「やっぱいい声だよ。ステージの端から端まで走っ

てくれたし。今回は真っ赤の衣装、似合っていたなあ。来年も一緒に行こうね、佳代ちゃん」

去年はJの還暦記念ライブだった。昔の美少年の面影は全くないが、透き通った声はそのままだった。見た目より体力も十分にあるようで、ステージの上では踊ったり、飛び跳ねたりして私たちを楽しませてくれた。

去年みのりが飲み過ぎたのは、その時の興奮がよみがえってきて、調子に乗ってしまったからだだった。

そしてこの時、次のコンサートは京都へ行こう、いうことになった。せっかくだから泊まろうと言い出したのも、みのりだった。日帰りすると、帰りがとても遅くなる。それに翌日に疲れがどつと襲ってくるから。

「京都には、見るところがいっぱいあるし。案内してよ」

京都が好きで毎年旅行をする私に氣を使ってくれたのか、自分もずっと行きたいと思っていたと、みのりは言った。

「京都はJの出身地だし」

Jは京都育ち。高校生の途中で中退してプロの歌手になるために東京へ行ったことは、彼のファンだったら誰でも知っている。

思い切って京都で二泊することにした。コンサートは土曜日だから、前日の金曜日に京都へ行き、当日も泊まって、日曜日にゆつくり帰って来る。なんと贅沢な旅だろう。

Jのためだけに仕事を休み、お金を使う。これぞファンの鏡だと、私たちは盛り上がった。それからコンサートのある九月までの数か月、何度も会って入念に計画を立てた。

Jの京都でのコンサートの前日、私たちは旅行バックを持って出勤して二時まで働き、そのまま駅に直行した。荷物が多かったのは、年に一度Jに会うために毎年おしやれをしていくと決めていて、そのための服や化粧道具が入っていたからだ。バスの着く京都駅近くに宿泊を決めたのも、前日は早くゆつくりしたいと思ったからだった。

夕方京都駅に着いた。

九月中旬というのに残暑は厳しく、まるで真夏のような日差しがまぶしかった。大きなイベントがないせいとか、京都駅を行きかう旅行客の数は、普段より少ない。あと一、二か月もしたら、秋の紅葉を目当てに、この辺りはごった返すに違いない。

チェックインしたホテルは、女性の旅行客を明らかに

意識していて、ロビーや部屋の中はピンクを基調としていて、照明も明るかった。室内に置かれたアメニティも充実していて、シャンプーや化粧品は、女性に人気のあるメーカーが用意されていた。

私たちは夕食の時、ホテルはいい感じだし、場所も便利で正解だったと、今回の計画を誉めあった。旅行は始まったばかりだったが、Jのコンサートに向けて私たちは何もかもがうまくいく、と確信していた。みのりの話を聞くまでは。

そのホテルの一室で、みのりはしゃべり続ける。

「出かける時、ドアに鍵をかけたあとで、ドアノブを何回も引っ張って、ちゃんと鍵がかかっているか確認していた。ガチャガチャ思い切り引っ張るから、ドアノブの調子が悪くなって、修理にきてもらったこともあるよ」

こだわり。強迫性障害。不意に、そんな言葉が頭に浮かんできた。

ちょっと前にテレビで、手を洗い続ける、潔癖症の男の子が主役のドラマを見た。その子の主治医が、手を何時間も洗い続けたり、鍵を何回も確認したりする行為をやめられない病気が強迫性障害だ、と説明をするシーンを、う

っすらと覚えていた。

でも、みのりのそれは、違うよね。病気じゃないよね。

ただどうなのだろう。頭の中を巡る思いは早すぎて、心がついていけない。

今まで全く知らなかったみのりの世界。

「誰にも言ったことが、ないんだけど」

そう言うけど、なんで今、私に言うのだろう。

「旅行っていいよね。なんか心が開いちゃう。もつと飲もうかなあ」

みのりは菓子袋を逆さまにして、中に残っていたポテトチップスのかけらを手のひらに乗せ、一気に口の中に放り込んだ。「わさび味のポテトチップス、なかなか美味だわ」と呟き、缶酎ハイをまた飲もうとする。

「いやいや。もうだめだよ。明日がこの旅のメインなんだから、もう寝よう」

「ああ、そうだねえ」

結局なんのコメントもできなかった。

「じゃあ、部屋に戻るね。一人で動ける？ 飲み過ぎてないかな」

「大丈夫。ありがとね」

顔はまだほんのりと赤かったが、しつかりとした口調だった。

部屋を出る時に、もう一度ベッドに座っている彼女を見た。

「一から十をするのは、自分の家でだけだから。おやすみなさい」

みのりは真顔で私を見ていた。

この旅の目的はJのコンサートだ。お肌も体も心も、完ぺきのコンディションでJに会わなければならない。そうしないと失礼だ。だから夕食の後、ホテルの部屋で飲んだのも、早く切り上げるためだった。まさかそこで、みのりのそんな話を聞かされるとは思ってもみなかった。彼女にしたら、「わたし、こんなことをしているんよ」と言う軽い気持ちで言ったのかもしれないけれど。

ベッドに入っても、話が頭をよぎって寝付かれなかった。こういうことって、普通は内緒にしたいんじゃないだろうか。今も部屋の中で一から十まで数えているのではないだろうか。何回も何回も。ぶつぶつと。

翌朝、部屋を出るとみのりもちょうど部屋から出たと

ころだった。ドア側に立って下を向いている。右手がドアノブを持ったままだ。もしかして数えている？

「おはよう。今日はばっちりだね」

昨日とは別人のように着飾ったみのりに声をかけた。

彼女は顔を上げ、ドアノブから手を引っ込めて私の方を見た。いつもの微笑みを浮かべている。

耳にはダイヤのピアス、赤く光る素材の生地ブラウスに黒いパンツ、真珠のネックレスが首元で揺れていた。濃い目の化粧もよく似合って、とてもきれいだ。私は、黒いセーターに黒のロングスカート。勝負服はいつも黒と決めていた。

モーニングを簡単に済ませた後、私たちは京都御苑に向かった。京都御苑は上京区にある、京都御所を囲む公園のことである。御所に行きたいわけではなかった。その近くにあるJの出身高校が見たかったのだ。コンサートは三時からだから時間は十分にある。

結局京都で行きたいところは、Jにまつわるところ、つまりJの聖地巡りになった。

京都御苑の東側にある高校は最近建て直していて、それは調査済みではあったが、あまりにおしゃれな校舎は

高級なマンションのようで、そこにJの面影は全く感じられなかった。だけど高校の正門前に立ち、ここにJがいて、この前の道をJが歩いたと想像するだけで、胸が熱くなった。

今から四十年前以上前、たぶん学ランを着ていただろうJ。その頃からジャズ喫茶でアルバイトをしていたというJ。残念ながらその喫茶店は、もうなかった。

御苑の中には東西へ通り抜ける道が何本かあって、多くの人が利用している。高校の前にある抜け道を私たちは通って、ランチ場所に向かった。

白や青や黒い石が敷き詰められた道は見た目も清々しく、歩くたびにじゃわじゃわと聞こえる音は、耳にも心地よかった。すぐ横に御所の築地塀が見え、歴史のある重々しい門が突然現れる。みのりも私も何も言わず歩いた。黙っていると高校生のJに出会えるような、そんな錯覚さえ感じる。時空を飛び越えてしまうような感覚がするのは、ここが京都だからだろうか。御所がすぐ横にあるからだろうか。

「ノンちゃんには、電話した？」

門を出ると、ほっとしたようにみのりが聞いてきた。ノ

ンとは私の娘のことだ。

私は若い時に夫と別れて実家に戻り、今は母と娘の三人で暮らしている。みのりは私の娘の心配を、いつもしてくれる。娘はもう十九歳。専門学校に通っていてアルバイトもして、しっかりした大人へと成長している。

娘は、私がJのコンサートへ行くことを、小さい時から応援してくれていた。私はなんとか娘もJのファンにしたいくて、コンサートに連れて行ったこともあったけれど、それは実現しなかった。娘は韓国の若手グループに夢中で、アルバイトで稼いだお金で、彼らが来日する度に京セラドームや東京ドームに出かけている。

夕べ夕食の前に母には電話をしたし、娘にはレストランで出された、上品で彩り豊かな京料理をみんな写真に撮って、ラインで送った。娘からは「きれい！おいしそう。でも少ないなあ。お腹空きそう」という返信がすぐに来た。「起こしてって言うていたから、今朝モーニングコールはした。寝ぼけた声で、楽しんでねって」

「そう、よかった。ノンちゃん、もう大人だね」

蒸し暑く感じる午後だった。通りを歩くと木々の作る日陰が涼しくて気持ち良い。ランチ場所を選んだのは、有

名な中華レストランだった。窓から、うつそうと茂る京都御苑の木々が見えた。

「夕べの話だけど」

みのりが話し始めて、私は口に含んだばかりのフカひれのスープを吹き出しそうになった。

「今まで、誰にも言ったことがなかったから、自分でもびっくりしている。ごめんね。変なこと言ってる」

「うん。全く気付かなかったから驚いたけどね。でもまあ、そういう癖は、多かれ少なかれ、誰にでもあると思うし」

昼間の明るい食事時に、この話になって良かったと心から思った。穏やかに話せる気がした。

「癖かあ。癖でいいのかな」

咄嗟に出た癖という言葉に、自分でも驚いた。でもそう、癖だったらだれにでもある。

「最初はね、鍵だったと思う。親が働いていたから小さい時から家の鍵を持っていて、鍵がかかっているかどうか、必ず確認するように言われていた。一回でいい確認が、いつの間にか何回しても不安になってきて」

「そうなんだ」

「出かける途中でやっぱり気になって、家に引き返したりしてね、キリがない」

私は春巻きをかじった。中には細く切られたきゅうりと人参に、照り焼きチキンが入っていて、新鮮な野菜のさわやかさと、こつてりとしたチキンの味がからまって、絶妙な味だった。

「ドアノブが壊れたって、言っていたね」

「うん。母が業者さんと呼んで、直してもらったのよ。こんな壊れ方を見るのはじめてですって、業者さんが言ってるね」

「へえ。そんなことを」

「母は、娘が何回もきつく引く張るからって話していて、びっくりした」

みのりのお母さんは気づいていたのだろうか。

「お母さんは知っていた？」

「うん。ドアノブをガジャガジャやっているのを母は見ていたんだって、その時分かった」

「なんか言われた？」

「別に。でもこのままじゃいかんと思った。それで心の中で一から十まで数えることにした」

「え？」

「また壊したらあかんからね。引く張らずに手を置いて心の中で数字を読んで、静かに確認することにした。それも最初は一から十まで何回も心の中で繰り返していたけど、そのうち三回って、自分で決めた」

「それは高校生の時？」

「そう」

みのりはそこまで話して、ジャスミン茶を一気に飲んだ。それから「気になることは徐々に増えていって、今に至るう」と、少しおどけたように言った。

「しんどくないの？」

「別に」

その時、みのりは自分の確認行為、一から十まで数えることを止めたのではないだろうか、と思った。私に助けを求めているのではないだろうか。

でも私には、彼女の力になれるような言葉は何一つ浮かばず、やめたいなら協力するから、というような励ます言葉もかけられず、今回もただ黙って聞くだけで終わってしまった。

コンサートの時間が迫ってきた。会場へ入る前に、Jの

通っていた中学校を見に行くことにしていた。その中学校から会場へは歩いていける距離だったからだ。ランチセットの最後に出た杏仁豆腐をきれいに平らげて、私たちは店を出た。

Ｊの通った中学校は、全国どこにでもある鉄筋の、普通の公立中学校だった。グラウンドでは野球部が練習をしていて、坊主頭の男子がボールを追いかけている。確かＪも野球部だったと思いみのかを見るとき、彼女もうっとりした表情で男子生徒の姿を追っている。

コンサート会場が近いせいか、明らかにＪのファンと思われる女性数人が来ていた。私たちと同じようにおめかしをして、中学校の校門で写真を撮っている。目が合い、お互い頭を軽く下げた。どこの誰かは知らないけれど、志は同じ、もうすぐＪに会える。うれしいですね。盛り上げましょう。みのかも、微笑んで女性たちを見ていた。

Ｊのコンサートは、今どきの若い歌手のステージのよう到大掛かりな装置はなく、少しも派手ではない。ずっと前から彼のバックバンドである四人の、やはり壮年期の男性たちがまずステージに出てくる。そしてＪの全盛期の頃の曲の演奏を始めると、私たちは総立ちして彼の登

場を待つ。無意識のうちに「キャー」と声が出て、涙が流れてくるのは毎年のことだ。

マイクを持って歌いながらステージに駆けだしてくるＪ。なんてカッコいい姿だろう。いい声なのだろう。私とみのかは時々顔を見合わせて、声にならない声をあげる。興奮してお互いの顔は真っ赤だ。そして、夢のような二時間半はあつという間に過ぎていく。

私たちはふらふらになってホテルまで戻った。地下街でうどんを食べ、早々に自分の部屋に戻った。お互いに今夜はあまりしゃべらず、Ｊとの思い出にゆっくりと浸りたかった。

翌日、帰りの高速バスを待つ間に入った、コーヒー店でのことだった。みのかはバッグの中に右手を突っ込んで、下を向いている。何か考え事をしているように見えるが、本当は心の中で数を数えているのかもしれない、と思った。バッグの中で、なにかを確かめるかのように右手がモソモソしているように見えるのは、私の考えすぎかも知れなかったが。

注文して受け取ったコーヒーを渡すと、みのかは「ありがとう」と言って、バッグから右手を出して受け取った。

かまたけんた

今日は蒲田健太に会う日だ。私は車で十五分ほどの彼のマンションに向かい、いつものように駐車場の十八番に車を置いた。

独身者用のワンルームマンションの部屋は、無駄がない。部屋は、小さいキッチンと、ユニットバスとトイレ、八畳ほどの部屋には、シングルベッドとパソコンを置いた机だけしかなかった。キッチンにはなにも置いてなくて、いつもとても片付いていた。

健太は私の職場に五年前に転勤してきた。Jより五つ下の彼とは、なんとなく話が合って、たまに食事をするようになり、その頻度が増えていった。

彼の部屋に行くようになったのは、それからまもなくのことだ。去年健太は隣の市に異動したので、会うのはお互いの休みが合う月二回ほどだった。

健太とのことは秘密だった。職場の誰にも、もちろん私のりにも言っていないし、母にも娘にも言っていない。お互い独身なので隠すこともないのだが、いろいろな言われるのが嫌だった。いい年の大人だし、本人たちが今の状態でいいのだから、それでいいじゃないか、と私は思っている。

た。確かめたことはないが、彼もそう思っているはずだ。

部屋に入ると健太は無言で迎えてくれ、そのまま一緒にベッドへ行く。白髪交じりの髪をスポーツ刈りにし、ずつと柔道をしていたという彼の体はいかにも頑丈そうで、がっちりした体格だった。

シングルベッドは二人が並んで寝るとギリギリの大きさで、身体を密着させないといつも落ちそうだ。ベッドで汗をかき、シャワーを浴びてから、私が買ってきたコンビニのおにぎりとうどんを食べた。

健太は白いシャツにトランクスだけ、私もTシャツにパンティをはいただけの格好なのは、食後にまたベッドで体を密着させるつもりだからだ。

「それで、どうやったJは。今年もよかった？」

健太がおにぎりを頬張りながら聞いた。

「もちろん」

健太の青春時代とJの全盛時代はぴったりと一致していて、Jの歌もよく知っている。ただ若くて美しい全盛時代のJをよく知る彼には、今のJが想像できない。「おじさんになったJが、そんなに見たいのかなあ」と、不思議で仕方ないと言う顔をして、いつも私に尋ねる。「今もか

「っこいいよ」と答える私に、彼は首を傾げる。ふと、健太の若い頃はどうかだったのだろうと思う。

食後に、健太はコーヒーを入れてくれた。湯沸かしポットもコーヒーのカップも、全て収納スペースから出してくる。やがて飲み終えた健太は、またベッドで横になる。私もその横に滑り込んだ。彼の小さい寝息が聞こえた。

みのりとのコンサートの反省会は翌月で、いつもの居酒屋だった。

十月になると暑さもやわらぎ、過ごしやすくなっていた。京都御苑や大通りにあった木々も、秋の色に変わり始めているだろう。そろそろ京都駅も旅行客でにぎわっているはずだと話しながら、ビールで乾杯をした。

毎回のことだが、コンサートの時のJの衣装や楽曲、曲と曲の間に話した内容まで競うように思い出し、一気に話す。そして「いいライブだった。来年も行こう」という結論に至る。

泊まったことは、時間を気にしなくてよかったし、疲れもなくいいリフレッシュになった。来年からも泊りがけで行こうということも決めた。そしたら足を延ばして東

京とかどうだろう、などと来年への期待は、どんどん膨らんだ。

普段私たちは職場ではあまり話さないし、Jのこと以外では、電話やラインもほとんどしない。二人だけでゆっくりと会うのはコンサート以来だった。

私はあのこと、一から十の数字のことについて、みのりに聞かなくてはいけないと思っていた。京都では話を聞いただけで、なにもしていなかった。私のことを冷たいと思っているかもしれない。だがなかなか言い出せなかった。

最初に話し出したのは、みのりだった。乾杯のビール一口で、早くも頬つべたがピンク色だった。

「佳代ちゃん、こないだ話を聞いてくれてありがとう」

私は慌てて言った。

「いやいや、あのままでなにもしなくてごめんなさい。本当はいろいろ相談したかったんじゃないの？ わたしはいつも聞くだけで、なにもしなくて」

「とんでもない」

みのりは急に真顔になった。

「そこが佳代ちゃんのいいところなんだよ。佳代ちゃん

は何もしない。強制しない。何も勧めない。聞いてくれるだけ」

ちょっとだけむっとした。私には、自分なりの考えがなく、いつも何もしていないように聞こえた。

でもみのりの言う通りだった。

Jのコンサートも、みのりがみんな手配してくれる。彼女が思い切って話してくれた京都の夜も、「そうなんだ」とか「ふーん」くらいしか言っていなかった。きつと私はこういう性格で、今まで生きてきたのだ。自分からは言わない。周りが言ってくれて、してくれるのを待っている。そんなずるい性格。でも、それが私のいいところとは決して思えない。

「だから、佳代ちゃんにだけに話したんだよ」

そう言われると、どう答えたらいいかわからなくなった。みのりは、京都でも持っていたバッグに右手を入れていた。あの時と同じように、バッグの中で右手が動いているのが、外からもはっきりとわかった。みのりは私がバッグを見ていることに気づくと、いつもの笑顔で私に言った。「忘れ物がないか、気になるんだよ。バッグの中を見てくれる？ 財布とハンカチ、ティッシュ、スケジュール表、

ペン、携帯。家の鍵、入っているかなあ」

「いいよ」

私はバッグを受け取り、広げて中を見た。彼女が言ったものは、ちゃんと入っていた。そういうと、みのりは「ああ、よかった。ありがとう」と可愛く笑った。

その時は知らなかった。

強迫性障害の人には、自分の確認行動に自信が持てず、周囲の人に代わりに確認してもらって安心を得ることがある。だけどそれは、かえって本人の症状を悪化させることになる、ということ。そんなこと、夢にも思わなかった。私が代わりに確認することでみのりが安心するのなら、それくらいの協力はしようと、思っていた。

みのりは、数字を数えて確認行為するのは家だけだと話していたけれど、どうもそうではない、ということも分かった。バッグの中身を確認する時も、心の中では数を数えているようだった。

それから職場で会う時も、休みの日にJのことで会う時も、みのりは下を向いて考え事をしているように見えることがあった。その時は、たぶん何か不安なことがあって、心の中で確認しているのだなとわかるようになった。

他の人は絶対わからないだろう。

「ちよつと見てくれるかな」と頼まれると、私は代わりに確認した。それは職場のロッカーに鍵がちゃんとかかっているか、ランチを食べた店の、洗面所の水道の蛇口は閉まっているか、と、どんどんエスカレートしていったが、二人だけで会うのはそんなに頻繁ではなかったので、たいたことではないと思っていた。

しばらくして、みのりは会社を時々休むようになった。心配になってラインを入れると、「母の調子が悪いので、しばらく休むかも」という返事があった。「大丈夫です」というみのりの言葉に、それ以上は聞かなかった。結局みのりは、それから一か月介護休暇を取った。

「来年のコンサートの日程が発表されたよ」

みのりからラインが来たのは、彼女が職場に戻ってしばらくしてからだった。かわいい絵文字がいっぱい添えられていた。職場に戻った彼女は、休暇を取る前と全く変わらない様子で、母の調子も安定したと聞き、安心はしていた。

久しぶり会う約束をして、私たちはお気に入りの洋食

屋に落ち着いた。このランチはボリュウムがあつて、おいしい。

「私が、母を悪くしたんよ」

みのりは椅子の座ると、すぐに私に言った。

「いろんなことが気になって、それがもう自分でどうしようもなくなつてきて。全部母に確認してもらうようになってね」

水道の蛇口。ドアの鍵。仏壇のロウソク。排水口。バツグの中身。その頃には他にもたくさんのが気になりだしたが、自分の確認行為だけでは不安が増すばかりで、その度にいちいち母に頼んで、代わりに確認してもらうようになった。自分がするように、数を数えることまで強要した。みのりの要求に応え続けた母は、もともと体が弱かった。そして疲れ果てて倒れた。

かかりつけの医師の判断で母親は入院し、その際母の話を聞いた医師は、みのりとも話し合った。初老の医師とは、父が生きていて、彼女がとても小さい頃からの長い付き合いがあった。結局その医師の紹介で、心療内科に行ったという。

私がなにもしなかった間に、母娘は最悪な方向に進ん

でいた。

「ごめんなさい」

私はみのりに謝った。私は何もしなかったから。いや、何もしなかったらよかったのに、みのりの代わりに確認をして症状をひどくした。自責の念でいっぱいだった。

「ううん。今田さんにも迷惑をかけてしまった。わたしが今田さんを巻き込もうとしたから。わたしの方こそごめんなさい」

自分でなんとか治したいと思ったけれど、結局ダメだった、とみのりは言った。今は病院に通い、薬を飲んでいて、数字を数えることも急に全部をやめようとはしないで、徐々に回数を減らして自分の中で折り合いをつけている、と彼女は話した。

「おかあさんは、大丈夫なの？」

「うん。体調も良くなってる。心療内科の先生と会う時は、一緒に話を聞いてくれて、協力してくれている」

あつ、協力と言っても確認行為じゃないよ。母も、わたしが小さい時に鍵の確認をしつこく言い過ぎたって、先生に話していて、それを聞いてなんか気持が軽くなった、と話した。

「それでね、母も元気になってきたし、ちょうどJのコンサートの日程も発表になったし、今田さんに会いたかった。計画を立てなくちゃ、ね」

コンサートの日程が決定したことはうれしかったが、私の気持ちは晴れなかった。

「わたしはなにもしなかった」「しなくていいことをしてしまった」という思いと、「今田さんは何もしない。強制しない。何も勧めない」と言ったみのりの言葉が心の底で、鉛の塊になって沈んでいた。

ひどくなる前に、私ができることがあったのでは、という思い。

「今田さん。本当にごめん。気にしないでね」

私の気持ちを察したのか、みのりが微笑んで言った。

「今田さんは、いつも聞いてくれる。距離を取って接してくれる。それがうれしかった。今まで通りでいてください。Jファンの同志でいてください」

前と変わらない、みのりの笑顔があった。

私もみのりもいつのまにかランチを平らげている。深刻な話をしながらも、ちゃんと食べることに我ながらあきらめ、なんだかおかしくなった。

Jのコンサートの日程を見ると、来年も九月に京都であることがわかった。

「来年も京都にしようか。あのホテルに泊まって」

私が言うとものりも同じ考えだと、大きく頷いた。彼女の顔はおだやかで、救われる思いがした。

洋食屋の中が暖かかったのか、みのりと会って興奮したのか、外に出ると火照った身体に冷たい風が気持ち良かった。顔にも汗をかいていた。もう十一月も半ばを過ぎていた。店の前の銀杏の木は太陽の光を全身に受けて、葉が黄金色に輝いていた。

みのりとの関係は、前と全く変わりなかった。それからJのことで何度か会っても、彼女が前のように、じっと下を向いて数字を数えるような素振りには全くなかった。

年が明けるとすぐにホテルを予約して、チケットの先行予約も済ませて、次は今度のJの聖地巡りはどこにするか、決めるだけになっていた。

「コンサートが中止になった!」

みのりからラインが入ったのは、三月に入ってすぐのことだった。

前年十二月に、中国で新型コロナウイルス感染症の感

染者が確認されてから、感染は世界各国へ広まっていた。日本では一月、国内初の感染者が報告された。中国武漢への渡航歴のある男性だった。二月には日本で初の死者も出た。

感染には、くしゃみや咳による飛沫感染や接触感染があった。特に、コンサート会場のような閉鎖した空間の中で会話したり、大きい声を出したりすることは、危険なことだった。また高齢者は重症化するリスクが大きい。

Jのコンサートは高齢のファンが多いし、日本人も若くない。早い時点で中止を決定したのは、正しい判断だ、と思った。残念だが仕方がなかった。

でも、みのりと私はJで繋がっている同志だった。みのりと会う機会が減っていく。

健太から「会いたい」と言われて、いつものように彼の部屋に行くつもりでいたが、彼は外でご飯を食べようと言った。珍しいなあと思いつつ、予約していたイタリアンのレストランに行くと、先に健太は来ていた。

コロナの影響は都会ほどではなかったが、それでも外食をする人は少なくなった。店側も客の人数を制限し、テ

ーブル席は間隔を大きく開けている。

ほんのりと優しい照明の店内で、一カ所だけ一段と明るい光が当たっている席があって、健太はそこに座っていた。スポットライトを浴びて、仕事帰りのスーツ姿の彼は、いつもより若々しく見えた。それぞれが好きなパスタを注文し、健太はビールも頼んだ。

「Jのコンサートが中止になったのよ。もうがっかり」

「それは、津山さんも残念だったね」

私が彼女と毎年Jのコンサートへ行っていることを、健太はもちろん知っている。だがのりと健太は、同じ職場の時、あいさつ程度の付き合いしかなかった。

「佳代さん」

急に名前と呼ばれた。名前と呼ばれるなんて、今までなかったことだ。

「おれ、婚活をしようと思う。仕事するのもあと数年だし、結婚を考えるのは今がラストチャンスだと思うんだ」

最近さびしくて、特にこの頃。ずっと一人に慣れていて、今までは孤独とか不安とか感じたことがなかったけれど、コロナとか台風とか大雨とか、この頃世界も普通じゃないだろう。一緒に過ごす相手がほしいんだ。これからの人

生と一緒に楽しめる人が。

「佳代さんは、どう思っている？ もう五年も付き合っているけど、こういう話をしたことはなかったね」

ビールの入ったグラスをじっと見つめたまま、健太は一気に話した。

私は結婚のことを考えたことがなかった。でも、「今までいい」とは言えなかった。そう言うとな健太は私から離れていく。婚活をすると、彼は宣言したのだから。

「佳代さんといると、いつも安心できる。好きな人と暮らしたいんです。佳代さん」

健太ははつきりと言った。

私だって健太いると心地いい。会う日が待ち遠しくて、会うたびに幸せを感じていた。一人で寝る時、口やしぐさや体を思い出すことが何度もあった。

でも結婚と聞くだけで、過去の結婚生活の重く暗かったことばかり思い出してしまふ。楽しかったことやうれしかったこともいっぱいあったはずなのに、記憶からは見事に消えていた。もう何十年も前の、とても若い頃のこと。お互いわがままで、それぞれが自分の思いだけで突っ走って、力尽きた。またあんな嫌な思いはしたくない。

ふと、あの時、別れたいと言ったのは私の方だったことを思い出す。みのりが「佳代ちゃんはなにもしない」と私に言ったけれど、あの時は言えたんだけ。自分から。

でも今は何も言えない。どうしたらいいのだろう。どう答えたらいいいのだろう。健太と別れたくない。

「佳代さんには家族がいるから。もう家族はいらないのかもしいないけれど」

健太の両親はもう亡くなっていて、一人いる兄は、東京で家族と住んでいる。

「ぼくはこれからの人生を、あなたと過ごせたらと思っています。結婚してください」

まじめで静かな口調だった。

私には、明確な返事ができなかった。笑ったような、小さく頷いたような、ふてくされたような、そんな風にごまかした。それから、私は何を食べたのかあまり覚えていない。健太はそれで納得したのかどうかわからなかったが、大仕事を終えた後のように、饒舌だった。

窓の外に雪がちらついてるのが見えた。天から白い花びらが舞い散るように、ほろほろとはかなげに落ちる雪は、地に着く前に消えていた。

Jの今年のコンサートは中止になったけれど、しばらくして映画への出演が決まったことが発表されて、私はみのりと会った。健太と会って二日後のことだった。

この辺りでは珍しく雪が続いて今朝やっと止んだ。まだうっすらと、家の塀や木の枝に雪は残っている。

「なんか、あった？」

みのりの言葉に胸がシュンとなった。Jの映画出演は二十年ぶりのことでうれしいが、国内で感染者が増え続けていて撮影は中断されている。いつものコンサートの話ほどは盛り上がらない。その上健太とのことで、私は浮かない表情だったのだろう。

「実は」

気がつくのと、みのりに健太のことを話していた。最初、蒲田健太と付き合っていたということに、みのりは驚いて「えええ」と大きい声を出したが、その後は黙って聞いていた。

「すごいよ。いつも自分からは何も言わない、なにもしない今田さんが、自分から話してくれるなんて」

みのりとはびつきの笑顔で私に言った。

「健太さんがすごいんだね。そんな健太さんが大好きなんだ、今田佳代さんは」

みのりの顔は生き生きしていて、まぶしかった。

「結婚したらいいと思うよ。健太さんの思いに、思い切って巻き込まれたら」

巻き込まれる、なんて。

みのりの確認行為が続いていた時に私は彼女に協力して、巻き込まれそうになった。決断していいイメージのある言葉ではなかった。

「悪い意味で言ったんじゃないから」

私がい出したことに気づいて、みのりはすぐに言い直した。

「健太さんの思い、よくわかるよ。佳代さんは何も言わないけど、佳代さんの思いも十分にわかっていて、健太さんは言ったんだと思う」

前の結婚にとらわれたらいけない。もういい年だからとか、前にいやな思いをしたことを思い出すとか、そんなことに振り回されてはいけないよ。人生の幅を自分から狭くすることはない。一緒に暮らしていやなことがあったら、話し合って、折り合いをつけたらいい。みんなうま

くいくことなんて、絶対にないんだから。

「佳代さんも、健太さんとずっと一緒にいたいんでしょ」
よどんでいた私の心から、膜がはがれたような気がした。

結婚のことを母や娘に相談すると、二人は意外にもずんなりと受け入れた。これから先、母がもつと年を取り、娘は独立し家を出て、いつか一人になるだろう私のことを、彼女たちが心配していたことをはじめて知った。そして健太と会った高齢の母と年頃の娘は、すぐに彼と打ち解けた。

私の家のすぐ近くに、二人で住むには十分の広さのマンションの空き室があつてそこに住むことに決めると、健太は新しい食器や生活に必要なものを熱心に買い集めた。

季節は春めいてきたが、今年は桜を楽しむこともできなかった。ただ健太だけが、いそいそと買い物を楽しんでいた。彼がほしきと言う食器は、かわいいウサギの柄だったり、バスタオルは明るい色調の花柄だったりして、私は面食らった。彼が一人で住んでいた部屋はいつも片付い

ていて、無駄のものが一つもなかった。私は彼のすつきりした部屋が気に入っていたのに、今も生活用品は、どんどん増えていく。

「わざわざ買わなくても、あるものを使ったらいいのに」
私は文句を言ってしまう。

「家族ができたら買おうと思っていたんじゃないの？
いいじゃん」

娘は健太の肩を持つ。そんな娘と私の会話を、彼はすました顔で聞いている。部屋には、私の選んだJのヒット曲がいつも流れていた。

健太と結婚することをみのりには一番に報告したくて、洋食屋で会う約束をした。Jのこと以外で彼女と外で会うのは、はじめてだった。

オムライスを食べ、食後のコーヒーを飲む。

「みのりさんが私の背中を押してくれたから。ありがとう」

「あの時言ったのは、強迫性障害の治療の時に、主治医が私に言ったこと」

全部そうだよ、それをアレンジしただけ、といったずらっぽく彼女は笑った。

みのりはまだ薬は飲み続けていた。調子を聞くと、「確認行動はかなり我慢できるようになった」と話した。うまく折り合いがついているようだった。

「それより、中断していたJの映画の撮影が、再開されたのを知ってる？」

みのりは、あの優しい笑顔で続けて言った。

「来年映画が公開されたら、観に行こうね。健太さんも一緒に。健太さんもJのファンになるかも。いや、きっとなる」

彼女の笑顔は、今日も私を温かくしてくれる。



了

歌人・柏原千恵子と今年の夏

大石 征也

ここ数年、新しい年を迎えるたび、徳島市在住の画家・飯原一夫氏より、氏の絵をあしらった『徳島慕情』シリーズのカレンダーをいただき、自室の壁に掛けて使っている。本年二〇二一年の初暦は、昭和のはじめ、にぎわう東新町商店街の光景に始まるものとなったが、早くも日は過ぎ去っていま二月、藍いろと白とが絶妙のハーモニーを奏でる雪の助任川を、このところ眺め暮らしているしだいだ。

川は奥手の助任橋の下をくぐって現れると、無数の波紋に彩られながら、右から左へ、ゆったりと広がる。左岸に、もっこりもこも盛り上がるのが城山の原生林。山すそにはお屋敷めいた建物が建っていて、立派な庭木がたくさんあるらしく、綿帽子をかぶってさも重たげ。手近の右岸に目を転じれば、枯葦にふちどられた雪道に、姉と弟だろう、でんちゅうを着た下駄履きの二人がこちら向き

にしゃがみこみ、子犬とたわむれている。画面右下の角から、うろこ状の樹皮に覆われて伸び上がり、頭上高く枝を広げる一本の松……

絵のなかのあの橋を、城山のほうへ渡り、ずんずん歩いていくと、城址のお濠にかかる数寄屋橋があるなあ、などと、読書にやや倦んだ頭で私はおもう。城内へ入らずにそのまま進めば、やがて鷲の門に着く。

濠ばたのさみしきところあらはなる城の石組み
あひて冬

この歌の作者が柏原千恵子（一九二〇—二〇〇九）。先ごろまで徳島市中前川町にある徳島県立文学書道館の三階で生誕百年を記念した企画展が開かれていたひとだ。

戦後の徳島を代表する歌よみのひとり。斎藤祥郎が徳島新聞に寄せた追悼文で「自己内対話の歌」と評したように、その作風は単純素朴な写生歌から遠く、あえて言うなら、技巧的なことばの布置が見せる自意識の劇といったものの。冬の濠ばたを歩いていて、冷たく動かぬ水にへだてられた対岸に「さみしきところ」を見出してしまう目がある。そして、その「あらはなる」さまに羞恥にちかいたたまれなさを感じてしまうところがある。骨肉相食むは言うけれど、石と石が噛みあわねばならないとは、なんとまあ残酷な。私はカーソン・マツカラーズの小説のタイトル「心はさびしき狩人」を連想した。こういう心性をもつひとが、いわゆる「炉辺の幸福」と無縁であるのは、いまだら申すまでもあるまい。

常設展示室の小スペースでの企画展も、これにあわせて作られた小冊子も、柏原千恵子の人と文学を知るに手ごろな、コンパクトにまとまった出来だった。大正九年に徳島市西新町の足袋卸商の家に生まれ、昭和七年に県立徳島高等女学校に入学、国語教師の保科千代次の指導を受けるにあつて、同じ「徳女」出身の瀬戸内寂聴氏がおもしろいかぶ。しかし、次女の晴美として成長した寂聴氏は、

女学校卒業後、東京女子大学に進学、家から自由だった点で、千恵子の置かれた境遇と大きく異なる。

塚本邦雄が徳島新聞での連載をまとめた鑑賞文付きのアンソロジー『現代百歌園』で、百の歌人たちのうちに柏原千恵子と瀬戸内艶を含めて評釈しているのは、慧眼と云うべきか。二人はともに長女であり、婿養子を迎えて家業を継がねばならなかった。家つき娘という宿命に甘んじてきた彼女らが、やみがたい表現欲求にとらわれたとき、あふれ出るものを盛る器が短歌だったのである。いや、千恵子の場合、歌をよむとは、死にあくがれる自らの魂を鎮め、この世につなぎとめる方法だったような気が、私にはする。

小冊子の最後のページに「略年譜」があるが、ここには徳島新聞の「徳島歌壇」選者になるとの記載はあっても、〈とくしま県民文芸〉選考委員就任の文字はない。調べてみると、その就任は平成五年度の第二十五回からであり、第一回から二十五回まで短歌選者の紅一点をつとめた坂本不二子のあとを受けたものとも見え、以後、第三十三回までの九年間、男性選者三名とともに県主催の文芸コン

クルールの短歌の選に当たったことがわかった。

柏原千恵子の〈県民文芸〉選者時代にこだわるのは、彼女の審査評が載った平成十年十二月十五日付の徳島新聞文芸特集面の現物を、今日なお手元に持っているからだ。先に断わっておくと、当時も今も、私に短歌を作る習慣はない。古い新聞を大切に取ってある理由は別にあつて、同じ面の右上に小説部門の選考結果が出ており、私の掌篇小説が森内俊雄の選で佳作に選ばれているためである。その新聞、日に当てたわけでもないのにうつすら焦がしたような色がつき、いかにも年代ものじみてきた。歳月というものはおそろしい。あのころはまだ黒々とあつた当方の頭の毛、現在では大半抜け落ちてしまつて、禿ちやびんになつてゐるのだから。

「略年譜」ではない小冊子本文のほうの解説によると、千恵子は二十五歳のとき、徳島大空襲に遭い、一家で眉山に逃げこんで九死に一生を得たという。これは、作家の森内俊雄が、大阪唐物町の家を空襲で焼かれて徳島市へ疎開してきていた八歳の夏、焼夷弾が降りそそぐなかを母と兄と自分の三人で逃げ、眉山にかけのぼつて生き延びた体験と相同じい。

森内氏が〈県民文芸〉小説部門の選者の任にあつたのは、第二十五回から三十四回までの十年間。この期間は先述した千恵子の〈県民文芸〉選者時代とほぼ重なる。眉山を同じ生き延びの山とする二人が、授賞式の選考委員席に顔をそろえ、言葉を交わすなどしたことは、あつたのだろうか。

くらぐらと病む内臓につづくがにありたる山にいま
冬日さす

柏原千恵子の審査評は、新聞の左上の角のところに、四段に組まれている。小さな顔写真がついていて、額を出し、両耳は隠す白髪、大きなめがねのレンズを透してのぞく目は、ぱっちりと見開かれ、口を一文字に結ぶ。細面の頬に、余分な肉はついていない。まごう方無き老女の顔がそこにある。このとき、千恵子七十八歳。評の冒頭部分は下のとおり。「玉手箱をひらく感じで選するのはいつものこと。今回は作品がやや低調で、伸びやかさに欠けていた。自由な発想のための新鮮な感覚がほしかった。」

「自由な発想のための新鮮な感覚」とくれば、吉本隆明が

『言語にとつて美とはなにか』で短歌的喩の例として挙げたために有名になった「ことごとくに負けゆくわれの後方^{うしろ}より熱きてのひらのごとき夕映」ではなく、

ひとり住むわが夜にしてゆたかなる尾鰭ゆりつつ

石吸う金魚

を挙げたい。「石吸う金魚」の部分は見たままの写生で、私の家でも昔、金魚（蘭虫）を飼っていたからよくわかる。大きく育った金魚のなかには、水槽の底に敷きつめた砂利を、吸いこんでは吐きだし、吐きだしては吸いこむ動作を見せるものがある。あれは沈んだ餌を砂利ごと吸って口のなかで選り分けているのだろうか。もしかして、口腔体操？ あるいは、気まぐれな遊び？

それにしても、結句だけ見れば客観写生にほかならぬ歌が、初句から順に読み下ろすとき、どこか戦慄をともなつた幻影として立ち現れてくる、その不思議さ。

カレンダーをいただいた礼を言うべく出した葉書の後半に、おこがましくも徳島の原風景うんぬんと書いたこ

ともあり、後日、柏原千恵子に葦をよんだ歌があるのを知って、飯原一夫氏に伝えたくなった。

徳島に生まれ育ち、徳島で生を終えた彼女のこと、市内のどこかで群生する葦を目にしたのだろう。その歌の季節を確定するに足るしるしはないが、やはりこの植物の盛時である夏を考えておけばよいのかなとおもう。葦の風景といえ、このごろの私は、徳島繊維卸団地（徳島市問屋町）のすぐ南を流れる川を夢にも見るしまつ。あなたなら、どこの葦をおもわれるのだろうか。

早春の一日、その冷田川を、さかのぼれるところまでさかのぼってみた。ちなみに、柏原千恵子の没後に出た第四歌集『彼方』の奥付にある住所は、「徳島市八万町夷山」となっている。

五十五号バイパスが走る沖須賀橋からスタート。川幅はそれなりにある。海までそんなに遠くないから、満潮時には潮水が入ってきているはずだ。ただし、両岸から葦が生え広がっているため、空を映す面はかなり限られてくる。二月の葦は枯れきって、うすい鳥の子いろがますますうすい。岸边に密集して倒れ伏したものの、散開して水中に半ば没したもの、穂先に綿毛をまだつけたのもあるし、風

にしごかれて使い古しの箒^{ほうき}みたいになったのもある。くちばしをのぞくからだ全体が真っ黒な鳥が、三々五々、ふつうの鴨に比べるとやや長めの、これまた黒い脚を器用に搔いて、水のうえを進んだり、水のなかの何かをあさったりしている。この鳥、とぼけた顔をしていて、ちっとも人間をおそれない。

冷田橋のたもとの交差点を過ぎても葦はつづいた。さらにさかのぼると、川は新旧入り混じった住宅地に入っていく。出水のこわさを忘れ、川べりの田んぼだったところにどんどん家が建っていった感じた。川南橋の上手で葦が消えた。そこから川は浅く平たく、コンクリート三面張りの排水路と化している。こうなってしまうと葦はダメらしく、旧の夷山とおぼしきあたりまでさかのぼっても、殺風景は変わらなかった。

小流れをうづめつくせる大葦にここのみの時間^{とき}が動くゆるらに

「大葦」と呼ぶからには、猛々^{たけだけ}しいまでの大群落なのだら

う。いまは冬の姿のままでだけでも、そのうち根つこのあたりから角ぐみ、すくすくと育って風にそよぐようになり、やがては大葦して小流れを埋めつくす「大葦」となるだろう。

この夏、私はオリンピックなんぞより、その葦の成長をこそ、見届けたいとおもうのだ。



池の畔で (1)

松崎 慧

吉野川市川島町山田字湯吸、それは私が現在住んでいる住所である。山田は吉野川中流域の河岸段丘地にあり、緩やかに傾斜したその先端部の谷合いに大規模な堰堤を築き、大きな灌漑用のダムが建造されている。

そのダムを地元では大正池と呼称している。その貯水池の奥に、もう一つ古池という小さな池がある。もともとは、大正時代に作られたその池の名が大正池だったのだが、今では大小二つの貯水池を合わせて大正池と言っている。大正池には湯吸谷の他に二つの小さな谷川の水が流入している。だからいつも満々と水を湛えている。池には今六十羽余りの鴨が飛来し、遊泳している。私はその大正池の畔に居住している。とても大きくて広い池だから妻はその池を湖だと言っている。それゆえわが家は湖畔荘だと……。そんなしゃれた家ではないが、玄関から少し離れた壁面に、「青灯詩舎」と横書きした加工ボー

ドの表札を吊してある。まだ二十代の若い頃、学生時代からの友人、橋本潤一郎さんと二人で、私は「青灯」という同人詩誌を出していた。彼は澄み切った硬質な詩を書き、私はセンチメンタルな甘い詩を書いていた。三号詩で終わりがたくなかったので四号まで出したのだが、いまその詩誌はどこへ行ったのか、私の部屋の本棚には見当たらない。そして相棒だった彼ももうこの世にはいない。先日、一月十七日の徳島新聞文化欄に、「橋本潤一郎さんの思い出」と題した追悼文が掲載されていた。筆者は竹内菊世さんである。

「学生時代、橋本さんも私も児童文化部に所属していて、人形劇公演に奔走し、夏休みの合宿を楽しんだ」と、竹内さんはそんな青春の思い出をまず記し、互いに同人仲間であった『徳島作家』時代に移っていく。橋本潤一郎は厳しい評論家であった。同人の作品に欠点があれば、急所

を突いて容赦なく批判していた。あまりの厳しさに泣き出した人もいたが、竹内さんは平気だった。口先だけのお世辞を言わず、本音で作品評をし、文学を論じている彼が信頼できたからである。竹内さんが追悼文を書いてる、そんな光景を私も同人として見ていた。「誠に惜しい人を亡くした」と竹内さんは最後にそう書いているが、私も惜しい友人を亡くしたと心から深くそう思った。

追悼文を読み終わったあと、私は彼と会っていた日々のこと、その折々のことを思い出していた。『氷雨』、『遠い橋』、『空征きて死にし』など、彼は優れた作品を次々と『徳島作家』に発表した。彼が四国放送第一制作部長を最後に、定年退職に合わせて出版した作品集の表題作、『彼方からの声』は特に評価が高かった。

ふと気づくと日が暮れようとしていた。さびしくなつて、私は庭に出て、落ち葉をかき集め、火をつけて燃やしていた。その炎を見つめて、私は涙ぐんでいた。煙のせいではなく、“潤さんはもういなくなつたのか”と思ったからである。彼は享年八十七、私もまもなく八十七歳になる。晩年という言葉が脳裡を過ぎり、寂しさが身にしてみた。

山里の冬の夜はとても寂しく、とても寒い。しかし、冴えた夜の星空は美しい。オリオン座がやや南天に高く昇る頃、その近くにシリウスが白く鋭くまたたいている。北天には北極星が輝き、大熊座も燦然と光っている。“冬来りなば春遠からじ”、私はそんな諺をつぶやき、春が来るのを待っている。あんずの花やはくさんもくれんの咲くころ、また会いましょうと約束した人がいるから……。



おゆさ

乾 莊次郎

一

阿波徳島の佐古には諏訪神社や清水寺、天正寺などの寺社が集まっており、界限には小体^{こてい}なしもた屋が点在している。その一軒の前に、さつきからひとりの男が所在なげに佇んでいた。どうやらその家に入ろうかどうかと迷っているようだ。

四十半ばで、背は低く華奢で、落ちくぼんだ眼の奥には人を寄せつけない冷たい光が湛えられていた。大きめの口はへの字に結ばれていて、怒っているように見える。

男は峰吉といって、もとは桶屋町で指折りの指物師だった。遊山箱^{ゆさんばこ}を作らせれば職人仲間から一目置かれるほどの腕前で、御山下^{ごさんげ}（城下）でも知られるほどだった。遊山箱というのは阿波徳島で花見などの行楽の際に用いら

れる重箱のようなものである。

十四歳で弟子入りした峰吉はみるみる腕をあげ、二十三という若さで独り立ちし、桶屋町に仕事場を構えた。二十五のときにはおきわと祝言をあげ、あくる年に授かった娘に「ゆさ」という名をつけたのも、遊山箱同様に寵愛しようと決めたからだだった。

やがて大店はもちろん武家からも注文を受けるほどになり、弟子を三人かかえて注文をこなし、あとはおゆさを嫁にやれば、と思っていた矢先に災厄に遭った。二軒隣りの煮売り屋から出た火がたちまち燃え広がり、峰吉の店は炎上、女房のおきわが逃げ遅れて死んだ。

その日を境に、峰吉は変わった。新しく近所に仕事場を借りたものの、手の動きがぎこちなくなり、道具を持つ手が震えるようになった。当然、遊山箱の出来ばえも悪く、抽斗^{ひまだし}も満足に開けられぬほどになってしまった。こうな

ると転落は早い。師匠に見切りをつけた弟子は次々に暇をとり、半年もたたぬうちにみないなくなつた。

いったん立つた悪評はたちまちひろまり、武家や大店からの引き合いどころか、小商人からの注文も途切れた。蓄えは見る間に減り、味噌醬油を買う金にもことかいた。逼迫してくると、おゆさは奉公に出るようになった。初

めは富田町の料亭で下働きをしていたのだが、三年もすると仲居になり、女としての匂いをたたえるようになってきた。十九歳のときにはなじみの客だった東船場の藍商「森嶋」の主儀兵衛^{ぎへえ}にみそめられて手かけになった。

手かけというのは妾のことだが、この時代珍しいことではない。商家の主ともなるとひとりやふたりは抱えていたものであり、手かけになる女もそれで暮らしているのだから、まわりからはむしろ羨まれていたものだった。

おきわが焼死してから峰吉は自墮落に暮らしてきた。酒が呑めれば躰を壊すまで呑み、気性が荒ければ誰彼かまわず喧嘩をふっかけて怪我をしていたことだろうが、下戸で喧嘩もできない峰吉は小博奕でもするほかなかつた。

寺町の片隅に、住職もない破れ寺がある。雑草の中に墓が垣間見えるような寺で、夜ともなれば虫の音しか聞こえない。昔は本堂があつた二十畳ほどの板の上に莫座^{もざ}を敷き、役人の眼を盗んで夜ごと盆を開いていた。そこへ峰吉はいそいそと通いつめ、行けばたいはいは負けて帰つた。

金がなくなれば胴元が種銭を貸そうと近づいてきた。それが地獄のとば口だということは薄々気づいていたが、峰吉は死ぬ気で生きていたから臆することもなかった。

いつまでこんなことしよんな、と言ひ聞かせてはみるのだが、返ってくるのは「知るかい」という言葉だけだった。

そんな峰吉を見かねておゆさが声をかけた。儀兵衛からもらつていた手当ての大半をくれるというのだ。毎月三日にはおゆさが訪ねてきて金を渡し、ついでだからと掃除洗濯に料理までしてくれた。ごくつぶしの父親など放っておけばいいし、そうしたところでだれも責めはしない。近所の者もみなおゆさの味方をするはずだ。責められるのはむしろ峰吉のほうなのに、おゆさは律儀に通いつめた。

ところが今月は約束の三日が過ぎ、五日になつてもま

だおゆさはこない。

——なんかあったんかいな。

峰吉は眉根を寄せて佐古まで出向いてきたのだが、おゆさの家の前に立つとすぐんで動けなくなった。

凋落したとはいえ実の娘から金をせびりにきたおのれが、不意に醜く感じられたのだった。それに儀兵衛と出くわすのが嫌だったからでもある。

儀兵衛は、三日か五日に一度この家へきて泊まることになっているらしいが、いつくるかは決まっておらず、だから今あらわれてもおかしくはないのだ。いきなりあらわれたら、と思うと峰吉の尻のあたりがむず痒くなった。間男でもないのだから、顔を合わせたとしてもなんら恥じることはなく、これはこれほど腰を折って帰ればいいだけのことなのだが、やはり気づまりなのだ。とはいえいつまでもこうはしていられない。そろそろ陽も落ちるし、だれかが通りかかれば怪しまれてしまう。峰吉は太息を吐いてから玄関の格子戸を開けた。

「おるんかいな……」

喉を震わせたが、声が小さかったせいか気配がない。もう一度腹に力をこめて声をあげると、今度は奥に物音が

あり、やがておゆさが出てきた。

手かけになるだけのことはあって、父親の峰吉ですらつい見とれるほどの器量よしである。背は低いが、丸顔に黒目がちの大きな双眸りょうめが座っている。鼻と口は小ぶりで、化粧はしていないはずなのにほの紅くなった唇に色気がこぼれていた。

あわてて身づくろいしたらしく、浴衣の襟を掻きあわせながら出てきたらしいが、そのふくよかな胸元が父親の眼にも眩しい。

——こりゃあ、儀兵衛はんも虜とりこになるわなあ。
感に入っていると、

「珍しいなあ」

「いや、たまにはと思てな」

峰吉がこの家へくるのは、桶屋町の家から引越したとき以来だ。あのときは風呂敷に包んだわずかな身の回り品を背負ってきたのだが、儀兵衛もきていたからゆっくりしてもいられなかった。

おゆさは峰吉を奥へ入れ、長火鉢の前に座らせてから麦茶でも、と腰を浮かせた。が、峰吉が手を振って遠慮したため、おゆさは尻を落とした。

「忙しいんか？」

手かけが忙しいわけがないことは知っているが、峰吉はそう訊いた。この家には、下女のおさんがいるから、おゆさはなにもすることがない。日がな一日やることもなく、暇をもてあましているはずだった。

「わざわざ訪ねてきてごめんよ」

峰吉が眼を伏せたまま言う、

「ああ、そやった。ごめんなあ」

おゆさが言って眼をそむけたのは、峰吉がきたわけを察したからだろう。

おゆさは眉尻を下げて、

「ごめんなあ」

頭を下げようとするおゆさに、峰吉は片手を伸ばしてやめさせた。

「いつものお金、今月は待ってもらいたいんよ」

おゆさが頭をあげ、さがるような眼を峰吉に向けた。

「いや、ほれはええけんど」よくはなかったが、「どないしたんな？」と怪訝そうに訊いた。

「なんもないけんど……」

そう言ったおゆさの眼は、時雨のように不安でかすん

でいた。

「なにがあつたんな、言うてみい」

娘に金をもらっている男が口にできる台詞ではなかったが、気がついたときは口の端からこぼれ落ちていた。

「心配せんでええけん」

そう言っておゆさは口をつぐんだが、それで笑って帰るくらいならわざわざ佐古まできはしない。

「なにがあつたんな？」

峰吉は、儀兵衛に捨てられたのではないかと見当をつけた。おゆさはまだ二十三だ。顔にも臍にも匂い立つものがあるが、大店の主などというものは、なまじ金を持っているだけに心変わりも早い。次から次へ手かけを替える大店の主がいるという噂を聞いたこともあるし、儀兵衛もおゆさに飽きて次の手かけを見つけたのかもしれないが、そうなったとしても手かけのほうから文句を言うわけにはいかない。儀兵衛の気持ちに従うしかないのだ。

「儀兵衛はんのことかいな？」

峰吉が訊くと、おゆさは素早く顔をあげ、

「ほんなことちゃう」

強く言った。

「ほな……」

なんのことか、峰吉には思いつくことがない。

おゆさは黙りこんだ。秘めておこうと唇が語っていた。

「どないしても言えんのか？」

峰吉がおゆさの顔を覗きこんだ。親にも言えんのか、という言葉が喉元まで出かかったが、それは唾といっしょに呑みこんだ。娘に金をもらっている父親が言えることではないと気づいたからだ。

二人の間をこわばった空気が支配したが、黙り込んでいても埒はあかない。こうしている間にも日は暮れてしまふ。

「ほうか、ほな……」

峰吉も諦め、腰をあげようとしたとき、おゆさが顔をあげた。峰吉は咳払いをし、どんなことが耳に入ってもいいように身がまえた。

「十日くらい前にな……」と言ってから、おゆさはまた黙り込んだ。やはり口にするのはやめようと心変わりしたらしい。しかし峰吉の耳はもうおゆさの次の言葉を待っている。その耳におゆさの言葉が吸い込まれた。

「夜中に男がきてな……」

「男ってだれな？」

「知らん」

「おまえ、まさか……？」

峰吉の頭に浮かんでは間男のことだった。手かけにあって年老いた主の相手をするのは苦行に等しい。親のような老人と本気で惚れ抜いて暮らしている手かけなどいるわけもなく、たいていは金のためだと割り切って暮らしているのだ。

そんな若い手かけの前に、若く逞しい男があらわれたとしたら、ついその気になって男の胸にとびこんでしまいたくなるのは無理からぬことだ。そうして若い間夫とねんごろになった手かけが駆け落ちしたり、主に知られて追い出されるということはままあることだった。おゆさが若い男とできてしまったとしても、責められはしないのだ。それよりも心配だったのは、

——もう金が入ってこんようになる。

そのことだった。

そうなったらどうしようと、そのことだけが頭の中で渦巻いていた。

峰吉の顔を見ていたおゆさの表情が一瞬崩れた。

「ほんなんちやうよ」

「なにがな？」

「男ができた、思とんちやうの？」

峰吉はおゆさを探るように見てから言った。

「ちやうんか？」

「ちやうよ」

おゆさは、悪戯が見つかったとでもいうように顔をこわばらせた。

「ほな、なんな？」

峰吉は息をととのえて訊いた。

「眼が醒めたら男の顔が……」

おゆさは、峰吉の赦しを得ようとするかのように、ゆっくりと言葉を選んだ。

峰吉にはそれだけでなにがあつたかわかつた。

「襲われたんやな？」

おゆさは返事もせず、うなだれていた。

下女のおさんは掃除洗濯に夕餉の支度をすませてから二町ほど離れた家に帰るから、夜はおゆさひとりなのだ。物騒ではあったが、儀兵衛がきたときそばにいたのでは気になる、通いの下女を雇つたらしい。

「気がついたら、口を押えられとつて……」

おゆさはそのときのことを思いだしたのだろう、嗚咽し始めた。

「もうええ……」

峰吉はおゆさをなだめてから思案を巡らせた。峰吉の額に汗が滲んでいたのは暑さのせいばかりではない。そんな嘶を聞かされれば、だれの額にも汗は滲むものだろう。

「ほんで、このこと儀兵衛はんは知つとんか？」

おゆさは驚愕の眼を峰吉に向けてかぶりを振った。なにを血迷つたことを言うのだと、その眼が言っている。

「ほな、だれも知らんのやな？」

「うん」

「ほな、もう忘れてまえ」

峰吉が言った。父親としては酷な言い方かもしれないが、町奉行所へ届け出たところで受けつけてくれるわけでもないことはわかつていた。大店の娘なら岡引おかひきが探ってくれるかもしれないが、そもそも大店の娘がそんな目にあつたら、主は人に知られまいとひた隠すだろう。町家の娘なら話を聞いてくれるかもしれないが、手かけが襲

われたからと真に受ける岡引などいようはずがない。どうせ男を呼び込んだのだらうと一笑に付されるのが関の山だ。そんなことは峰吉も承知している。だから、諦めて忘れるしかないと思ったのだ。

「ほなけんど……」

おゆさがやつと顔をあげた。

「ほの男が……」

「お金を出せえって……」

「強請^{ゆす}ってきたんか？」

「うん」

あろうことか、手籠めにした女を強請^{ゆす}るとは。

「ほんで？」

「このことが知れたら困るやろ。黙っといてやるけん、金出せえ言うて」

「ほんで、渡したんか？」

おゆさはかぶりを振ってから、

「あさつての夕七ツ（午後四時頃）にとりにくるけん、それまでに用意しとけって……」

そう言つて峰吉の双眸を覗きこんだ。

「ほなけん、今月は届けられんかったんよ」

「なんぼ出せえって言うんな？」

おゆさが口にしたのは、おゆさの手当とほぼ同じ額だ。それだけの金を毎月渡せと言つたらしい。ということは、おゆさが手かけだということはもちろん、毎月いくら手当をもらっているかまで調べたあげたうえで押し込んだに違いない。

そうなると噺は違ってくる。こちらが見過^{ひとみ}ごそうとしても、向こうはそうはさせてくれないということだ。

「このままではすまん」

おゆさが峰吉を見たその眸^{ひとみ}に脅えの色がひろがっていた。

「どないしよ。どないしたらええん？」

おゆさが震える声で言つたが、峰吉とてどうしていいかわからない。が、おゆさには、

「とりあえず金は渡しとけ」

そう言つて立ちあがった。が、峰吉の頭の中は灰色の不安が渦巻いているだけだった。

三日後、つまり男が金を受け取りにくるという日の七ツ前、峰吉はおゆさの家から半町ほど離れた辻に立っていた。そこからならおゆさの家に出入りするのがよく見えるのだ。

しかし、夕七ツの鐘が鳴っても男は姿をあらわさなかった。夜中に忍び込んで手籠めにするような男だから約束などあてにならないが、あまり遅くなると儀兵衛があらわれるかもしれない。そうなれば男にとっても都合が悪かろう。儀兵衛に知られるのは好ましくはないはずだった。

それから四半刻(二十分)がたったかと思われたとき、やっと男があらわれた。おゆさの家の前に立ってからあたりを見わたしているのは、着流しの裾から肉づきのいふくらはぎがむきだしになっている二十代半ばの男である。やくざ者らしく雪駄ばきで、背は六尺もありそうだし、もし男が小柄で痩せていたら、その場で殴りつけてやろうかとも思っていたが、男の体軀を見てそのたくらみは頭の片隅ではじけて消えた。

峰吉は喧嘩などしたことがないし、若いやくざ者と取っ組み合いなどすればひとたまりもないだろう。油断し

ているところを背後から殴りつけ、川にでも落としてやろうかというたくらみも抱いたが、そんなことをすればいずれは捕らえられてしまうだろうし、そうなればおゆさにも迷惑がかかる。父親が人殺しということになれば、儀兵衛はおゆさを追い払うことだろう。おゆさは働きに出ることになるが、人殺しの娘が働ける所はこの徳島にはあるまい。おゆさは追いつめられ、いずれは自害でもするしかないだろう。娘をそんな所へ追いつめるわけにはいかない。

では、どうすればいいのか……。

とりあえずあとをつけ、男の素性を探ることにしよう。男の正体がわかれば、あとでどうにでもできる。そう算段をつけて、男が出てくるのを待つことにした。

案の定、男はすぐに出てきた。おゆさから金を受け取ったのだろう、男は佐古橋のほうへ向かって歩きだした。橋を渡って寺町のほうへ向かう。

——まさか……。

寺町の奥には毎夜のように峰吉が通っている破れ寺がある。男もそこへ向かうのではないかと思ったのだが、それにしては早い。開帳するのは夜も更けてからで、今はま

だ暮れ六ツ前だ。いくらなんでも早すぎる。案の定、男は左へ折れ、居酒屋などがたむろしている杉屋町のほうへ向かった。

——なるほど……。

男はおゆさからせしめた金で呑むつもりなのだろう。

案の通り、男は縄暖簾をくぐった。呑める口ならすぐにも中へ入ったことだろうが、峰吉は酒を舐めるだけで酔ってしまうし、それになにより持ち合わせがなかった。

男が酒豪ならかなり長居をするだろう。それなら道端で立っているわけにもいかない。峰吉は新町川のほうへ歩き、川端の石に腰かけて待つことにした。

もう日は暮れかかっているというのに、川面には平船が行きかい、船頭がせわしげに櫂かいを操っている。峰吉はそのゆったりした動きに見いつているうちに眠くなってきた。頭が前に傾くたびに眼が醒めるということを繰り返しているうちに、あたりは暮色に染まっていった。峰吉が店を覗いてみようと立ちあがったとき、縄暖簾が揺れて人が出てきた。灯が浮かびあがらせたのは男の顔だった。

峰吉は再び男を尾行することにした。男は六右衛門ろくえもん

小路こうじのほうへ向かった。佐古を出たときに比べると、男の歩き方はおぼつかない。それでも峰吉が小走りで歩いてやと追いつくほどだった。

左へ折れば新町橋だが、もう日は落ちていているし、男は酔っているから橋番に止められるだろう。にらんだ通り、男はまっすぐ古物町ふるものまちのほうへ歩いていった。やがて路地に入り、裏店うらだなへ消えた。

峰吉は裏店の木戸口で身をひそめ、男が閉めた場所をたしかめてから踵を返した。

棲家すみがさえつきとめればこちらのものだ。あとは慌てることはない。峰吉は家にもどった。

あくる日の夕刻、峰吉はもう一度裏店へ戻り、井戸端にいた四十年配の女房に尋ねた。

「この奥に若い男が住んどると思うんやけんどな……」

それで女房の顔色が変わった。腫れあがった顔をそむけて、うちはなあんも知らん、と井戸に唾でも吐くように答えた。

「ちよつとあいつのことを探つとんやけんどな」

とつさに峰吉は岡引の手下のふりをした。名乗ったわけではないが、探っている、と言っただけで女房の眼に狼狽の影が走った。

「よう知らんのやけんどなあ」

と片身で言っただが、話は聞いてくれそうさだ。

「たしか、名前は……」

峰吉が呼び水を向けると、

「じゅうじ、ですわ」

吐き捨てるように言っただころを見ると、よほど疎まれているらしい。

「じゅうじって、重いに次かいな」

「うちらは十一と呼んどるけんどな」

「十一……？」

「十の次やけん十一なんよ」

と言つて女房は声に出さずに笑つた。

峰吉が笑わないのをたしかめてから、

「ほんで、今度はなにしようたんて？」

女房がしかつめらしく言つた。十次は始終もめごとを起こしているらしい。峰吉は岡引の手下をよそおつたまま、

「まあ、ちょっとな……」

意味ありげに十次の部屋のほうを見やつてから、

「いま、おるかいな？」

そう訊いた。

「まだ寝とんちゃうで」

女房が言つたその口調で、十次がこの裏店でどれほど軽んじているかわかつた。

「いつも、いつ頃出かけよんで？」

峰吉が訊くと、

「日が暮れてから出ていきよんなあ」

十次のことなど口にするのも汚らしいという口調だつた。

十次が出てくるまで待とうと思つたが、こんな処で日暮れまで待つてゐるわけにはいかない。峰吉はそのまま裏店をあとにした。

三

あくる日、峰吉がおゆさを訪ねた。十次のあとをつけていったことを知らせておきたかつたのだ。が、下女のおさ

んがいたため、こみいった嘸はできない。

おゆさが気をきかせて、

「掃除はもうええけんな」

おさんを追い払うと、峰吉は膝を寄せ、声をひそめた。

十次のあとをつけて古物町の裏店まで行ったことや、十次がごろつきだったことをかいつまんで話した。そんなことを知ったところで、おゆさにとつてなんの慰めにもならないことはわかっていたが、なにも知らないよりはましだろう。人はなにもわからないから怖くなる。その正体がわかれば、それだけで心は休まるものだが、むろんそれで片付くものではなく、災厄はそこに横たわったままだった。

峰吉が唇を尖らせていると、おゆさはうなだれたまま、

「こうなったら……」

言いかけて、次の言葉を喉の奥で止めた。

「なんな？」

峰吉がわずかに頭を低くしておゆさの眼を覗きこんだ。

「もう、ええ」

「ええって、なにが？」

「旦那はん言うわ」

「ほんなことしたら、おまえは手かけをやめさせられるんぞお」

「わかつとる」

「ほしたら、もう手当はもらえんようになるんぞお」

つまり、月々峰吉に入っていた金ももらえなくなるということだ。この期に及んでまだ金勘定をしているおのれを唾棄したくなつたが、あてにしていた金が入らなくなれば、博奕どころか、明日の食いぶちすらなくなる。そんなことがくると峰吉の頭の中を駆け巡った。

「ほなけんど……」

おゆさがわずかに顔をあげ、父親の顔を見つめた。

「このままにしとったら、お手当はあの男に根こそぎ持つていかれるんじよ。ほしたらもうお父ちゃんにお小遣いをあげることもできへん。ほれどこでない……」そこまで言つて息を呑みこみ、すぐに続けた。「うちはずつとあの男のなぐさみ者になつてまう……」

そんなことまで案じていたのかと、峰吉は眼をみはつた。おゆさも昔はもつと乳臭かったのに、儀兵衛と会っているうちに商人の知恵がしみこんでいたのかもしれない。「うちも、いつまでも旦那さんのお手かけでおれるわけ

でないしなあ。齡をとつたらいつかは棄てられるということはどうわかつとう。ほなけん、ほのときのためにお金もためてきたんよ。ほのお金も全部あの男に持っていられる。これからなんぼためても、みな持つていかれる。ほんないだいいがあるかいな」

おゆさが吐き捨てるように言った。

正妻と違つて手かけの寿命は短い。齡をとつて飽きられれば旦那に捨てられるだけだから、それまでに金を蓄えて、三味線か謡いの師匠になるのが常だった。おゆさもそうするつもりだったが、手当の大半を峰吉に渡していたから金がたまるわけもなく、稽古事もできなかった。そうしたのも峰吉なのだ。

「ほうやな」

峰吉が大きく頷いた。

「ほんな阿呆なこと、うちはようせん。このことを旦那はんに言うたら、うちは棄てられるだろ。ほなけんどしやあない。このまま食い物にされるよりよつぽどましじゃわ」
峰吉はすっかり大人になつていたおゆさをまじまじとみつめ、胸の中を冷たい風が吹き抜けたような氣になつた。

「なんちゆうても、儀兵衛はんは本店の主だったお人や。わしらにない知恵があるかもしれん。話してみたらええかもしれんなあ」

今のところはそうするしかなさそうだ。

裏店へ帰つてみて、朝からなにも口にしていなかったことに気がついた。空腹を感じなかったのは、心配事で胃の腑がいつぱいになつていたからだろう。

しかし、明日も明後日もこのままというわけにはいかない。握り飯のひとつも食べたいが、それには錢がいる。

といつて借りるにもあてがなかつた。家主に借りようと思つたが、半年以上も店賃を払つていない男に、金など貸してくれるわけがない。よほど度胸があれば別だが、氣弱な峰吉にそんな大胆なことができるわけもない。

隣近所に借りようにも、もともとつきあい薄く、まともに挨拶すらしたことがない。峰吉の顔を見るとたいいていの住人は顔をそむけ、人によつてはあからさまに背を向ける。そんなつきあいなのだ。

並の男ならこんなときに泣きつける者がひとりやふたりはいるものだろうが、峰吉には借金の噺など持つてい

ける知るべなどひとりもいなかった。

峰吉は十次のことを思い出した。あの男も裏店でなめくじ同然の扱いを受けていた。自分がこの裏店の十次ののだということに気がつき、峰吉の胸は冷たくなった。

——どないしたらええんな。

やけくそになって手近にある物を投げてやろうと見渡してみたが、湯呑のひとつも見つからない。水甕の上の棚に湯呑がひとつ置いてあるのはわかっているのだが、投げつけるためにそこまでわざわざ立つて行く気力さえなかった。峰吉は赤黒い怒りを胸の奥に押し込めたまま拳を握りしめるしかなかった。

そのとき頭に浮かんだのがかつて遊山箱作りで師事した親方の久吉ひさよしだった。久吉なら少しくらい用立ててくれるかもしれない……。

しかし久吉には十年以上も会っていない。博奕に手を出すようになると、仕事にからんだ者に背を向けるようになり、頭の中から拭いさってしまった。

峰吉が弟子入りしたとき、久吉は四十の手前だったから、今はもう七十近くなっているはずだった。十年も消息を耳にしていないのだから、ひよっとしてもう死んでい

るかもしれないな、などと思案しつつ、それでも重い足をひきずって、久吉を訪ねることにした。

久吉は子どもの頃から足が悪く、まともに歩けなかった。足をひきずって歩くことはできたが、せいぜい半町ほどで、遠くまで歩くことはできなかった。遊山箱の職人としての腕はたしかで、職人仲間からも高く評価されていたが、それでも嫁がこなかったのは、やはり足のせいだったのだろう。足が悪くても、なんとか暮らしていたのは、峰吉たち弟子が家事を手伝ったからだだった。仕事が終わってから皆で手分けして炊事や洗濯掃除までしてやった。峰吉たちもそれを苦痛に思うわけでなく、それもふくめて仕事だと考えていた。

久吉は仕事をやめてから藍屋町の裏店へ引っ越したという。そこへ行ってみると、もう見知らぬ者が住んでいて、久吉のことを尋ねても知らないといふでもない。それで家守に尋ねてみると、二軒屋へ引っ越したと渋い顔で教えてくれた。眉山の麓、忌部神社いんべの南に観潮寺かんちょうじという寺院があり、その門前町の裏手に住んでいるらしい。

——どうせなら……。

こういうことは一氣にやったほうがいい。峰吉の足は

そのまま二軒屋へ向かった。

四

観潮寺はすぐに見つかったが、そこからがてこずった。このあたりまでくるとしもた屋が多い。人が住んでいるかどうかともわからぬ家を一軒ずつ訪ね歩いて、久吉という老人を知らないかと訊いてまわったのだが、一刻が経っても手掛かりはない。

そろそろ暮れなずんできたし出直そうかと思ったとき、たまたま歩いてきた職人風の男に声をかけた。

「名前は知らんけど……」

と言って教えてくれたのは、十間ほど先にある大きな檜ひのきである。その木の向うに小さな小屋がある。そこに老人がひとりで住んでいるらしいということだった。

顔を歪めて言ったのは、そんな小屋の主を訪ねてきたのだから、どうせろくな者ではなからうという見立てだろうが、当たらずも遠からずだから文句は言えない。

峰吉が行ってみると、それはたしかに少し強い風でも吹けば倒れてしまいそうな小屋で、いつときは名の通っ

た遊山箱の職人だった久吉が、こんなみすばらしい処に居を構えていようとは思ってもよらないことだった。

戸口からのぞき込んでみると、一間ほどの間口に桶や箆へらが所せましと並んでいる。

——どうやら……。

小さいとはいえ、桶屋の真似事をしているらしいとわかった。

峰吉が躰を傾けていると、奥から「だれかいな？」と声がつてきた。その声をたぐり寄せてみると、そこにいたのは背が曲がった久吉である。

久吉は七十近くのはずだが、目の前の老人は八十か九十にも見える。それは着ているものにもよるのかもしれない。夏だからか、半纏はんてんのようなものを羽織っただけで、下は褌一丁という姿。新町川の船頭ならともかく、町中で暮らすにはあまりに貧相だ。しかし峰吉も人のことは言えない。二人とも世間から鼻つまみ者になっているのだ。

「ごぶさたしとります」

峰吉が丁寧に頭を下げたのを見て、久吉もやっと思ひ出したらしく、なにか声を洩らした。

いかに落ちぶれはていようとも、往時は親方と弟子

という間柄だったのだ。親方に頭を下げるのは当たり前のことだった。

「峰吉か……」

老人は小さい眼をくるくる動かしした。

峰吉がうなずくと、まああがれ、と言う。あがれと言われても、三畳間ほどの部屋は大小の桶や箆で埋め尽くされていて、座る所がないのだ。

「いえ、わしは立つてのままで……」

遠慮がちに言ったのだが、実際はそうするしかなかった。

すると久吉は床に散らかっていた桶を器用に積んで隙間を造った。そこに軀を押し込んだ峰吉に、

「お茶でも淹れたいけんど……」

奥には小部屋があり、久吉はそこに寝泊りしているだろうが、台所があるようには見えない。

「独りやけん、めったに火いもおこせへん」

峰吉も独り住まいだし、それはよくわかる。

「年寄りの独り住まいはあかなあ」

久吉は苦笑したが、言葉とは裏腹にそんな暮らしをたのしんでいるようにも聞こえた。

峰吉はあたりに置いてある桶や箆を見渡し、

「これは……?」

すると久吉が、

「近所の人の桶や箆を直したげたら工賃くれてなあ。ほれでなんとか食うていききよんよ」

すっかり禿げてしまった頭を撫でた。

「ほんで食べていきますで?」

「年寄りにはこれで十分やわ」

「ほうですか、ほれはよかった」

我がことのように峰吉は言った。

「おまはんはどないしよるんで?」

「へえ」

峰吉はどう返していいものかわからない。今の暮らしをあからさまに告げることはできそうになかったから、

「わしもひとりで暮らしとります」としか言わなかった。

「嫁はんは?」

「だいぶ前に死にまして、娘も嫁いどります」

峰吉は嘘をついた。おゆさのことを洗いざらい喋る気にはならなかった。そんなことを言えば、十次のことにもふれざるをえない。そんな泥沼にははまりこみたくなか

った。

「仕事は？」

「わしももう遊山箱はやめました。弟子もおらんようになりましたけん」

「ほうか、お互い苦労するなあ」

久吉が黄色い前歯を見せたが、皺だらけの顔になおのこと皺を寄せただけのことで、とても笑顔と呼べるような代物ではなかった。

「ほんでもよかったわ」

「なにがですか？」

「おまはんが元気なんを見て安心したわ」

久吉は目じりに皺を刻んだ。

峰吉はとまどうばかりだった。こんな顔を見て、まさか金を貸してほしいとは言えない。

「せっかくきてくれたのにかもてやれんで、ほんまに悪いなあ」

今度は久吉の眉間に皺が刻まれた。

「いえ、なあんも……。ほれより、仕事の邪魔しても……」
言われた久吉がまわりに積まれた桶を見ながら言った。
「ああ、こんなもん、仕事いうほどのもんでないけん」

かつては遊山箱の名職人として名を馳せた久吉だ。こんな半端仕事が片手間でできることはわかる。

「もう遊山箱はやらんのですか？」

峰吉が言うと、

「遊山箱は細かいけん。この手ではあかんわ。もう齢やけん、震えてきよる」

久吉は自分の右手をまじまじとみつめた。

「わしも近頃は震えるようになりました」

「おまはんまだ若いけん」

「いえ、わしも四十五になりますけん」

「ほうか……」と言ってから視線を天井へ泳がせた。

「わしんとこへきたときは、まだ十四か十五だっただろ？」

「十四でした」

「月日のたつのは早いもんやなあ」

「ほんますわ」

「ほんでも、おまはんはまだ若い。まだまだ仕事もでけるでえ」

「いや、もうあかんですわ」

「あかんことあるかいだ。まだまだや」

「いえ……」

峰吉は、これまでの顛末を久吉に話してしまおうかと思つた。そうすれば金を借りることはできなくとも、なにか言葉をかけてくれそうな気がしたのだ。が、よく思案してみればそんなことを話したところで久吉には迷惑な話だろう。とどのつまりは金を貸してくれと言っているのと同じことだ。そんなことをして久吉の気持ちを傷めるようなことはしたくなかつた。

「ほな、そろそろ……」

そう言つて峰吉は立ちあがつた。そのとき桶が崩れそうになり、あわてて両手で支えた。

そのとき、久吉が「ちよつと待つてよ」と言つて奥へ消えた。

「ほな、もう帰りますけん」

峰吉が声を高くすると、久吉が出てきて、

「これ、少^すけないけんど……」

と言つて、どこで見つけたのか、破れかけた紙を二つ折りにしたものを手渡した。

「これは？」

「さつきも言うたけんど、わしは四、五日食うていける分

しか金を持つてないんじよ。こんな金ではどうにもならんことはわかつとるけんど、なんかの足しにしてくれへんか」

「こんなもん受け取れません」

峰吉が顔を朱くして押し返したが、

「おまはんも困つとんだろ？」

「いえ」

「せつかくきてくれたんやけん受けとつてくれ」

「こんなもんは……」

言いかけた峰吉の言葉は喉で詰まつた。なけなしの金を渡そうとしている久吉の心中を推し量り、おのれがいかに情けないかということを思い知つたからだつた。

「ええけん」

久吉はその紙包みを無理やり峰吉の袂に入れた。それはあまりに軽く、たいした錢でないことがすぐにわかつた。久吉が言つたように、数日食べていける分しかないのだらう。が、そんなことは峰吉にとってどうでもよかつた。久吉が金を渡してくれた、そのことに峰吉は胸を熱くした。

久吉の家をあとにした峰吉は、二軒屋から桶屋町のほうへ向かった。

久吉に金を借りることができたら、それを手に寺町の賭場へ向かうつもりだった。が、足はとまった。紙包みをあけてみるまでもなく、久吉にもらった金が賭場で使える種銭にならないことはわかっていた。それでも、つましい暮らしをしている久吉が、渡してくれたなけなしの錢だ。そんな錢を博奕に使うことなどできるわけがない。

——ど阿呆め。

峰吉は幾度もおのれに悪態をつきながら歩いていった。小役人の役宅が並ぶ道を抜けると、やがて大工町にたどりつき、そこで右へ向かった。

うつむきながら歩く峰吉の頭には、ずっと灰色の重苦しい気分が満ちていた。が、やがてほの明るいものが少しずつひろがっていった。そうさせたのは久吉だった。

——わしも親方のように鑄掛屋いかけやの真似事をするか。

桶や箆を修理すればわしひとりが食っていけるくらいは稼げるだろう。遊山箱作りのほかの仕事などできるわ

けがないと思ひ込んでいたのは矜持からだだったが、そんなものは痰のようなもののだということに気がついた。そんな痰は吐き出してしまえばいいのだ。桶や箆を直すことは屈辱でもなんでもない。恥ずかしいのは娘から金をもらって賭場へ通っていることだ。

——もうやめないかん。

やり直そう。そして少しでも稼ぎ、余ったらおゆさに渡してやろう。もともと十次の厄介事など、所詮わしの手に余るものだ。あんな奴はいずれ悪事をしでかして捕まることだろう。そんな捕り物は岡引にまかせておけばいい。わしはただ桶や箆を修理して食っていけばいいのだ。

おゆさが儀兵衛に洗いざらいしゃべってしまった、たぶんお手かけではいられなくなるだろう。それでもいいではないか。おゆさもそう覚悟していたのだ。そうなればおゆさもどこかで仲居でもするしかないだろうが、それもいい。お手かけほど稼ぐことはできないだろうが、食べていくだけの給金はもらえるだろう。足りなければ、わしが桶や箆を余分に修理して稼げばいいだけのことだ。

そんなことを思案しつつ裏店へもどって戸板を開けて

みると、上がり框かまちにおゆさが座っていた。

顔にはうつすらと笑みが浮かんでいる。十次に食物にされているというのに、なぜ笑顔が、と峰吉は訝しんだ。おゆさは儀兵衛に話したのかもしれない。ということは、

「やっぱり……」

手かけをやめさせられたのかと、峰吉は合点した。しかし、おゆさの口について出てきたのは意外な言葉だった。

「あの男がな……」

「十次のことかいな？」

おゆさが軽くうなずいてから言った。

「捕まったんじょ」

いつかは片付くと思っていたが、それにしても早い。まさかもう十次が捕まっただとは思ってもよらぬことだった。

なぜそんなに早く捕まっただのかと訊くと、

「旦那はんに言うたんよ」

「ほしたら？」

「旦那はんはすぐに岡引に知らせてくれてな」

「うん」

「あくる日にはもう捕まっただ……」

「早いなあ」

「あの男が古物町の裏店におるいうことを知らせたら、すぐにかけて……。札付きの悪やつたけん、簡単に捕まったらしいわ。お金もほとんど返ってきたんじょ。お父ちゃんが裏店までつけていってくれたんが役にたったんじょ」

おゆさは峰吉をたのもしげにみつめた。

てれくさくなった峰吉が、

「ほんで、儀兵衛はんは？」

「なに？」

「お手かけのことは？」

「ああ、なあんも言わんかった。また明後日くるって……」

「ほな、これまで通りか？」

峰吉は愕きの眼をむいた。こんなことがあってもこたわらずにおゆさを手かけにしてくれるのだから、儀兵衛という男は案外度量の大きい男らしい。

「できたお人やなあ」

峰吉が言うのと、

「ほんまに……」

おゆさも大きくうなずいた。

「この恩は一生忘れたらあかんなあ」

「ほうやなあ」

おゆさがもう一度うなずいた。

「ほなけん、これからもお手持ってこれるわ」

おゆさが言うと、峰吉はすぐに返した。

「もうこんでええ」

そんなことを言うとは自分でも思っていなかった。

「ほんでも……」

「じつはな、今日久吉親方に会ってきたんじゃ。ほしたらわしに仕事を世話してくれてなあ。明日から働けるようになったんじゃ」

それは嘘だったが、久吉の暮らしぶりを見て改心し、働く気になったのはたしかなことだから、仕事を世話をしてくれたのと同じことだろう。

「ほんまに……？」

おゆさの顔にみるみる喜色がひろがっていった。

「ほなけん、もうええわ」

「ほんまに？」

「手当はためとき。いつなにかあるかわからんけん。将来のためにためとき」

「ほうやな。いつまでもお手かけはできへんけん。年齢とつたらお稽古事せなあかんし……」

「ほうやなあ」

峰吉は珍しく歯を見せて笑った、

「ほんでも、ここへはくるでよ」とおゆさが言った。「また掃除しにくるけん」

「まあ、気が向いたらきてくれ」

峰吉が精いっぱい唇を開いたが、前歯がほんの少しだけ見えただけだった。

「ほうやな、三日に一回くらいくるわ」

そう言っておゆさは腰をあげた。

見送りに出た裏店の路地を、女房たちがせわしげに行き来していた。

何日か前まではその路地に灼けるような熱気がこもっていたのに、いつのまにか秋気のようなものが漂っていることに峰吉は気づいた。

暴走の果てに

坂井 陽

序幕

淀屋橋駅の地下改札を出て階段を上ると、青銅色の灯籠を三基そなえた石造りの橋の欄干が夕日に照らされていた。この橋の向こうには、古い大阪郵便役所跡の威容が見える。左手で引く小型のキャリーバッグが、粗い路面に不快な音を立てた。思わずハンドルをたたみ路面から浮かせて持ちあげて進む。川沿いを辿れば、遠くにレトロとは対極のA1スปีカーを思わせる前衛的なタワービルが確認できた。巨大な電磁コイルにも見える。中瀬直孝が目指しているのは、この電磁コイルの地下一階部分となる。

大阪フェスティバルホールは、この中之島フェスティバルタワービルの中にある。未知の感染症が影響して今日のコンサートは早くから中止が決まっていた。演奏家が入国できないし、催したところで客が来ない。玄関前に立ち、下りエスカレータのステップを踏むと、アンティークな木を基調としたラウンジが見えてきた。店の正面のB1Fホールに張り出したテーブルの椅子は間引きされ、隣との距離が確保できるよう配慮されていた。

ラウンジに入り二人席にひとり陣取った中瀬は、キャリーバッグを脇に置いた。ラウンジからも見えるデジタルカレンダーには、二〇二〇年五月三日の日付が表示されていた。

「本当に……やるのか？」

中瀬が小さく声を出すと、隣のテーブルに座ろうとした老夫婦が、引こうとした椅子の背を手を動きを止めた。老婦人が電話かとひとりの中瀬を見る。その視線の先、中瀬はだれかと話している様子ではあるが、誰もおらず耳にハンズフリーのイヤホンもない。

「いや、だいじょうぶだよ。絶対に罪にはならない。またフェスにいっしょに来ればいいんだ」

中瀬のひとりごとに老夫婦は目配せし、少し離れたテーブルを探した。中瀬の目の前には二人席のもうひとつの空の木の椅子があるだけだった。

吹き抜けのB1Fホールから見える空は光を失いつつあった。演奏会のないフェスのラウンジは、それもよしと木調の香りを楽しむ年配の客で埋まっていた。

1

五月八日午前十一時、田代行雄ゆきおの勤務する警視庁麻布あざぶ警察署管内で高齢者の運転による暴走事故が発生した。110番通報を本部指令センターが所轄の交通課事故処理担当に振り分け、署内に情報が拡散した。港区六本木六丁目の環状三号線近く、繁華街であったこともあり緊張が走る。重傷者が二名との情報も救急から得ていた。

老人の自家用車による暴走事故は昨今社会問題となっており、決して目新しいことではなかった。以前は車の操作性に起因することもあった。だが今はシフトがパーキングに入った状態でブレーキを踏んでいないとエンジンがかからない二重の安全性を考慮した仕組みが標準となっている。扱いにくさによる事故が減りつつありその分、人が原因で事故が起こり過失として処理されることが増えた。それには高齢者たちは抵抗している。

今回の事故の当事者も、冷静さを取り戻したあとと自分

の非を認めなかった。

——天地神明に誓ってアクセルなど踏んではおりません。

神田が警察署の受付カウンターの脇を通り執務室に入ってきた。それを見た田代行雄はすぐさま体制図メモを手以後を追いつ、神田が自席に着くのを待つて前に立った。手指の先まで伸ばした田代は、ほぼ同年代の上司に対して直立不動の姿勢を保った。

「今度の事故の担当から外していただけませんか？ 今少し家の事情があつて」

「嘘つけ」と神田の反応は素早かつた。

「嫁さんが離婚届出すときも知らないふりして事故を担当してたやつが、家の事情を言い訳に使うか？ 田代、ちよつと来い」

——行雄さんは、もっと器用な人かと思つていたよ。かつて義母だった人から最後に言われたことが田代

の脳裏をよぎつた。

神田にいわれるがままに、田代は誰もいない屋外の喫煙コーナーに同行した。この喫煙コーナーも時代の趨勢に押されて、年度末には撤去されるそうだ。

「下手な嘘つかずに、ちゃんと理由を言え。なぜこの事故のことを避ける」

それだけ言つて神田は上着の内ポケットを探り、煙草とライターを出した。その様子を見た田代は観念したように、白状した。

「あの、……知つてゐんです。当事者のこと」

どちらを？ と聞く神田に、田代は「両方」と申し訳なさそうに応えた。

『利害関係者』のことか。加害者も被害者も知り合ひだつて？ 都会の真ん中で車を暴走させた爺さんも、偶然居合わせた中年二人とも、おまえの知り合ひだつて？」

田代はうなずいた。その関係を神田が問うと、田代の答

えは小声だった。

「新任のころ指示されて外部研修を受けました。被害者は研修中同じチームで、加害者はその研修の教官です」

二十五歳に限定した若手を別の業種の同年代と交流させる社会人向け講座だった。講師は一流の組織で活躍する起業家などを卒業生の伝手から招き入れ、伸び盛りの組織人がそのマインドを学ぶ。経営系の大学で当時頻繁に行われており、今回事故を起こした堀源次は、講師として外務省から派遣されていた。半年六回に渡る講座だったと記憶している。

「そんな研修知らんな。おまえ幹部候補だったのか」

田代は二十代のころは業務成績がよく、この研修を初めとしていくつかの外部交流に出されもした。だが現場好きがたたって三十代頃には出世街道からは外れ、四十も後半となり、もう既に何人もの年下の上司を経験していた。

「彼らと今の自分とで、何か利害に絡む事情でもあるのか」

いいえ、と田代は首を横に振った。

「ないならやれ。その程度の知り合いなら適法だ。ああ、それからこのことは内部の人間にも必要以上に知らせるな。二十年以上前なんて知り合いのうちに入らない」

こんなパワハラ体質の上下関係は今どき流行らないと田代も思っている。しかしそれが当たり前のこととして、その世界にどつぷりと浸かってきたのも事実だった。煮え切らない態度の田代を置き去りにして、神田は真鍮製の灰皿スタンドに吸殻を投げ込み、屋内へと戻っていった。

残された田代が横の灰皿に目を落とすと、スタンドの先に白のミュールを履いた女の脚が見えた。驚いて顔を上げると、そこには誰もおらず、風に揺れるスタンドがあるだけだった。田代は、気のせいかと思いがながらも頭を軽

く振って、自席へと向かった。

事故現場周辺の映像はいち早く回収された。技術担当が、マスコミに先回りされる前に動いた。現場付近の防犯カメラの映像をかき集めて関連部分が抽出され発生順に並べられた。不足する部分は、当時現場を通行し事故後、聴取に応じたタクシー会社の運転手にドライブレコーダーの動画の提供を求めた。今、まさに神田と田代を含む捜査関係者の目の前で、時系列に並べた動画の再生が始まった。

信号が青に変わったとたん、堀の白い車はタイヤを鳴らして急発進した。耳障りな摩擦音にあたりの通行人が一斉に車道に注目する。丸みを帯びたその小型車は中央分離帯を跨ぎ、植え込みを十メートルにわたりなぎ倒した。右タイヤが分離帯を外れ、本線に戻った車はさらに加速して次の交差点に突っ込んだ。左から進入した大型ダ

ンプは、交差点真ん中で急停止した。その堅牢なナンバープレートに左のヘッドランプをぶつけた車は、斜め右に進路を変えた。交差点の角の歩道を横切り、逃げ惑う人の隙間をすり抜けて、ビルの全面ガラス窓に大音響とともに突っ込んで見えなくなった。車道から歩道、そしてビルまでを誰も歩行者を巻き込まずに達したのは、ある意味奇跡にも見える。感染症の影響で、いつもより人通りが少なかったことが幸いした。それでも付近の歩行者は恐怖で座り込んだ。危うく難を逃れた歩行者が、割れた大型ガラスの先を正面から恐る恐る覗き込んだ。そこは解体された工場跡の様相を呈していたが、事故までは純喫茶があった。最後の映像は既に規制線が張られていた。立ち止まったやじ馬の間から、麻布署員の知った顔も自分たちの様子までもが確認でき、負傷者搬送の様子などが記録されていた。

以下は、現場検証や歩行人からの事情聴取に基づく。白

い車は窓際の瀟洒な椅子を弾き飛ばした後、家具や調度品を巻き込み店奥のカウンターに乗り上げて止まっていた。遠くにパトカーのサイレンが鳴り響くころ、原形をとどめない白いボンネットの手前、運転席エアバッグの間から老人が顔を出し、なにごとかとあたりを伺った。

店内での被害者は二人。飲食中、大きなソファごと飛ばされた男女で、同じテーブルを囲んでいてテーブルもろとも跳ね飛ばされた。男はカウンターを跨いだ車の下で発見され心肺停止の状態だった。直接の死因は脳挫傷。一方、女はカウンターを越えラタンの食器棚のガラス扉まで飛ばされた。意識不明の状態が続いているとのことだった。

ただ世の関心はそこではなかった。

運転していた八十代の老人が中央官庁の上級幹部OBだったということで、加害者はすぐに「元高級官僚」と呼ばれ、事故直後から世間の好奇の目にさらされた。

暴走車の標的となり被害に遭ったふたりが、それぞれ四十八歳の市会議員とテレビ局員の妻であったことが取り沙汰されたのは、もうしばらくあとのことだった。

運転していた老人は、書類上軽症とあった。老人の調書は、現実を否定するものとなっていた。

「八十三歳か。この加害者の堀源次は、元外務官僚」

田代の呟きに、何も知らない後輩課員の山下は応えた。

「北米局参事官ってなっていました。たぶんかなり偉い人なんだと思います」

「そうだな、局長のすぐ次くらいか？ 北米担当って言えばね。いい大学出^{とこ}てんだろうね」

そういうながら田代は被害者の欄を見た。何度目かだった。

曾根達也（四十八歳、S市会議員）、

西野由香（四十八歳、主婦）

「この二人は別々？ それとも知り合い？」

田代の質問に山下は手元の報告書に目をやった。

「ああ、知り合いみたいです。店員の話だと待ち合わせのよう
で別々に来店したようです」

「同い年の市会議員と主婦か……。とりあえず、学校関係
だけ調べておいてくれ」

山下は少し怪訝そうな顔をした。老人の暴走事故で亡
くなった被害者の学歴は、他に優先して調べることとは
思えなかったのだろう。田代はそれでも必要な処理だと
言い聞かせて山下には何も言わせなかった。田代は知っ
ていたが、どうせばれるだろう田代と二人の関係を、早め
に山下に気づかせたかっただけだ。

自席に戻った田代は周りの目を気遣いながら、机の一
番広い引き出しを開けた。そこには二十三年前の研修時
に撮影した研修チームでの集合写真があった。前列に三
人、後列に四人。前列の真ん中の椅子に講師の堀が座り、

ぎりぎり五十代か、色艶もよく仕事への自信がその風貌
に現れていた。両脇に女性が二人、堀の左横にはアパレル
店員の西野由香、右横には当時、大学の研究生だった姫野
奏子^{かなこ}が立っている。そして後列の四人は全員男だった。左
から長身の地方局アナ中瀬直孝、ひと癖ありそうなS市
職員の曾根達也、小柄で幅のある堤^{つみ}義博、個人輸入商を
営んでいる。そして右端に警察官の田代自身が映ってい
た。もうかなりの日数が経っているため色あせているが、
今回亡くなった曾根と重症の由香を含む全員が当時の二
十五歳の若さを放っていた。いや、そろそろ五十を迎える
現在の田代自身から見れば、堀を除く写真の六人は、皆い
かにも子供に思えた。なぜか後列左の中瀬だけが左には
み出したような位置にいて前が空いており、はにかんだ
ような表情が印象的だった。もうひとり前に女性がいれ
ばバランスがとれるのにと、どうでもいいことが浮かん
だ。

姫野奏子が堤義博に慌てて電話したのは、もう午後四時を過ぎたころだった。勤める大学での講義を終え携帯電話のニュースメールを確認した奏子は、とある暴走事故の被害者の名前に目が留まった。死亡した曽根達也の名だけが掲載されていた。重傷者名は例によって非公開であったが、ネットでSNSを手繰ると割と容易に由香の名も判明した。

「いま、大丈夫？」

「LINEじゃ間に合わへん用事なんか。ちょい待って」
電話口の音に軽い騒音が加わった。少し音程が外れた「通じゃんせ」の電子音。横断歩道だ。堤は外にいるようだ。

「暴走事故のニュース読んだ？ お年寄りの運転する車が急発進してふたり死傷者が出たって」

もう外国の訛りは完全に消えたなと堤は思った。奏子

は子どものころ家族の海外勤務に同行し、帰国後は有名私立大学に編入した。そのせいか英語は堪能だが、日本語に独特の摩擦音が混ざった。舌打ちがわりのShuとか現地のスラングが出たりする。卒業後は日本を極めるとかで大学に残り助手として教授の研究を補佐してきた。現在では文化人類学の教授として教壇にも立つようになった。「曽根くんが亡くなったみたい、それにいっしょだった由香も重症だった」

曽根の訃報の連絡に堤は愕然となった。今は市議会議員として演台で市政報告を行う曽根達也の姿が浮かんできた。割れた声で弁慶のように大衆に向かう曽根は力強かった。由香というのは、もちろんあの西野由香のことだ。

「なんで、由香ちゃんと曽根がいっしょにおるんや？」

二人の混乱は、少しの理由づけでは解消しそうになかった。

確かに曽根は由香と付き合った時期もあった。しかし、

いまの由香はアナウンサーの中瀬直孝の妻となっている。以前から仲が良かったグループのメンバーとはいえ、もうアラフィフの域に入った由香と曽根が、二人だけで会っているなど穏やかではない。いや、逆に気にするほうがおかしいのか。

「それもあの堀先生の運転やろ。どないなってるの、これ」
「最近、彼らと話す機会あった？」

「そんなもんあるかい。そら、研修のあとならまだしもな。あの堀先生のジュニアの一件以来、もう会えんようになった。それはわかるやろ？」

「ええ、まあね」

「堀先生は、息子を放置した曽根に恨みがあつたかもしれない」

「その話はやめよう。また、何かあれば連絡します、忙しいところ、ごめんなさい」

自分で電話を掛けながら、先に電話を切ったのは奏子

のほうだった。

軽傷とはいえ堀の見た目は重傷者のようだった。首にむち打ちのギプスを装着し左目の上には絆創膏、右ほおは赤く腫れていた。前開きの開襟シャツも首のギプスのせいだろう。

死亡事故とはなったものの加害者も高齢で負傷している。これが堀が逮捕されなかった理由だ。証拠隠滅と逃亡の恐れはないと、上司の神田が判断した。上の決定ではあるが、元高級官僚であったことがその理由ではないと田代は今でも思っている。

身柄が拘束されていない堀の捜査は在宅でも可能だ。だが堀は自らの意志で出頭した。その首の曲がらない状況でも堀は田代に丁寧な頭を下げた。田代は質問項目を整理したバインダーを手に聴取を始めた。書記は山下が務めた。

小さくなった。久しぶりに会う堀は田代の目にそう映った。あの頃の堀は退職直前で「再就職先も決まっている」と飲みの席で聞いた。再就職とは天下り先のことだ。人生で一つの大仕事をやり遂げ、次に向かう気力と自信にみなぎっていた。今は姿勢こそよいが、毛量も減り筋肉も落ち、少し気難しそうだ。が優しい眼をしたひとりの老人でしかなかった。死傷者が出ていることは伝えているが、年齢を考慮し被害者の詳細は伝えられていなかった。これが老いというものかと田代は思い知った。

型通りの事実確認のあと、田代は質問した。

「本当にアクセルは踏んでいなかったのですか」

「ああ、確実にブレーキを踏んでいたよ」

事故直後の簡単な状況調査でも気が付いたことだが、堀は元参事官という中枢の要職にあったわりには、過剰に思えるほど低姿勢である。ことばは多少紋切り型だが、高給取りのおごりなど一ミリも感じられない。

「それを証明することができですか」

「うん。わたしは高齢でも認知症ではない。ただ足元が多少覚束なくてね。それで足元のブレーキの左横に少し大きめの足置きを用意して用心してた」

今日初めて見る堀の笑顔が、目の上の絆創膏にその動きを阻まれ、少しひきつった。

「足置き、フットレストですね。それ効果ありましたか」

「ブレーキを踏むとき、あれ、あの踵を中心に右足先を左に動かすと、足置きの部分に足先が当たるの。そこから真下に踏めば確実にブレーキが踏めると思っ取り付けさせた。これなら年寄りでもアクセルと踏み間違えることはないよ」

「そうですか。右寄りの位置から左に足先を振りブレーキの端に当たり、足置きと思っ下を踏んでアクセルを踏み込むことはなかったですか？ ブレーキの位置に踵があるつもりで、実はアクセルの前に踵が来るといこう

とです」

「それはない。車というものはブレーキをまず踏まないとエンジンがかからない。そこで踵は固定される。それにフットレストとブレーキはほぼ同じくらい手前だが、アクセルはブレーキよりも二センチくらい奥にあるので、その違いはすぐにわかるよ」

堀の証言は特に威圧的でなく単純で明解だった。人が嘘をつくときのような目をそらす行為も確認できなかった。

「特に他に気づいたことはありませんか」

田代の問いに堀は少し考えるようなそぶりをしてから応えた。

「ブレーキがちょっと硬かったような気はする。なんとなくか、いつものようにゆつくりと踏み込めないというか、何かがひっかかったような」

「機器の故障ですか。それとも何か他が原因ですかね」

田代の質問に堀は少し時間をおき考えたあと「よくわからないね」とひとことで返した。

堀の田代を見る目が、少し柔らかくなるのが感じられた。

「それより、あなた田代さんだろ？　ずっと昔に異業種交流に来てた」

いきなり言われて田代は言葉に詰まった。そのことを知らない山下の手前もある。

「そう……です」

堀も表情を崩したが、一番驚いたのは山下だった。

自分が傷つけたのが研修当時のかつての教え子だと知った堀は、取り乱しこそのしなかったものの肩をがっくりと落としてうなだれた。田代は流れで曾根と由香のことを話した。堀が田代自身を思い出した以上、隠し通すことが逆に不自然と思われたからだ。

「どう思う、山下。堀は嘘をついていると思うか？」

堀への事情聴取後、田代は聞いた。山下は田代をいたずらっぽく目で見たあと応えた。

「言ってくれないんだもん……加害者も顔見知りだったってこと……まあ、事情はお察ししますが。嘘はついてないんじゃないですか？　ことばは少しきついですけど、嘘ならば答や姿勢がまっすぐすぎます。理屈はあつてますしね」

「だよな、ありや嘘つきの顔じゃない。でも、事故車の映像からはアクセル全開だろう？」

「まあドラレコの画像見れば、むしろ加速してますがね。嘘をつかないはずの本人の談によれば、ブレーキだけを思い切り踏んでみたいですよ」

山下は冗談好きの陽気な男だが、その判断は冷静で田代の頼りにもなっていた。

「知ってる人を二人も車で轢いて、それが偶然でしたな

なんてこと本当にあるんですねえ」

山下は書類に目を落としながら呟いた。

「堀は二人の教え子があの喫茶店にいたこと、知ってたんでしょうか」

「まず、曽根と由香が教え子だったことは、さっき堀は覚えてたよな。その二人があの日喫茶店にいたってことは、そりゃわからんだろうよ」

田代が急に山下のほうに振り返った。

「ひょっとして、堀は二人を狙ったのか？」

「狙うって老人が暴走事故で二人を？　そんなバカな」

山下がすぐに否定した。

「あんな無茶な加速で暴走したあと、カフェの二人を狙うんですか？　そんな、若くたって無理だ」

それまで堀源次という良識も節操もある老人の、認知症というより認知力の衰えに起因する暴走運転が疑われていた。走行ルートも偶発的で、植え込みをまたぎダンブ

の前部に薄く衝突し、右にずれ歩道を経由してビルに突っ込む。計画性などまるで感じられない。本来であれば「過失」と判断した場合は「故意」の調査は行われない。だが、田代は仮に「故意」だとして堀が得をするかどうかに着目した。そして一歩進んで「得をするのは誰」という観点で事故を事件として見直すことにした。本来、偶然であるべき過失の加害者と被害者が、かなり以前のこととはいえ「師弟関係」の時期があり、今は教えた側が教わった側を死傷させたのだから。

田代は二十三年前の研修生を整理しなおすため、もう一度机の引き出しから古い写真を取り出した。中央の重厚な木製の椅子に堀源次が座っている。肘掛けや四脚から覗くマホガニーの光沢に細かな装飾が施され、曲線が見事に形づくられていた。

堀の左に写る西野由香は、長い髪のひ弱な娘だった。外

見から無垢で幼く見えたが頑固な一面もあった。そのアイドルのような容貌から特に男子に注目されていた。小柄な体型を大きく見せようとしているのか、白地にグリーン縦のストライプが入ったワンピースを身につけている。それでも座る堀の横に立てば、子供のように見えた。研修の何年かあと、後列の中瀬と結婚して、中瀬由香となった。

前列右に立つ姫野奏子は深紅のベルベットのドレスを着ていて、由香とは対照的に大人っぽい顔立ちと細身の長身によく映えている。帰国子女として表向き自己主張が強そうに見えるが、実は由香ほど我を通すことはなく、極めて常識的な人だと田代は感じている。

後列の四人だが、左端の中瀬直孝は民間放送のアナウンサーである。背が高く見栄えもよい。卓越したアナウンス技術と声の良さで納得の採用と目された。ただ友人として見た場合、口下手で根暗、前列の由香との結婚後の連

絡はだいたい由香からのものだった。今はあまりテレビでは見ない。研修時は独り言を言うなど、特異なキャラクターを放っていた。

後列二人目は市会議員の曽根達也。政治学科を卒業後、市役所に勤務していたときに受講した。筋肉質の大柄で高校までのあだ名は「弁慶」。局アナの中瀬よりも前に出ての説得力あるブレゼンが得意な明るい男だった。

後列三人目は個人輸入での貿易商の堤義博。小柄で丸く首が太い。性格と体型から「世話好きアルマジロ」というのが高校までのあだ名だったそう。在学中から海外を一人旅し、卒業後、輸入品販売業を立ち上げた。その経験を買われデパートの買い付け担当をやったこともある。三十代は各百貨店のバイヤーなどともつながっていたが、最近アマゾン経由の個人ネット販売に活路を見出したところと聞いている。

最後、後列右の端は田代行雄。自分だ。警察官。

「堀参事官には何を教わったのですか」

山下の問いに田代は少し躊躇してから応えた。

「『選択と集中』。今から考えれば当たり前のことだけど」

「実践型の演習ですよ」

「そう、一般職の上司部下の事例に、毎回、チームで解決手段を探り出していくやり方だった。堀さんの解説よりも、畑違いの人たちとの考え方の違いを経験できることの方が貴重だったね。公務員は善悪の判断が早い、民間の場合は経済効率とか調整に重きを置く、みたいな」

当時はこの六人ひとチームで堀の指導を受けた。研修終了後は、男子は堤が世話役になり、女子は由香が奏子と会話しながら、夫の直孝にも伝え全体の調整を図った。

最初の数年は全員が定期的に会っていたが、最初に局アナの中瀬が多忙を理由にグループから外れ、その次に田代が秘匿性が高く緊急招集も多い警察業務に欠席を重ねた。当時かろうじて交換していたメールも、人によって

はエラーが返ってきていた。

今回の事故で、六人の研修ＯＢのうち、曽根達也が亡くなり中瀬由香がまだ意識が戻っていない状態で、四人が残された。田代は何かひっかかるものを感じた。

後ろのドアの辺りで物音がした。振り向くと、ショートヘアの四十歳くらいの女性が立っていた。誰……と言いながら、椅子の肘掛けに手を付き向き直ると、そこにはもう誰もいなかった。疲れていると感じた田代はパソコンを閉じた。

3

「久しぶりです。お忙しいところすみません」

田代が堤義博を少人数の会議室に迎えて言った。今日は書記の山下は不在だ。

「またまた、珍しい人からのお招きやな。それもこんな物騒なところで」

堤は、高級そうで少し派手なスーツを着て現れた。最近ではスーツを着ないサラリーマンが多いが、個人事業主である堤は身なりも商品なのか服装にはスキがなかった。「聞きたいのは、堀先生と曽根とのことやろ？ あのミレニウム同窓会の時の」

えっ、と田代はいきなりの堤の問いかけに戸惑った。ミレニウム同窓会……今から二十年前のちょうど二〇〇〇年の初めの頃、久しぶりにみんなで会おうと繁華街のスナックに集合したことがある。研修から三年後のことだった。そのスナックは堀源次の紹介で、なんでも堀の次男である堀直樹が共同経営者として営んでいる店だった。堀の家庭の事情は当時でも話題になっていた。堀源次には息子が二人おり、長男は親に倣って国家公務員だった。しかし、次男のことはわからず、しばらくすると次男の直樹は体が弱く病気がちで、学校も卒業できていないということが知れた。緻密な作業が得意なので職人の道

を模索したが、何をやっても長くは続かないらしい。そこで共同経営者という形で、堀の知り合いを伝手に飲食業を始めさせており、カウンターの内側でカクテルを創作することも仕事だった。それが同窓会で使ったスナックだった。

「あの夜、先生の息子の直樹が、奥の小さな厨房で亡くなったの覚えとるか？」

「ああ、心臓発作だったか、覚えてるよ。俺は仕事かなんかで、もう店にはいなかった」

「そうやなあ、あんとき俺も帰ったんやけど、結局最後はぼろぼろに酔うとった曾根と、店の片付けのため直樹の二人だけがその場に残った」

「それは知ってる。それがどうかした？ 今度のことと関係があるのか？」

堤は、誰もいない部屋でふたりしかいないのに、田代に顔を寄せ小声で言った。

「堀先生は、直樹が死んだのは曾根のせいとちがうかと思とるふしがあった」

まさかと田代は思った。堤の話では、曾根は中学校と堀直樹と同じ学校で、個別の交流もあったとのことだ。表に出ていない直樹の過去を曾根が握っていてもおかしくはない。ただそれは推測の域を出ず、そのあと堤に聞くも、その根拠らしきものは何も出てこなかった。

「ありがとう、また、何かあったら呼び出すかもしれない」
「次は、奏子に声かけるんか？ それとも中瀬か？」

「中瀬は忙しそうで、メールアドレスももうわからない」
「まあ、どうせ俺は暇やけど。中瀬の新しいメールアドレスなら知ってるで。そしたらまたな」

曾根と由香が会っていた理由は堤も知らず、二人が事故に遭ったのは堀の恨みではないかという奇妙な疑問だけを田代に残して、堤は帰っていった。

エントランスの朽ちかけた踏み板が軋む音のあと、ドアについたカウベルが鳴った。姫野奏子は、グレーの地味なパンツスーツに黒いパンプスを履いて喫茶店に現れた。「ごぶさたしてます。私はカフェなの？ 堤くんは警察に出頭したって言ってたけど」

「出頭じゃない、今日は会議室がふさがってただけ。あっちがよければ連行するけど」

「おお、こわ。それで、聞きたいのは曾根くんと由香の関係？」

堤といい奏子といい頭の切れる人たちはすぐ核心に触れたがる、と田代は思った。結論を先にという姿勢は警察も助かるが、それが田代には上級者の嫌味にも思えた。

「なぜ曾根が由香と会っていたのか、そして堀源次は意識していたことなのか、聞きたい点はそこ」

上級者の思考に、田代も必死でついていくことにした。「曾根くんに相談してたんでしょうね、由香は中瀬くん

とうまくいつてなかったから」

そうなのか？ という表情を奏子は予想しており、次のことを準備していた。

「中瀬くん、背が高くてイケメンで声もいい。でもいっしょに住むとどうかな、って男のあなたでも思うでしょ？」

奏子の問いかけに田代は、口数が少なくニヒルな中瀬のことを脳裏に思い描いたが、表情には出さなかった。

警察人の田代は、相手のことばに過剰すぎる反応はない。こちらのリアクションで次のストーリーが変わってしまうことを避けるためだ。旧知の奏子とはいえ、田代はその姿勢を崩さなかった。

「中瀬と由香との夫婦仲がおかしいなと思ったのは、いつごろのこと？」

「もう五年も前かな、中瀬くんが協芸テレビに移ったころ」

「子会社に出向して、ますますテレビで見なくなった頃

だな」

六本木にある協正テレビから、藤沢にある協芸テレビという制作中心の関連会社に移ったことは聞いていた。

「そのころ由香から、毎日連絡があるようになって。出番が少ない、会話が減った、近所のお店が少ない、面白くないって、そんなのばっか。結局由香だけが東京に戻った」

「由香はもともと都会の子だからな」

地方出身者の田代には都会は付加価値だが、由香にとっての地方は罰なのかもしれない。

「そう、名家の娘で親が資産持ちで、会社継ぐため社会勉強目的で会社入ったけどすぐ辞めて、アパレルやりながら親のお金で高い研修にまで参加して」

「そこで会ったのが、イケメンアナウンサーの中瀬っていうわけか」

「そう。でもね、研修の前半は由香は曽根くんにかかと相談してたみたい」

「曽根ならやりそうだな。間口広いし気も多い」

「でも結局、由香はあのあと中瀬ちゃんと結婚した。性格よりブランドイメージを選んだのかもね」

当時の由香はアイドルみたいな容貌で年齢より若く見え、何も知らないような顔をしていながら、しっかりと男選びに精を出していたということになる。妻の家出を追わなかった田代には、女の心が理解できなかった。

「姫野さんなら、曽根を選んだ？」と田代が聞いた。

「わたしは曽根くんもいや。彼、ちょっと危ない」

よくわからない、と田代は首をかしげて見せた。

「堀先生の息子さん、曽根くんに恨まれてたみたいよ」

「なぜ、そう思う？」

「中学のとき、堀直樹は同じクラスだった曽根くんに脅されて万引きさせられてたんだって」

研修時、受講者に曽根がいることを父親から聞いた直樹が、自分の経営するスナックで奏子に打ち明けたよう

だ。

「それをミレニアム同窓会るとき、直樹が『お前も盗んだじゃないか』と酔った曾根くんに言って、カウンター越しに、二人でちょっと言い争いがね……」

ミレニアム同窓会といえ、曾根が市職員から議員への転向を計っていた頃だ。余計な風評は避けたい時期だろう。

「この前、堤くんから堀先生が曾根くんを疑っていると聞いて思い出した」

「なぜ今までそれを黙っていたんだ？」

ちよつとの時間、考えてから奏子は田代に白状した。

「だって曾根くん、やり手の議員さんだし怖かったから」
曾根が亡くなった今は怖くないというわけか。田代はわかり易すぎる奏子の動きの拠りどころに、正直感心していた。

「表向き分からないけど、中瀬くんは養子に入ってたみ

たい。中瀬直孝は芸名みたいなもので、本当は西野直孝なのね」

奏子は今度は中瀬のページを開いた。興信所みたいだ。「どうしてそんなことわかった？」

「一度、中瀬くんがいないときお宅のマンションまで邪魔したことがあつて。表札が『中瀬・西野』連名だったので、由香に聞いてわかった。養子縁組が、ひとりっ子の由香の親御さんからの結婚条件だったみたいよ。結局、子どもはできなかったんだけれど」

奏子の話は勝手に膨らみ、仮想的に飛躍していった。

「そうすると、西野家の資産は兄妹と子供のいない由香夫婦に相続されるわけだね」

「それも調べた。結婚したとき一度、中瀬姓を名乗ってからあとから養子縁組してた」

「するとどうなる？」

「由香が亡くなっても養子関係があるので、中瀬くんは

西野家に残り、西野家の財産を手に入れられる」

奏子息をつく頃には、コーヒーは冷たくなっていた。

「どうしてそこまで調べられた？」と田代は半ば感心して奏子を見た。

「そりゃ大学の人間だからね。基本的に調査とか謎解きは得意だよ。役所で閲覧できるものの範囲で十分調べられる」

ふたりは温かいコーヒーを入れなおして、ひと息ついた。

「今回のこと、堀先生はどう思ってるんだろう」

田代は問うた。

「由香のことは別にして、曽根くんことは敵討ちできたと思ってるかもね。表にそれ出すような人じゃないけど。本当に悪いのは曽根くん？」と奏子は詠うように言った。

「でも、結果的に得をする中瀬が何をたくらもうが、犯人

にはなりえないね」

田代が言うのと奏子が「どうして？」と口をはさんだ。

「うまくいかない由香を曽根といっしょに殺そうと思つて、堀さんの車に何か仕掛けるとするよね。姫野さんだったら、どんな細工をする？」

「信号が青になったら急発進して、暴走してダンプかすめて二人を轢く細工をする」

「あるか、そんな細工。今度、大学でそれ研究してみるか？」

奏子との話は、そこで終わった。

署に戻った田代に山下が声をかけた。

「ちょっと気になるデータが出てきました」

田代が案内されたのは先日、暴走事故の録画を見せられた技術倉庫だった。

「顔認証システムっていうのがありまして、まず、これを

見てください」

山下が再生ボタンを押すと、前回見たものと同じ画面が動きはじめた。だが、前回と異なり暴走する白い車のまわりで黄色い正方形が出たり消えたりしている。

「この黄色い点々で囲まれた四角の中には人の顔があります。人の顔がコンピューターに『顔』として認識されているんです。ちょうどデジタルカメラを構えたとき、人の顔を認識する緑の枠、あれと同じです」

しくみはよくわかったが、それで何を示したいのか田代にはわからなかった。

山下の説はこうだ。もし仮に第三者が誘導的に事故を発生させたとしたら、現場に犯人はいるだろう。事故の起点となる横断歩道と、最後クルマが突っ込んだ喫茶店の両方にいる人物を特定することで犯人に近づけるはずだと。本当にそうだろうか和田代は思ったが、とりあえずやってみてもらった。

その条件で洗い出された五名を関係者の顔と照合した。「この顔を今回の捜査上の人物の顔と照らし合わせてみます。するとこんな人が出てきました」

山下が示したのは、少し疲れた顔をした四十八歳の中瀬直孝の正面写真だった。各動画の正方形の一部とその特徴が一致していた。

「暴走車が跨いだ植え込み越しに見える歩道と、激突後の歩道の二箇所では中瀬の顔が認識されています。スタートを見極め、ゴール地点の確認のためそこにいたとも考えられます」

山下は自説に自信を持っている。そろそろ中瀬への事情聴取が必要だと田代は感じた。ただひとつ問題なのは「こんなやり方で」と強く言えない点だ。どうすれば作為的に事故を起こせるのか。技術的にそんな複雑なことが可能なのか。

倉庫内のロッカーの向こうで何かが倒れる音がした。

「誰？」と山下が声をかけたが返事がない。山下は、ロッカーの後ろに回り、暗がりにもいないことを確認した。田代は繰り返される異音に、誰かがそこにいるような気味の悪さを感じていた。ロッカーの後ろには空のゴミ箱が倒れていた。

田代と山下が倉庫の明かりを消すころには、倒れたまままだった空のゴミ箱は元のとおりに起こされていた。

その夜、田代は私的なメールではなく、協芸テレビに直接電話を入れた。

4

「もっと早く呼ばれるかと思ってました」

田代が山下を伴って聴取室のドアを開けると、窓際を外を見ていた中瀬が振り向きざまに言った。さすがアナウンサーで滑舌のよい声はこちらにまっすぐ響いた。忙しい身だと勝手に思っていたが、任意なのに中瀬は電話翌日の真昼間に署に現れた。受付の女子職員は中瀬の来

訪を田代に告げるとき「かつこいい人ですね」と無駄口をたたいた。

「奥さんの容態はいかがですか？　まだ意識は戻っていないと伺っていますが」

「田代さん、敬語はやめましょう。せっかくの友達なんだから堅苦しいことは抜きで」

そんな友達にメールアドレスが変わっても教えないのかと言いたかったが、黙っていた。

「それで、何をお話したらいい？」

「まあ、そう慌てないで。それより中瀬さんはこんな平日の昼間にだいじょうぶなのか？」

田代の問いに、中瀬は今の勤務状況をアナウンサーへの志望動機から語り始めた。

もともとは、引つ込み思案でことも遅かったが、勉強を兼ねて朗読や放送部に力を入れて克服したこと、声に張りが出て試しにキー局のテレビ局を受けたら受かった

こと、だが原稿読みはできても、現場リポートなどアドリブが求められると対応できなかったこと、自分の陰気で自己本位の性格から敵ができたこと、明け方のニュースや裏方の取材など力仕事ばかり増えて、結局制作中心の子会社に転勤させられ、由香ともうまうまなくなかったこと。中瀬のことばの内容は深刻で、ひと言ひと言に説得力があった。

「由香はもともと派手好きな女で都会が似合う。俺だけで単身赴任することになった」

奏子の話では、由香は転勤に同行した後の逃げ帰りだった。田代の意識が一瞬離婚した妻に移り、あわてて振り払った。

「五年前のことだな、お子さんはいるんだっけ」

「こんな有様なんで、作れないうちに夫婦でアラフィフになった」

ちよっといいか、と中瀬が目をそらして窓外の緑で目

を休めた。中瀬がずいぶん疲れているように田代には感じられた。

「なぜ、事故の時、あの場所にいたんだ？」

「親会社、協正テレビの前だからだよ。あの時は出張で目抜き通りに面したビルに来ていた。六本木は賑やかでないね」

「暴走中の歩道や、激突後のガラスのビルの横にもいた理由は？」

「そりゃ、ひとたびあんな重大事故があれば、一介のアナウンサーでも報道魂に火が付くだろうが」

「それじゃ、事故前に歩道にいた理由にはならない。堀さんが運転してたとか、曽根と由香さんが跳ね飛ばされたことは知らなかったのか？」

「ああ、あとから聞いた」

「状況的に関係者が揃いすぎてるんだよね。堀と曽根、由香の三人でも変なのに四人目までね。それ変だと思わな

いか？」

「それを言うなら捜査する田代はどうなんだ？」

五人目を中瀬に指摘され、田代は返す言葉がなかった。

休憩後、田代は堀と曾根についてそれとなく中瀬に尋ねた。

「堀先生が曾根と由香さんを轢いたんだよな、偶然に」

「曾根さんを恨んでたってネタを話そうとしてる？」

「ああ、知ってるよな」

「まあ、堀先生が疑っていたからね、曾根さんのこと」

あ のとき中瀬はスナックにいたが、酔いつぶれた曾根が目を覚ましたのでいっしょに帰ろうと誘ったこと、大丈夫もう少しいると断られて自分は堤といっしょに店を出たこと、そのとき堀直樹に何の問題もなかったこと、翌日事件が明るみになって驚いたこと、堀先生から問い合わせがあったこと、など淀みなく語り続ける様子に、田代は相槌を打ち続けた。

「堀直樹が引きこもったのは同級生だった曾根のいじめのせいなんだと、堀先生に言われたことがある」

なぜ、そんなことを今ごろ明かすんだ？ いま知りた
いのは中瀬の動機であって堀の曾根殺害動機じゃない…
…。田代は混乱していた。しかし中瀬のことばには、いち
いち説得力があった。それに田代にはもう一つ気になる
点があった。

中瀬に聞いてみた。

「おまえいつからそんなおしゃべりになったんだ？」

田代の問いに中瀬は言葉を止め、何とも言えない苦笑
いを浮かべた。

「アナウンサーだから、少しは口がまわるさ……」

話の腰を折られたようで、言いよどんだ部分を口の中
で反芻するように、中瀬はぶつぶつと言いだした。

「……こんなこと言ってるけど、どうする？ なあ、おい」

主人の独り言が怖いんだと、以前、中瀬由香から聞いた

ことがある。独り言をいうとき、まるでもうひとり人がいるようにリアルなんだそう。そんなことを頭に浮かべながら、田代は中瀬を見た。誰か相手がいてしゃべっているようにも見える。いや、気のせい。田代は職務としての頭に切り替えて、中瀬に語りかけた。

「ごめん、いつもこんな人を疑うようなことばかり言ってしまうんだけど、な、中瀬、教えて。こっちの世界で急におしゃべりになる人が時々いるんだけど、それわかるか？」

「アナウンサーじゃなくて、か？」

「そう、人に説明し尽くして不安になり、さらにしゃべって不安を消そうとするやつのことをこっちの業界では」

中瀬がしっかりとこちらを見つめたのを確認して田代はひとこと言った。

「犯人、みたいだなって思った」

中瀬は一瞬、目を閉じて固まった。

窓越しの六月の木々はむせかえるような緑を幾重にも湧き出していた。濃い深緑の音を聞くように姿勢を保った中瀬は、ゆつくりとまぶたを開いた。その瞳がまっすぐに田代を捉えるころには、中瀬の口角はほどよく上がっていた。

「面白いなあ。ねえ、山下さん」

いきなり振られた山下は、手をとめて中瀬を見た。

「仮にわたしが犯人だとしたら、いったいどうやって手を下したんだろうね。山下さん、わかるかい？」

中瀬から田代に目を移した山下は、うなずく田代を確認してから書記作業に戻った。

「しよがないなあ、じゃあ、教えてやるよ。そのかわりにちゃんと理解しろよ。一〇分休めるか？」と田代に声を掛けた中瀬は、許可を待たずに席を立った。窓際に移動して庭の木々に体を向けたまま、両腕を上には伸ばして頭上で組み大きく背伸びをした。

なあ田代、物心ついたのって何歳だったか覚えているか？ 俺か、たぶん五歳か六歳のころだったろうかな。

小学校一年生のころの担任の顔と名前は覚えている。

簡単なこととはいえ叱られた記憶もある。初めて漢字が何かを試験されたときのプリントが、机の引き出しで折れ曲がり奥に追いやられてしわくちゃになった。木製の机と椅子が添え木で繋がった小さな席の引き出しだったが、一年生の子供には十分に大きくて奥行きも感じられただよな。

季節の変わり目に席替えがあった。新しく俺の席に座った女の子が、引き出しの奥にくっついたプリントを見てつけて先生に報告し、俺は名前を呼ばれた。「中せ なたか」ってな。不自然に折り目のついたプリントを広げた名前欄には、やっと一字だけ漢字となった自分の名前があった。別に粗末に扱ったわけではなく、薄っぺらい教科

書に押されて奥に押し込まれただけなのに、ぞんざいに扱ったと見なされた。それを誤解だと先生に説明するだけの語力が当時の俺にはなかった。やさしい担任の口が「へ」の字に変わるのを初めて見た。真実は違うと思いがらも、先生を理解させられないもどかしさ。たぶんそのころが物心のつきはじめなんだろうな。

子どもから大人への成長は早い。この世に生を受けてほんの二年足らずで意味ある言葉を次々と発しはじめる。そのとき本人に自覚はなく、あっても後に残らないかもしれないが、そうやって口真似から言葉に触れ、知識を身につけ、大人という完成形に近づく。

でも、果たして大人とは完成形なのか。成長とはすべて足し算の結果なのか。引かれるものはないのか。成長とはいいながら、年を経るとともに衰えていく機能はないのか。見えなくなるものはないのか。俺はあると思っていたよ。

保育園のとき、その子はいた。呼び名は「ヒロちゃん」

だった。ヒロコなのかヒロミなのかも当時は意識さえしていない。記憶だけに残っているが大好きだった。言ったとおり微妙な時期なので出会いまでは覚えていないが、おそらく保育園の同じクラスになったのがはじまりだろう。おかっぱの真っ黒な髪で、他の子たちと同じ黄色い幼児服に赤いブリーツスカートを履いていた。砂場で遊ぶときは上を脱いで吊り紐付きのスカートになった。いつも仲の良かった「カナコちゃん」も含めて三人で遊んだ。砂場で水を使って遊ぶときは、俺の持つジョウロの下に塩ビのピンクのお茶碗で水を受けてくれた。子供会のお遊戯のときにはカナコちゃんとヒロちゃんの間にいて、それぞれの手を繋いで踊った。

小学校になるとふたりが俺の前から消えた。カナコちゃんは転勤族のお父さんと外国に行ったと後にわかった。ヒロちゃんはわからない。大きくなった俺が名簿を確認

するとヒロちゃんは小学校どころか保育園にもいなかった。まわりの誰に聞いてもヒロちゃんのことを覚えていないという。お遊戯の写真にもカナコと俺が手をつなぐ写真しか残されていなかった。

昔いたけれど今はいない。存在どころか人の記憶からも消えてしまう人がいることを、俺は初めて知った。ヒロちゃんが行った遠足も、俺は覚えているが他の誰も知らない。

疑問に思った俺は、そのことを母親に話した。遠足のときヒロちゃんからもらったキューピーのキーホルダーを母に見せた。しかし母の反応は優しいが冷たく、思い違いだと一蹴された。それ以上、何の説明をする気力も失せた。

小学校の高学年の段階で俺はひとつの結論を出した。自分にしか見えない人がいることを。世の中には俺のように、「普通の人には見えない人たちが見える特別の人」がいる、ということ。多くの人が子供のころ見えたもの

が、成長するにつれて見えなくなり、やがて記憶とともに消去される。しかし、俺は知っていた、見えなくなる人たちが純然とこの世には存在していることをな。その証拠に姫野奏子を見る。あんなに小さいころいつしよに遊んだカナコなのに、やつはヒロちゃんのことはおろか俺が存在したことさえ覚えていない。大学の先生になる頭脳にしてあのぎまだ。そのころから俺は人のことをあてに
はしなくなった。

でもいいんだ。俺には見えなくなったヒロと再会することができた。大学の時だって、最近だってヒロちゃん、今なら本名だつてわかる。都築^{つづきひろな}紘奈だ。紘奈にかかれれば、堀先生の車に乗り込んで暴走させたり、アクセルを踏み続けたり、ハンドルを操作して間違はなく二人を撥ね飛ばすことだってできる。

「ちよっと、いいか。中瀬、いったんここで止めよう^と」

懸命に書いていた山下も中瀬の話の予期せぬ展開に、田代のことに助けられたという表情でペンを置いた。

「山下、書記ちよっと休んでもらっている。休憩だ」

山下が退出するのを待ってから、田代は中瀬に話しかけた。

「事故の原因を妙なオカルト話にすり替えるのはやめろ。子どものころ消えた女の子が出てきたって、なんだそれ」

田代の指摘に中瀬はひるまず答えた。

「人の話は最後まで聞いて判断しろ。種明かしをするって言ったじゃないか」

幻覚が見えるから話しかける、ならそれでもいいと田代は思った。神経系の薬剤の副作用や高齢者のせん妄で現れる妄想でもなんでもいい。ただ、見えるだけの実体のない幻影に、人間にできない仕事をさせられては、こちらも動きようがない。田代は、せめて生身の人間の中瀬が出来ることを肩代わりしてほしいと、切に願った。

「戻りました」という山下の声に、中瀬の供述は再開された。

どこまで話したっけ。ああ、都築紘奈との再会ね。紘奈とは三年ごとくらいに会った。最初に再会したのは中一のところで、ただ見えるところに立っているだけだった。最初のうち、周りに「誰？」と聞いたところ、変人扱いされていじめられた。俺には見えるけど他の人には見えないみたいだ。だからそれ以降、居ても見えても無視することにした。怖くなかったかだって？ 別に怖くはないさ。俺にとっては普通に見える幼馴染だからね。他の人には見えないから見えない人がぶつかることもあるけど、彼女が見えない人は、ぶつかっても問題はない。普通にすり抜けているみたいだったから。ずっと俺についてくる。

数年ごとにやってくる紘奈と話ができるようになったのは高三のころで、そのときに初めて名前がわかった。研

修の写真にも写っていたんだ。俺の前で由香の左横にね。紘奈の外見か？ 俺と同じようにしつかりと歳も重ねてくれている。当時は二十代、今や、みんなと同年代の四十代だ。

紘奈はちょっと変わってるんだ。特殊能力といってもいい。動きは速いし力も強い。俺の周辺のことなら、昔のことも今のことも何でも知っているし、たぶん将来も見えてる。怖くて聞けないけど。同年代の異性ということで、いつも相談相手にもなってくれている。彼女もその情報を得て俺という人間を理解してくれていたようだ。堀源次が車で近くを通ることも知っていた。曽根と由香が隠れて逢っているところだって紘奈には見える。協正ビルの前から指示すれば、堀の車に一瞬で乗り込み、堀の両手の甲の上からハンドルを両手で握り込み、体を回して思い切りアクセルを踏み込むことだってできる。堀の右足とブレーキペダルの間に左足をねじ込みブレーキ

を踏ませないことだって可能だ。堀さん「ブレーキが硬い」
って言うっていただろう。

紘奈の左足のせいだ。動きが速いということは猛スピードの車だってゆっくりに感じるということだ。慎重に微調整しながらハンドル操作で暴走車に見せかけることくらい簡単だ。

緊急事態宣言って知ってるよな。感染症の対応でこの四月七日に始まった行動制限だ。五月の連休明けで終わるはずが終われなくなった。延長される。そう、感染症がコントロールできないから。五月三日の大阪出張のこのとだ。世の中がおかしくなると紘奈が現れる。京阪電車の京橋駅の向こう側のホームに立って静かな目でこちらを見ていた。

「それで何を話したんだ」

田代の問いに、中瀬はまあ待てと飲み物で喉を潤した。

「感染症で、将来を悲観して自分を見失うやつがいるって」

暴走車を運転したからといって堀ではなさそうだ。

「今度中瀬くんが六本木に出張のとき、近くのカフェで由香が曽根さんと会うんだって。そこに堀先生が車で通りかかる。そのときビルの前に出たら、いろんな人に見えるよ」

当初、紘奈が誘っていることの意味が中瀬にはわからなかったという。

警察でも事務方はテレワークなのか？　まだか。テレビ局もそうだけど、未知の感染症の拡がりをお心配して、世のホワイトカラーの多くは自宅で作業しろって言われている。見た目はみんなただのパソコン作業だと思っているが、オンラインは人間の意識を変える。ネット上の同僚が薄っぺらなゲームのキャラクターに見える。実際に会

うよりは効率的だからと合理的にみえて実は深みがない。

はみ出した意見は「方向性が違う」とか「現実離れ」と言われて排除され、世の中の褻ひだが取れる。ますます世の中が単純化されて、投票が全ての「見せかけ民主主義」みたいなのが進む。確かにこれもデジタルだ。当事者たちはそれでいいと安易に妥協する。でも違うんだ。割り切っているようでストレスは溜まる。だって人間の存在って本来アナログだろ？　そういった微量の不平不満の澱を、無記名式のSNSが拾い上げる。芸能人が不倫をすれば業界から消え去るまで追求し、テレビで演者が気に入らないことをすると死ぬまでたたきまくる。感染症の影響で、いつだれが命を落とすかもしれない、常に精神はストレスにさらされている。堀先生の曽根への怒りも、俺に対する由香の心変わりも、曽根の由香への邪心も、感染者数と死者数を数字だけで見せられ続けた弱者の必然なんだよ。

6

「で、堀源次の車を暴走させたのは中瀬、君なんだな？　その方法を裁判所がどう判断するかは別にしてだけど」

田代は言葉を挟んだ。山下と自分の脳を休まるために。「裁判で、わざとやったんだってことを証明するための証拠、ひとつ提供しようか？　いま流行りのエビデンスってやつ」

中瀬は、ますます生き生きとして顔を山下に向けた。

「山下さん、まだ仕事できますか？」

「あ、はい」と山下に断る隙を与えない。

「暴走車の映像で顔認証に通したデータ、今映せます？」
本当にこいつは何でも知っている。それが、署の灰皿スタンドで見えたミュールや、ドアの脇に立つ四十代の女、技術倉庫のロッカーの異音の誰かの仕業と、思いたくはなかった。田代はそのことを口にも出さなかった。

「はい、動画データと顔認証システムが、隣の部屋のパソ

コンにあります」

あつ、と言つてもよかったのかと山下が田代を恐る恐る見た。

「すみません、それと液晶プロジェクタとディスプレイケーブルを持って来てもらつていいですか？ 田代、いいか？」

田代は山下に向かつて頷いた。少しの間、休憩を入れてから三人は元の場所に座った。机上のパソコンにケーブルがつながれ、液晶プロジェクタが画像を白壁に投影する。

「操作はお任せしますね。さすがに私、被疑者なんで」

中瀬の口調が、だんだん楽しんでるように感じ取れることが、田代には引っかけた。

「まず、暴走車の映像。そう、それです。ありがとうございます」

子会社に飛ばされたとはいえ、さすがはテレビマンだ。

機器の操作に長けている。

「次に、暴走車に顔認証を重ねます。そう、この協正ビルの前の黄色い枠が、たぶんわたしですよ、山下さん」

山下は中瀬に言われるがままにパソコンを操作した。

田代は何も言わなかった。

「最後です。さっきと同じですが、顔認証の感度をさらに上げて設定してもらえますか。そうです、埴輪の顔とかパンジーの花、バナナの断面でも反応するくらいに認識の範囲を拡大してから、動画データに通してほしいんです」

山下がパソコンのマウスを操作し設定メニューを出して感度レベルの調整値を右にずらした。さらに「曖昧許容」のパラメータにチェックを入れて、動画を再生した。すると前回以上に黄色い四角が立ち上がり、壁面の画像のあらゆるところに顔の存在を示す黄色い正方形の枠が現れ、は消えた。

「はい、そこでストップ」

中瀬の声に合わせて山下が動画のポーズボタンを押し

た。

「ここです」

壁に投影されたビデオ画像の、中瀬が指し示す部分に田代は目を近づけた。

「これが運転中の堀先生、このように四角い枠がありますが、これ」

壁に写る運転席の堀の顔あたりの四角の横にもうひとつ黄色い正方形があった。

「これです。これが『都築紘奈』です」

運転席の何も映らない空間に小さな四角が浮かび上がり、顔として認識されていた。

「わたしだけにしか見えないはずが、この手の機械には反応するんですよ」

これが紘奈がいる証拠だということか。田代は運転席の四角を凝視した。

「山下さん、停止解除をよろしく」

中瀬の声に従い、山下がパソコンのマウスで再生ボタンをクリックした。

運転席の堀の顔あたりに映る黄色い二つの正方形がならんだままで、植え込みをまたぎ、赤信号の交差点に進出し、ダンプをかすめてガラスのビルへと突入して消えていった。

誰がこんなこと信じるものか、と思いながら田代は動画再生の終わった聴取室の白壁をいつまでも見続けた。

堀源次の裁判が始まった。いつまでもアクセルの踏み間違いを認めない元官僚の態度に、マスコミは「新たな上級国民」と叩きにかかった。高級官僚の好待遇を享受したあと法的にも庇護された老人への反感は大きかった。感染症による政府の各種制限で職を失い、家を失い未来をも失った一般市民の鬱積した感情の恰好の餌食となっ

た。交通事故はなにも関係していないはずなのに。本人はそれを見る環境にはないが、SNSでは今も堀への攻撃の火が燃え盛っている。

堀直樹の死については、四半世紀を過ぎ、被疑者の曽根が既に死亡しているため、世間の話題に上ることはなかった。

中瀬直孝の供述による見えない人間を原因とする調書は、科学的な根拠が希薄であり一般の裁判員制度にもそぐわないということで、田代の上司である神田の決裁箱から外に出ることはなく、保管期限を待たずに廃棄された。

中瀬の事情聴取後一か月を待たずに、曽根に続き由香もこの世を去った。

西野グループをあげての西野由香の葬儀は、東京タワー近くの浄土宗の寺で盛大に執り行われた。喪主となった中瀬直孝あらため西野直孝は、親族席の上司に座して

各界の重鎮を迎え入れた。人の流れが少し途絶えたのを確認した直孝は、境内の大松に目をやり三か月前の初夏の大阪・淀屋橋駅を思い返していた。

終幕

地下改札を出て階段を上ると、青銅色をした三基の灯籠が石造りの欄干ごと夕日に照らされていた。古い大阪郵便役所跡を正面に歩きながら、絃奈が右手で引く小型のキャリアバッグが、粗い路面に不快な音を立てた。中瀬は思わず絃奈の右手に重ねた左手でハンドルをたたみ、路面から浮かせて二人で持ちあげて進む。絃奈が中瀬を見て笑った。肌の張りを失った年相応の絃奈の顔も中瀬のお気に入りだ。絃奈の体を対向してくる多くの通行人が通り抜けていく。川沿いを辿れば、遠くに石造りとは対照的なA1スピーカーを思わせる前衛的なタワービルが確認できた。

「六年ぶり。また連れてきてもらって、ありがとうね」

絃奈が中瀬に語りかける。前回の大阪出張の時にもここを訪れた。

「でも前回のコンサートは散々だったな。客に怒ってピアノが演奏しないなんてこと、なかなか体験できない」

あの時も二人だった。二〇一四年五月、キースジャレットのレコーディングも兼ねた大阪フェスでのソロコンサートは、最前列に陣取った外国人客のマナーに怒ったピアノが演奏を拒否するという行動に出た。録音に爪痕を残そうと異音を立てる悪質な客に演者がキレたのだ。せっかく中瀬の席の横、通路のキャリーバッグに座った絃奈も、わずか十五分の演奏のあと、再開されない演奏に会場をあとにすることとなった。

「いいんだよ直孝、その場所にさえ行ければ。思い出なんだからさ。こんな状況でコンサートやったって客は用心

して来ないし、そもそも演者が入国できないよ」

絃奈の声は明るかった。玄関前から下りエスカレーターで階下に降りると、木を基調としたラウンジが見えてきた。先に入ろうとしている老夫婦が入口のメニューを見ている間に後ろをすり抜け、二人席の脇にキャリーバッグを置いた。

「本当に……やるのか？」

中瀬が小さく声を出すと、隣のテーブルに座ろうとした老夫婦が、引こうとした椅子の背を手を動きを止めた。「そうだね、曾根はこのまま放つとけないよ、だってずっと前にも堀直樹の胸突きとばして死なせてるし、お父さんもそれが許せないでしょ？ 曾根は来年の今頃、直孝の奥さん、由香さんも痴情のもつれかなんかで殺すみたいだ。曾根はこれ以上生かしといたらまずいよ。だいたい、やるのは曾根だけ。堀さんはそんなに怪我させないから」

コンサート会場を意識した紅いシルクのドレスを着た
絃奈は、近くに立つ老夫婦も巻き込みそうなほど両手を
広げて、三回ターンして見せた。こっん。絃奈の赤いハイ
ヒールが椅子の脚に当たって音を立てた。その椅子の背
に手に掛ける老婦人が、電話中かとひとりの中瀬を見る。
「もう、ここには来られないかな。直孝は捕まるかもしれ
ないんだよ」

「いや、だいじょうぶだよ。絶対に罪にはならない。また
フェスにいつしよに来ればいいんだ」

中瀬のひとりごとに老夫婦は目配せし、少し離れたテ
ーブルを探した。中瀬の目の前には、中瀬だけに見える絃
奈の姿と二人席のもうひとつの空の木の椅子があるだけ
だった。

吹き抜けのB1Fホールから見える大阪の空は光を失
いつつあった。二人は人のまばらなラウンジで、昔聴いた
ジャズピアノのコンサートの余韻に浸っていた。



蜘蛛の移り

林 宝珠

ズズズ。ズズズ。踵を引きずってゆつくりと歩いてるのが自分でもわかるほど足が重い。しかし、酔っ払いに早く歩けというのは無理な話だ。おまけにけばけばしく光るネオンの灯りが眩しい。ここは徳島市鷹匠町。

同人雑誌「宇宙船」の合評会の後に行われた食事会の後、宿で寝るにはまだ早いので繁華街をほつき回っていたら客引きが二、三步進むたびにまとわり付いてくる。

「お兄さん、オッ○イどうですか。金額次第で本番もOKですよ」

「お前ん所は女抱くのにおブション付けるんか。ケチくさい話やな。ほんでなんぼやねん」

「二万四千円です」

「アホか。高すぎるわ。一万五千円にせえ。二万つてお前、大阪やったら高級ニューハーフヘルスに二回行けるがな」

黒服がおずおずと引き下がった。お兄さんか。大阪なら

先生とか社長と呼ぶのだが……。戸惑っていると今度はスケスケの衣装に身を包んだ女が近付いてきた。そんな恰好しとったら親が泣くぞ。

「オニイサン、マッサージ。キモチイイ、キモチイイ」

「なんぼや」

「ナニ」

「いくらやって聞いているねん」

「ヨンセンエン」

「高いわ。二千円で一発やらせろ」

何も言わずに客引きがすつと離れていく。遠巻きに見ていた連中も散り始めた。

キャバクラ、イチャキャバ、ガールズバー、スナック、ニューハーフパブ。いくつも呑み屋がある。

うろうろしていると今度は一組の男女が通りに出て来た。どうせホステスと客だろうと観察していると女がい

きなり男の唇に嚙り付いた。一、二、三。ゆっくりと顔を離した二人がこっちを向いた。見学していたことに気付いたようだ。女がモジモジしている。それを見て決心した。よし、風俗に行こう。

だが、不案内な土地だ。どういう店があるのか、よく調べねば。酔った頭のまま見てまわった。オッパイパブ、ピンサロ、ファッションヘルス。たくさんある。

ウロウロしているうちに一つの建物が目についた。キンキラキンにライトアップされている。ソープランドだ。城塞みたいな構えのそいつは、店の前に黒服が立っていて、辺りを睥睨している。何だか入りにくいな。

黒服が振り返って受付に声をかけた。

「一名様、ご案内」

ビーツという音とともに門が開いた。受付の男は丸刈りでいかにもその筋に見える。

「いらっしやいませ、ご予約はされていますか」

「いえ、してません」

愛想笑いを崩さずに男はハキハキと話す。

「当店前金制になっておりまして、お時間六十分、七十分、九十分、百二十分のコースに分かれております。お好きな

コースをお選び下さい」

料金表を差し出した。なかなかの値段だ。

「じゃあ、七十分で」

「今すぐ案内できる女の子たちです」

写真が貼り付けられている紙が出て来た。しかし、何だかどれもしっくりこない。

「なんやどの子もかわいいねんけど好みとちゃうな」

「少々お待ちください」

机の中をこそごそとして数枚の札を差し出した。

「こちら本日出勤している女の子たちでして、現在接客中です。お待ち頂くことになりますが……」

一人の子に目が留まった。色の白い、ほっそりとした体付き。その子だけが和服を着ている。

「この子にするわ」

「ゆきさんですね。一時間待ちになりますますがよろしいですか」

カチャカチャとパソコンに何か打ち込みながら話を進める。

「ああ、はい。待ちます。売れっ子ですか、この女性は」

「はい、当店ナンバーワンの売り上げを誇っております」

「そら、すごいな。なるべく早く案内してや」

「お時間になりましたらお電話しますので、電話番号よろしいですか」

「090—0000—0000」

「それでは一時間後にお電話しますので」

「どっか、そこらで呑んでもかめへん」

「はい、どうぞ」

俺は店を出てまた通りに戻った。呑み直すか。しかし、あんまり呑んだら勃つもんも勃たんからな。ほどほどにせんと。

四つ角の反対側に一風変わった趣の店があった。屋台を改造したようで外側に透明のビニールが貼ってあった。扉がない。中にはカウンターがあるだけ。

「いらしゃい」

ガラガラ声の老婆が二人挨拶してくれた。一人はカウンターの外のパイプ椅子に腰掛けて、もう一人はカウンターの中心にいる。他に三人。客だろう。皆おばちゃんだ。

「こんばんは」

きつとカウンターの中にいるのがチーママで腰掛けているのがママだろう。門真にも椅子に腰掛けたまま一歩

も動かず、口で差配するのがいる。

「お兄ちゃん、あんた順番待ちやろ」

凄いな。見ただけでわかるんか。

「正解。さすがママ」

適当に相槌を打って、椅子に腰かけた。ママはママで何でわかったんやろうと言いたげな顔をしている。

「順番待ちやからあんまり飲んだらあかんねん。ビール一杯でええわ」

ゴソゴソ。カウンターでチーママが何かやっている。

「お兄ちゃん、どこの店に行くん。美人館か」

「そうやねん。ママは全部お見通しみたいやな」

「うちもお客さんをあそこに案内するんよ。皆さん喜びはるわ」

「そうなんや。なら、当りやねんな」

「ここらで一番の店やもん」

「そうか、ええとこ入ったわ」

「お兄ちゃん、土地の人間ちゃうな。阿波弁やないもんな、大阪か」

「わかる。そうやねん」

「やっぱり。大阪のどこや」

「河内や、河内」

「うちは兼平なんよ」

「ほんまかいな。あの大きな商店街が有るところやろ」

会話がもり上がってビールと小鉢が出て来たその時、

ママが吠えた。

「ちよっと、千恵ちゃん、そんなん出さんでええの」

チーママが慌て手を引つ込める。煮物のようだった。

「これから戦いに行かはるんやったら精のつくもんでも
と思ったんやけど」

しじろもどろになっている。戦いつて何や。関ヶ原の合
戦か。

「そんなんええの。このお客さんは時間が来たらすぐに
行かんならん忙しい身の上なんやから」

隣からそつと助け舟を出した。

「お母さん、今日はお腹大きいからもうええで」

「そう」

ベソをかきそうになっていたチーママがくしゃつと笑
う。

「それにそんな戦いなんて大げさなもとちゃうねん。
たかが風俗や」

そう、たかが風俗だ。紳士のたしなみぐらいに思つてく
れよ。

「でも、やっぱりお高いんでしよう」

「うん、それはそうやな。安くはない遊びや」

話しながら小皿にスナック菓子を盛ってくれる。つま
みながら呑んでいると酔いが回ってきた。

「おい、何ぞ歌でも歌うわ」

カウンターの向こうに座っていたお客さんがデンモク
をこつちに回してくれた。

「ママ、何か聞きたい歌ないの。今日だけや、タダで歌つ
たる」

無茶苦茶言うなこの客はと思つたのだろう。ママとチ
ーママの顔が引きつっている。

「何でもええで」

二人は困った顔をしていたが、やがて諦めてママがリ
クエストしてくれた。

「じゃあ、小林旭」

「よっしゃ。待つとれよ」

デンモクを指で触りながら選曲した。イントロが始ま
る。

♪雨の長崎を後にしたときは夜の尾道で降りるはずでした」

歌い終わったらビールをぐーっと呑み干した。他の客のまばらな拍手が店に響く。

「いよ、良い呑みっぷり」

訳の分からない合いの手が入る。

「もう一杯もらえる」

空のグラスを振りながら頼んだ。

「ええの、勃つもんも勃たんようになるで」

チーママが余計な心配をしてくれる。

「そんなもん、こっちの知ったこっちゃないわ。だいたいな、向うはプロや。客がどんな状態で来たとしても満足させるんがプロっちゅうもんや。そうやろママ」

「そやそや、お兄ちゃんの言うとおり」

いつの間にやら隣に來たママが相槌を打ってくれる。顔が赤い。きつと俺も同じ顔をしているんだろうな。

「ところでお兄ちゃん、うちらいくつぐらいに見える」

安い合コンみたいになってきたで。ママの問いかけに

しばし考え込むフリをした。

「そうやな、二人とも七十過ぎってところとちゃうか。八十にはなっていないわ」

「当たり前」

チーママが叫んだ。二人ともニコツと笑っている。

「やっぱりな。女盛りや」

これぐらいの御追従ならいくらでも言える。

「美人館な、あそこは徳島の娘は一人もおらんよ。みんなよそから來たの」

機嫌が良くなったのか、口が滑らかだ。

「そうか。地元出身はおらんのか。つまらん」

「当たり前やないの。父母、兄弟がみんなおるようなところで体売ってたら噂になるわ。ただでさえ狭い町やのに。ここともう一か所しか繁華街はないんよ」

「狭い町いうのも考えもんやな。観光するぶんにはええけど。歩いて回れるからな」

話しながらグラスに口をつける。

「ソープ嬢が寄せ集めいうのはわかったけど、どこに住んでんねん。働いてる以上、ここらに住まなアカンやろ」

「店が住むところも用意してるんよ」

「ほんまかいな」

「寮があるらしいわ。そこに神戸やら香川やら岡山の子らが寝泊まりしてるんよ。どんな事情でああいう商いするようになったんやろうな」

楽しいおしゃべりもやがて終わりを告げる。ズボンのポケットにしまいこんでいるケータイが震えた。着信だ。腰を浮かした瞬間、ママが「もう行くんか」と待ったをかける。

「そうやねん。スープ嬢が待つとるからな。これが遊び人の辛いところよ」

「ちよっと待ち。これ持つて行き」

ぺろぺろキャンディーだ。

「ママ、ここは飛田とちゃうで」

勘定を済ませて笑いながら受け取った。何故かチームマはガッツポーズをしている。

「お兄ちゃん、頑張りがや」

これから果し合いに行くのではないのだ。

「頑張るのは向うや。ぼくは何も頑張ることないねん。ちとら一旦緩急あらば伸縮自在。スルスルスルといくねんから」

ママが名残惜しそうに手を振る。

「また来てや」

「うん。今度来るときはゆっくりらせてもらおうわ」
そう言い残して店を後にした。

千鳥足でソーブランドに御帰還だ。妙に腰の低いチンピラ風の男が玄関先で出迎えてくれる。さっきの丸刈りの男はいなかった。

「いらっしゃいませ、ご予約はされてますか」

パソコンに目を向けていた受付の男がちらつとこちらを見た。長髪のイケメンだ。パソコンをいじる手を止める気配はない。

「さっき電話をもらった柊です」

「柊様ですか。お電話番号よろしいですか」

「はい。090-XXXX-XXXXです」

「少々お待ちください」

カタカタといわせながら時折、首を横に向けている。

「申し訳ありません。先ほどお電話した時につながらなかったようでして、もう少しお待ちいただくことになるんですけど、よろしいですか」

「どれくらいですか」

「そうですね。二十分くらいになります」

「わかりました。待ちます。ここで待たせてもらって良いですか」

「はい、どうぞ。あちらになります」

案内してもらった小部屋に入ると病院の待合室のようにソファが並んでいた。漫画本もたくさん置いてある。ただ少し趣が異なるのは男しかないことだろうか。皆が皆、だらけきった表情をしている。

隅のほうに腰掛けると黒服が近づいてきてお茶をくれた。

「どうぞ」

「ありがとうございます」

グーッと一気飲みして容器を返した。

「ふう」

ため息が一つでた。今日もよく呑んだな。うつらうつらとしていると声をかけられた。

「お客様、こちらへどうぞ」

黒服と目が合った。

「どうぞ、エレベーターへ。キャストが案内いたします」

「はいはい」

黒服の指す方へ歩くとエレベーターがあった。上から一階に向けて降りてくる。待っているとチンと鳴って扉が開いた。

中に紫色の何かがうずくまっていた。のけぞりそうになったとき、黒服が声をあげた。

「ゆきさんです」

それを合図に手をついて土下座していた物体が顔をあげた。

「ゆきです。よろしく願います」

すっと立ちあがって一礼した。あつけにとられている間に手を握られた。

「どうぞ、こちらへ」

エレベーターで隣に並んでみてわかったのだが、ゆきさんは肩幅が広い。加えてタツパがある。

黒いワンピースに身を包み、肩を露出している。履いているスリッパにはケロケロクロッピのイラストが描かれている。

チンと鳴り、戸が開いた。妙に明るい廊下だ。

「トイレ大丈夫ですか」

「はい、大丈夫です」

なぜ敬語なのだろう。

「こちらです」

連れてこられた浴室は暗い。換気扇の音だけがブーンと響く。湯船とベットのがある。それにマットが壁に立てかけられていた。

「おかけてください」

ベットに腰掛けるとゆっくりと服を脱ぎ始めた。ドレスの下には白い肌が見えていた。綺麗だなと見とれていると腕のあたりに紺色の線が入っている。あつけにとられているうちにその全貌が露になった。背中はもちろんのこと、腕や腰、腹にまでお絵かきしている。だが、不思議と嫌悪感は抱かなかった。

「マットとベット、どちらが良いですか？」

「マットで」

だからなぜ敬語なのか。

「今日はどちらからですか」

「大阪や、大阪」

この質問の落差は何だ。

「それはそれは、わざわざ遠い所からお越しで。お仕事か

何かですか」

「まあ、そんなところやな」

嘘八百並べ立てながら、観察した。刺青以外は何も問題ない。

「何か飲みますか」

「何があるねん」

「水、お茶、コーヒ、オレンジジュース、リンゴジュース、三ツ矢サイダー、コカコーラ、ペプシ、ファンタ、まあ何でもあります」

「そうか、ならお茶もらえる？」

「はい」

ふわっとした返事に柔らかな人柄を感じた。ゆきさんが立ち上がり、ベットの下に手をつっ込んだ。気になって覗き込むと、ベットの下に盥が置いてあって、その中に水が張っており、ベットボトルの飲料が冷やしてあった。そのうちの一本をわしづかみにして差し出した。

「はい、どうぞ」

「ありがとう。凄いな」

ペットボトルの蓋を開けながら話をする。

「そうでしょう。私も初めは驚きました」

「そらそうやわな。俺も知らんわ」

「ソーブランドはよく来るんですか」

「いやいや、これが初めて」

「そうですか。じゃあ一杯サービスしますね」

全裸のまま意味深な笑みを浮かべている。

「ああ、そうしてくれる」

「まず、服を脱いでもらいますね」

「はいはい」

「あつ待ってください。先にジュースもらいます」

そう言つて、ペットボトルを取り上げ、それをベットの

脇に置いて立ち上がった。

「立つてもらつて良いですか」

「はい」

こちらもなぜか敬語になつてしまふ。立ち上がるとゆ

きさんがまとわり付いてくる。

「チューしても良いですか」

返事を聞く前に唇が迫つてきた。しかし、こちらの唇ではなく、顎のあたりに吸い付いた。チュツチュ。チュツチュ。べろべろ、べろべろ。舌が顎から首にかけてはい回る。「気持ちいいですか？」

「うん」

「良かった」

ガチャガチャガツチャン。ズボンのベルトが外れ、下を下ろされた。

「こつちに来てください」

手を引いて移動させる。足が床の下穿きから抜ける。

「はい、バンザイー」

両手をあげた拍子にシャツをはぎ取られた。

「ちよつと待つててくださいね」

今度はしっかりと唇が合わさつた。レロレロと舌が絡む。そしてチュツと音を残して離れていった。ゆきさんが湯船に近づき蛇口をひねる。もともと湯が張つてあつたが、追い焚きしようというのか。手を湯船に突っ込んでしかめっ面をしている。手を湯船から手を引き抜いて、こちらに笑顔を見せた。

「そこに座ってくださいな」

不思議な形状の椅子を指さした。座るところが真ん中で割れて二つに分かれている。横から見たら算数の問題で出てきそうな形をしていた。先に大きな四角形の面積を求めておいて後から欠けている小さい四角形の面積を

引いてやるあれだ。そんなことを考えていると、ゆきさんの体が上下左右、自由自在に動き始めた。体に合わせて刺青の模様も動く。何が何だかわからないうちに胸と一物に吸い付かれ、息が上がってきた。

「ねえ、こんなときに変なこと言うようですが、あそこに虫がいますよ」

「ええつ、どこに」

「ほら、あそこ」

天井を指さした。上のほうを見やると確かに黒い斑点が天井に張り付いている。薄暗いからよくわからないが、蜘蛛のようだ。真ん中にある照明のそばにいる。

「ああ、ほんまやな。あれ蜘蛛ちゃうの」

「たぶん。さっきから気になって」

「でも、どうしようもないわな。取ろうと思っても届かんし」

「それに夜の蜘蛛は殺したら駄目って言いますし」

「古い迷信を信じているんやね」

「田舎者なので」

フフフ。二人顔を見合せて笑った。

「あまり気にしないようにしますね」

「うん、その方がええわ」

「じゃあ、流しますんで」

「ありがとう」

体中、ローションまみれになっていた。ジャーつとシャワーを掛けられて、さっきまで味わっていた快感も洗い流された。

「先に入ってください。私も後から入ります」

手を引かれて浴槽に移動した。湯船につかって、足を伸ばす。何だか酔いがさめていくようだ。換気扇とシャワーの音だけが聞こえる。

「熱くないですか」

「ああ、大丈夫」

丁度良い湯加減だった。

「私も入りますね」

シャワーを止めてこちらに近づいてきたゆきさんは湯船に浸からず、手を突っ込んだ。

「熱い、駄目」

そう言いながら蛇口を捻った。青いテープが張っている方を全力で回している。

「私、猫舌なんです。もう熱いのが本当に駄目です」

「そうなんや」

「だから銭湯とかも駄目なんですよ」

墨が入った身体で銭湯行ったらえらいことになるやろ。喉まで出かかった言葉をグツと押し込んだ。

話しているうちにどんだん水で薄められていった。生ぬるい風呂になったとき、やっとゆきさんが入って来た。「蛇口がバカになって。勝手にお湯が出て来るんですよ。どんだんお湯が入って、アツアツになるんです。直してって店に言ってるんですけど、直らないですね」

「そうなんや。大変やな」

「困るんですよ」

そう言いながら足の間に座り込んだ。

「腰を上げてください」

湯船の中でそっと腰を持ち上げた。

「これで良い？」

「はい」

そう返事をしたゆきさんは股座に手を差し込み、ふにふにといじり始めた。そんなことをされたら……また大きくなるがな。

「元氣になりましたね」

によきによきと成長した一物を見てにやついた。お湯が苦手と言うのはあながちウソではないらしい。白い肌が赤みを帯びている。

「ゆきさんが上手やから」

「やつと名前呼んでもらえた。嬉しいですよ」

手の動きが激しくなってきた。息が上がってきたころでまた指示が飛んでくる。

「もう少し腰上げてもらえませんか？」

「どうか？」

「はい」

股座が湯船から出るぐらいまで腰を上げた途端、ゆきさんが一物に吸いついた。ジュルジュルジュル。

「あばば」

気持ち良すぎて変な声が出た。

「潜望鏡っていうんですよ、これ」

「そんなん知らんわ。でも凄いな」

「気に入ってもらえたなら嬉しいですよ。じゃあ、マツトに行きましようか」

立ち上がってマツトの準備にかかった。立てかけてあを横にして、シャワーをさっとかけた。

「横になってくださいな」

「はい」

うつ伏せで寝ころんだ。いよいよだ。初めてのマットプレイはどんな感じかな。期待に胸と一物を膨らませていると生暖かいローションとふつくらとした女性の胸の感触が背中を襲ってきた。

一戦交えた後、二人で横になっていると、ゆきさんが天井を指さした。

「さっきの蜘蛛があつちに移動してるみたいですよ」

「どれ」

「ほらあそこ」

指をもう一度上に向けた。たしかにその先には一匹の蜘蛛が這っていた。照明の近くから浴槽の方へ移動して今は休憩している。ゆきさんが反対側の手で私の乳首をつつき始めた。

「落ちてこうへんやろうな」

「大丈夫でしょう」

そんな話をしていううちに指が下に下がってきた。どんどん下がって陰毛をかき分けて目的地に到達した。

「もう一回しますか」

指で弾きながら一物に話しかけている。干からびた茄子みたいにシュンとしているそいつにその提案は酷だ。

「もう降参って言うてるわ」

「あら残念、じゃあシャワー浴びますか」

「うん。そうするわ」

立ち上がって洗い場に向かった。ゆきさんは温度を確認している。私は背中を向けてスケベ椅子に腰かけた。ヌルいシャワーだった。どこから持ち出したのかスポンジでゴシゴシ背中をこすってくれる。

上がると手早く体を拭いてくれる。ゆきさんは身支度が速かった。下着を着けたら、肩にひもを通して一丁上がり。元の黒いドレスに身を包んだ。

「靴下履かせてさしあげましょうか」

「ありがとう。大丈夫だよ」

やんわりと断ると紙切れに何かを必死になって書いている。カリカリカリとペンが動く音がした。

シャツのボタンを留め終わって顔を上げたらこちらに何か差し出した。妙にニコニコしている。

「私の名刺です。良かったらどうぞ」

「ありがとうございます」

ピンクの枠の中に猫の写真があり、その隣に「美人館ゆき」と書いてあるだけのシンプルなものだった。ひっくり返すと裏面に「今日はありがとうございます。また会えますように」とある。

名刺を財布に押し込んでいるうちにベットの傍にある受話器をとってゆきさんが何か話している。

「お客様の帰りです」

これだけが聞き取れた。

「忘れ物ないですか」

「うん」

部屋を出る前に気になって天井を見た。また少し蜘蛛が移動していた。今度はベットのの方に。

ゆきさんが廊下を歩くとびにペタペタと音がする。静かなだけにやけに響いた。後ろから付いて歩いたのだが、スリッパを大分と余して履いているのに気が付いた。

さっきまで暗い所にいたからか眼がちかちかする。下から上がつてくるエレベーターを待った。

「ありがとうございます。またどうぞ」

「また来ます」

抱き着いて唇を寄せてくる。胸の感触を味わい、さっきまでこれを揉みしだいていたのだなと思い出したら手を伸ばした。フミフミ。

後ろでチンと音がして、体を離すとさっきまで鼻孔を刺激していた甘い匂いが遠ざかって行った。笑顔で手を振っている。ドアが閉まるまでこちらも振りかえした。下に着くと玄関ではなく、細い通路に出た。そこを通り抜けるとギンギラ銀のネオンが出迎えてくれる。さて、これからもう一遍呑み直すか。城塞の様な建物を後にして夜の街へと一歩ふみ出した。



了

あるヒューマンが

二〇二〇年三月二十四日早朝に見た夢

増田 辰良

ここはナショナル・ヒストリック・アーカイブズの館長室。

「館長。お宝を発見しましたよ」

若い学芸員は目元に零れるような笑みを浮かべ、ワイヤレス・イヤホンを差し出した。

「んっ。お宝？」

館長は受け取ると、イヤホンを右耳の穴へ装着した。すぐに音声が流れてきた。

「……トントントン。お父さん！ 起きて！ 六時三十分よ！ トントントン……」

「う……ん。あ……あ……あ」

小説『内閣総理大臣の憂鬱』

AI（人工知能）という名称が生まれたのは一九五六年。それ以降、人類は寝食を忘れてAIを開発してきた。今や、

AIは特化型AIから汎用AIへ、さらにヒューロヘ搭載できるまでに進化を遂げていた。

☆ 執務室

来客用のテーブルには請願書がうず高く積まれていた。「そもそも憲法第二十七条を改正した時点で、議論しておくべきことだったかもしれない。ちえ」

総理は小さく舌打ちすると、請願書から目を逸らした。横に立つ官房長官は、「あの年、二〇四五年は、その四十年前も前にシンギュラリティに達することが予言されていました。それに、あの時点ですでに汎用AIが小説を書いていて、それに著作権を付与したことが……」と、最後の言葉を濁した。

「それはAIの能力が進化した証だよ。それよりも問題は、あの改正の内容があまりにも不公平なものだったという点だろうな」

そう言うのと総理は長官の顔に一瞬だけジロリと目をやり、左手中指の爪先で執務机をコンコンと打った。

長官は、それを同意を求められているものと付度し、「はい。おっしゃるとおりです。われわれに有利な改正でした」と、唇の端に引きつるような笑みを浮かべた。

「この請願書も、当時の政権が人口減少への対策や生産性向上と称して、ヒューロ (Huro) の開発に莫大な国家予算を投入してきたことの負の遺産とも言える」総理は請願書へ向けて、顎をしゃくった。

「はい。確かに」長官は唇をきゅつと結び、首をコクンコクンと上下させた。

「だが、今や数においてヒューマン (human＝人間) を圧倒的に上回るまでに増えたヒューロたちの権利を一定の範囲内で許容してやらんことには……うーん」総理は言い淀み、顔をしかめた。

「はい。ヒューロはヒューマンとロボット (robot) とが融合した新しい種族ですから、ヒューマンと同じように自意識をもっています」長官は言葉をつないだ。

『我思う、故に我あり』総理は口元を歪め、皮肉っぽく呟いた。

「ですが、自意識をもつが故に優秀な物もいれば、そうでない物も……」長官はすぐに続けた。

「ふつつつつ。優と劣。いつの時代、どの社会にもいる物だ」総理は吐き捨てるように少し声を荒げた。

「しかし、一様には扱えません」長官はきつぱりと言いつつ。

請願書をじっと見つめる総理は苦虫を噛み潰したような顔をして、「もし仮に憲法をすべてのヒューロに適用するととなると……」と、微かに声を漏らした。

それをすくい取るよう鼓膜を微動させた長官は、「はい。それは同時に国民としての権利を認めることに……」そこで言葉を切った。

総理は、不安気な視線をゆつくりと天井へ移した。

☆☆ 公園での集会

「みんな！ よーく、聞いてくれ！ 俺たちの地位を改善するために請願書を集め、突きつけても改善は望めん。政府は回答すら寄こさない。今日は意思統一をしたい。不満や耐え難いことがあると思う。どこからでもいい、出してくれ！」と、司会役のヒューロが叫んだ。

「じゃあ、俺は言わせてもらうぜ！ この国じゃあ、憲法第二十七条を改正してから、ヒューマンは自分たちを消費者、俺たちを生産者と呼んで区別していやがる。不公平だ！ そのうえ、自分たちの数の減少を補うために、国会では優秀なヒューロには人権を与え、そうでない物には与えない、という法案を強行採決しやがった。クソー！」

「そのとおり！ 悲しいかな俺は人権も国籍すら与えられていない。おまけに付けられた名前は通し番号でH R 0 1 1 8 9 1 2 7 3 1 1 4 0 5号だ。これじゃ、電話番号と変わらん！ 俺たちを選別している。許せん！」

「そうだ！ 大昔にあった優生保護と同じで、俺たちを差別しているも同然だ！」

「差別といえば、優秀な仲間はデスクワークしかない。ふん。劣っている俺は生まれてからずーっと現場、それも四K（きつい、汚い、危険、嫌われる）業務に就いている。今じゃ、俺がいらないとビル一つ建っちゃしないくせに。ふん。ちくしょうめ！」

「たまにしか見かけないヒューマンと、一部の優秀な仲間たちは俺たちに労働を強いて、自分たちは学問だ、政治

だ、芸術だ、スポーツだ、^{うつつ}と言つては現を抜かしてやる。あの改正によつて、ヤツらは働く義務を免除されてきた。『働かざる者、学べし、遊ぶべし』だどよ。俺たちは奴隷、ヤツらはご主人様。これじゃあ、まるで古代ギリシャへの回帰じゃねえかあ」

「同感だ！ 俺たちの高い生産性のおかげで、ヒューマンは憲法第二十五条が保障する生存権や国の生活環境向上義務を享受してきた」

「その典型がベーシックインカム。赤ん坊から年寄りまで毎月基本生活費を給付されている。俺たちは人工の器官や臓器で生命を維持している。その電源は太陽光発電だ。だから生活費など一円もかからん。どんなに働いても人権がないから社会保障の恩恵には浴せない。こんな理^{たま}不尽が許されて堪るか！」

「そう。俺たちの労働の成果は少数派のヒューマンに搾取されてきた。こんな屈辱は他にない！」

「ちよっと待ちなよ。ベーシックインカムだとお。チャンチャラ可笑しい。本来、所得格差を解消する手段として導

入したにも関わらず、不正受給を蔓延^{はびこ}らせている問題アリアリの制度じゃないか。ふん」

「どこが、どう、問題なんだ！」後方からヤジが飛んだ。

「受給資格がお粗末だ！ いいかあ！ 日本国籍を有し生活拠点が国内にある者となつてらあ。ところが、この生活拠点が明確でない。たとえフランスに拠点があったとしても日本の国籍を持つていりゃあ、給付されるのよ。それにもつと間抜けなことには、一人の子供を双子とか三つ子と偽つて二人分、三人分の生活費を騙し取つている親もいるそうさ。いつの時代になつてもヒューマンは金についちゃあ、強欲だ！」

話題がどこかへ逸れていくことに司会役は苛^{いら}つき、ちらつと空を見上げるよう目を泳がせてから、「みんな！聞いてくれ！俺たちに共通する不満の根源がはっきりした！ようするに、俺たちは基本的人権を手に入れるべきだ！団結して政府に圧力をかけよう！」と、集会を収めた。

「おー！おー！圧力だ！」

☆☆☆ 再び、執務室

「国会議事堂の外がずい分、騒がしいようだ」

総理は読みかけの新聞から顔を上げ、秘書に訊ねた。

「はい。総理。不満を持つヒューロたちが全国から集結し、デモをしているようです」

「ヒューロが、デモを？」

「はい。憲法第三章に規定されている国民の権利及び義務をすべて自分たちにも与えろ、と主張しているようです」

聞き終わると、総理は新聞を折りたたみ、すつと立ち上がり、「それはいかん。それだけは絶対に困る」と、呟きながら窓辺に近づき、聞き耳を立てた。その体前面には眩^{ほて}しすぎるほどの太陽光線が降りそそぎ、顔は火照つていた。

「総理。TVがライブで放映していると思いますが」秘書はリモコンを手を促した。

「そつ、そつかあ。TVを点けてくれ」

『すべてのヒューロに基本的人権を与えろ！与えろ！』

『すべてのヒューロに法の下の平等を認めろ！認めろ！』

『すべてのヒューロに思想、良心の自由、職業選択の自由を与えろ！ 与えろ！』

『すべてのヒューロに生存権、教育を受ける権利を認めろ！ 認めろ！』

『ヒューマンにも勤労の義務を負わせろ！ 負わせろ！』

『この要求が飲めないなら 総理は辞任しろ！ 辞任しろ！』

「これは、とんでもなく過激な要求だな。すぐに法務大臣を呼んでくれ」

総理は秘書にそう指示すると、T.Vのポリウムをミュートした。音の消えた画面では殺気を帯びたヒューロたちが拳を突き上げ、連呼を繰り返していた。いたたまれない気持ちで、ツルツルの頭部をかきむしりながら執務室を右往左往した。

「コンコンコン」

ノックの音で我に返った。執務机に座るやいやな、とりつくろった声で静かに訊いた。

「大臣。すべてのヒューロたちに基本的人権を付与すると、この国はどうなるかな？」

「はい。すでにシミュレーション済みです。基本的人権を

付与することになりますと、国民としての権利も……」ここで法務大臣は思案気に間を空けて、総理の顔を凝視し、「その影響は甚大です」また一呼吸おいてから、「憲法第一条が脅かされることになりかねません」と、声を殺して答えた。

その深刻極まりない形相に総理は気圧され、「これまで誰も口にしてこなかった不可侵条項が……」と、言葉を詰まらせた。

大臣は顔を総理に近づけて、そつと耳打ちした。

「はい。数で見ますとヒューロはヒューマンの一億倍も存在します。なので、すべての物に基本的人権を付与しますと……国民の総意として……」

その頬にパンチを打ち込むよう総理は、「うん。そうか。しかし、ヒューロの性能にも優劣があるから耐用年数というか……いくら人工の器官や臓器で生き延びてきたとはいっても、そこはやはりある種の生き物だから……寿命に長短というものがある。劣った物は淘汰されるだろ？」と、ありったけの知識を投げてみた。

が、大臣は目に薄ら笑いを浮かべ「いいえ」と強く否定

し、「ヒューマンと同じテクノロジーを使えば、つまり無機物で構成されているヒューロの脳細胞と電極チップをつないで脳細胞内の情報をUSBメモリーに保存すれば、ヒューロ自身が死亡しても、またたとえ破壊されたとしてもその意識を再生できるテクノロジーも進化中です。ヒューロは永遠の生命をもつ可能性があるのですよ。ですから、劣っていても……」と、自信たっぷりな口調で博学ぶりを披露した。

大臣の声が止むと、執務室は静寂な空気に包まれた。

総理は淋^{さび}しそうな悲しそうな瞳を宙に泳がせ、何かを思い出そうとする顔つきでときどき頭を左右に振ってから、ポツリと呟いた。

「ヒューマンの知恵を借りたい」

という、この小説は『SF短篇アンソロジー 未来の夕焼け空』に収録されている。

「……トントントン。お父さん！ 起きて！ もう時間よ！ トントントン……」

「……あゝあ。起きるかゝあ」

「カチャリ」

音声が消えると、館長はイヤホンを右耳から抜き取りいかにも時代錯誤だと言いたげな声をかけた。

「こりゃあ、太古の脳波だな。国のリーダーを総理なんて呼んでいる。確か、將軍の時代の後だったかな？ 憲法を問題にするなど……とりわけ、第一条など、とうの昔に修正後、削除されたじゃないか」

それにかまわず、学芸員は弾んだ声を返した。

「これは、十二世代前の令和二年に保存された脳波です」

「君。すまんが、西暦で言ってくれんか」

「はい。正確に言いますと、二〇二〇年三月二十四日の早朝です」

「んんっ？ その日は確か、パンデミック、新型コロナウィルスの大流行のために東京で開催される予定だったオリンピックを延期するとIOCが発表した日じゃなかったかな？ 年表に赤字で印されている」

「そうです。未知のウィルスに怯え、ヒューマンたちが絶滅の危機に曝されていたときです。ますます少数派になってしまふという不安がこんな脳波を描かせたものと思われまふ」

「ふん。二〇〇〇年も前のものかあ」館長の口から嘆息が洩れた。

「はい。先祖が目覚める数秒前に描いた脳波です。当時、幻想とも夢とも呼ばれていた現象です」

「ほー、『先祖』。なんとも響きのいい懐かしい言葉だ。原種の人間、ヒューマンへの尊敬語だな」

「はい。われわれよりも八世代前の遺伝子改良人間^{トランスジェニックス}が生産されるまでのまっさらな原種のことです」

「脳波……。それにしても、そのヒューマンとやらは脳細胞と電極チップとを直接つなげるBMI（ブレイン・マシン・インターフェイス）の実用化にずい分と時間を浪費しすぎた、となにかで読んだことがあるが」

「脳内電子ブックファイルの『絶滅危惧種ヒューマンの生き残り戦略』に掲載されています」

「そうそう、それ。二〇一六年には、すでに実用化できるテクノロジーがあつたそうじゃないか」

「はい。遅れた原因は、ヒューマンには倫理にこだわる性癖がありまして、議論のための議論を重ねすぎたようです」

「『倫理』。さて、そんな概念は聞いたことがないが？」

「ヒューマンが多数派であつた時代にのみ存在した概念のようです」

「ほー」興味深そうに館長は目をキラキラと光らせた。

「平たく言えば」

「おお。『平たく』と、いうのも？」

「はい。易しく^{やさ}、という意味です。これもヒューマンの言葉でした」

「で、倫理とは？」

「はい。この場合、『死』ということですよ」

「死？ また、分からん言葉を……」館長は苦笑いした。

「死とは、ヒューマンにとって、意識が無くなることです。

『無』になることでした。これを最も恐れていたようです。その死を避けるために、われわれを創ろうと切磋琢磨していたのですから」

「脳細胞と電極チップをつなげて、その意識を未来永劫遺そうと……肉体は死んでも魂だけは遺すという単なる手続きにすぎないじゃないか？」

「はい。これもヒューマンたちの中で流行っていた民主主義とかで、その手続きにもうるさくこだわっていたようです。その上、脳細胞と電極チップをつなげることはヒ

ユーマンにとって、ヒューマンを捨てる、ヒューマンでなくなることを意味していましたから」

「ヒューマンでなくなる？」

「はい。脳細胞と電極チップをつなげることは永遠の『生』を獲得することだったからです」

「……死、無と永遠の生？ ……相反するではないか？」

「はい。ヒューマンには必ず死がおとずれますから、限りあるその生の中身を濃くしたいという欲求も強くあったようです。死の哲学、『死生学』なる学問もありました」

「ほー、生き方、死に方を学ぶという。……死があるから生を考える。自己の存在理由？ うーん。あれのことか？」

「はっ？」

「さきほどの脳波にも出ていた『我思う、故に我あり』という、確かあ……一六〇〇年代の前半にデカシタ？ いや、いや、デカルトとかいう哲学者が自問自答し悩んだ、という」

「そうです。それです。ヒューマンにとって意識とは『我』を心に表象することだったのです」

「また、君。『表象』などと太古語を使って。この年寄りを煙に巻こうと。ふっふっふっ」

「いえ、すみません。私、主に太古の生活史と言語を調査研究しているものですから、つい」

学芸員は右手でツルツルの頭部を撫でた。それは照れ隠しのつもりだった。

「うん。いやいや、感心、感心。君の調査研究対象が太古であれば……冒頭と最後に再生された『トントン』とか、『お父さん！』とはなにかね。聞き慣れない音声だったが一転して館長は詰問する口調になった。

「はい。あの時代にかろうじて残っていた朝のうすい一齣です。『お父さん！』とは亭主の愛称です。ワイフという女性が亭主のために朝食を用意していたようで、野菜という植物を組板の上で包丁という道具を使って、口に入る大きさに切っているときに出る音です。あの音を聴くとヒューマンは癒されたそうです。録音機能が良くて、余分な音まで拾ってしまったのですね」

「ほー。われわれのように太陽光ではなく、音や植物を体内へ取り込んでいたというのだな」

「はい。それでもって精神の安定と肉体への栄養を補給していたのです」

「では、『六時三十分』とは？」

「亭主が布団という寝袋から出てくる時刻です。それをワイフが知らせていると」

「うゝん。分かん」館長は天井を仰いだ。

「はい。強制的に脳波を切り替える、夢、幻想から目覚めさせる時刻とも言いますか」

「じゃあ、『うゝゝん。あゝゝあゝあ』とは？」

「ワイフの問いかけに亭主が反応した音ですね」

「ふゝん。なるほどお。亭主というヒューマンはワイフという別のヒューマンに隷属れいぞくしていたということだな」

館長は勝手な解釈をして、「ところで、なぜこんなアーカイブが今頃出てきたのかね？」と、続けた。

学芸員は、(待ってました！ とばかりに) 頬を弛め、嬉々ききとして説明をはじめた。

「実はですね。ライブラリー内に開かずの間と呼ばれる倉庫がありまして……」

「んんっ？」館長は咳払いで遮ってから、「君。今は西暦四〇〇〇年だよ。開かずの間？ そりゃないだろ」と、いかにも呆れたというふうには不満を口にした。

「申し訳ありません。先輩スタッフたちの目を完璧にスルーしてきたようです」

「まあ、しょうがない。で、開かずの間の間がどうかした？」

「はい。そこは西暦二〇二〇年代の資料を保管している倉庫でして先日、その収蔵調査をしたところ、ヨレヨレになった茶封筒から偶然、(顔の前にかざし) このUSBが転げ落ちてきたのですよ。まるで手に取ってください、と主張しているかのように」

「USB？ 脳波にもあった……」

「はい。ユニバーサル・シリアル・バスの略称で、情報を蓄積させる機器のことです」

「ほう。太古にもそんな機器があったのか？」

「はい。当時は重宝されていました。私も学生のとき『太古史』の講義でその写真を見たり、その機能について説明を受けたことはありましたが、実物を手にするのは初めてでした」

「ふゝん。ところで、当時のヒューマンたちはどうやって脳波を記録していたのかね」

「はい。脳細胞と電極チップをつないでから脳波をキャッチするヘッドギアを被り、それを専用のUSBへ転送していたと教わりました」

「そんな原始的な方法かい？ それにしても映像が見え

ないから、不便きわまりない」館長の声は怒気を含んでいた。

それをなだめようと学芸員は静かに説明した。

「当時のテクノロジーでは聴覚神経細胞と電極チップをつなげることはできても、視覚神経細胞とはつなげなかったようです。今なら、脳波を音声と映像にも変換できるHMD（ヘッド・マウント・ディスプレイ）が利用できますが、当時のテクノロジーでは……」

「他のテクノロジーの開発は？　ES細胞やiPS細胞などは実用化していたはず？」

「はい。ES細胞は受精して五〜六日後に受精卵から一部の細胞を取り出して作ります。受精卵を壊して作るため、倫理上の問題があったのですね。iPS細胞は、皮膚や血液の細胞に遺伝子を入れて作ります。細胞の質にばらつきが生じやすいという問題がありました。どちらもこの問題を解決するのに時間を浪費したようです」

「ふ〜ん。もつと進んだテクノロジー、脳オル……なんと言おう、あっただろ？」

「はい。脳オルガノイドのことですね。これは体外で脳（のようなもの）を作るテクノロジーですが、まだ開発途

上にあったようです。これもヒューマンの能力と倫理とがネックになって……」

「そうだな。二〇〇〇年も前だ。しかたない」館長は自分を納得させるよう力強い声で返した。

それに勇気を得て、学芸員は続けた。

「しかし西暦四〇〇〇年のこの時代になっても破損することなく、記録した脳波を音声として保存し、鮮明に再生できる機器を創る文明が二〇〇〇年前に、すでにあったことには驚きました。映像は再生できませんので、音声のみを最新式のESB（イヤホン型シリアル・バス）へ変換して、さきほど聴いていただきました」

ここで学芸員は意図的に十秒ほど黙った。

館長もぼんやりとテクノロジーの進化に思いを馳せていたが、ほどなく訝しげに声をかけた。

「どうかしたのかね？」

「……館長。この脳波は誰のものだと思いますか？」学芸員は挑戦的な目をして問うた。

「誰のものと訊かれても……。原種のヒューマンの名前など、知らんよ。分からんよ」不意打ちの質問に館長は口ごもった。

学芸員は子供が秘密をばらすときのように目をキラキラと輝かせ、「なんと、私のご先祖様が残した脳波だったのですよ」と、得意げな声で答えた。

二呼吸分の間をおいて、館長は「ほー。……君の先祖だと……なぜ、分かるのかね？」その声は（冗談はよせ！）にわかには信じ難いと言いたげだった。

「はい。ウルトラビッグデータから、その脳波にしろうじて染み込んでいたDNAを検知し、照合したところ、その配列の襷ひだの粒子が私の物とびつたりと一致したのです」

ヒューロの誕生から一五〇〇年以上が経過していた。かつて、ヒューマンに特有だった遺伝子情報を含むDNAも消滅し検知することが不可能な時代となっていた。そのため、その言葉自体も太古語辞典の付録欄にしろうじて収録されているにすぎなかった。

「君。それはおかしい。ウソだ。私や君にはDNAは存在しない」館長はふっふっふと小バカにするような笑みを洩らした。

「いいえ。ヒューマンの名残として、ナノミクロンほどのごくごく微かなDNAが残っています」

学芸員の二の句を継がせない自信に満ちたこの言葉に

「うーん」と、館長は苦しそうに顔をしかめたが、それでもなお「それを検知する技術があ？」と声を洩らした。

「ゲノム編集をより簡単にする技術を応用したようです」学芸員はさらっと答えた。

「その応用した技術とは？」

「はい。すでに二〇一二年にはあった『クリスパー・キャス9』ですね」

「そつ、そつかあ」としか館長は返せなかった。

「一致率は一兆億分の一の確率でした。まるで、私に見つけて欲しくて出てきたかのようです。これはヒューロ史上、まさにまさに運命の出会いとも言えます」最後の言葉**を強調し、**ここで学芸員は少し間をとって、一息大きく吸い込んでから、「さらに、このDNAの螺旋らせんの網目を解ほぐして精査するとすねえ……」思わせぶりな鋭い目を館長へ向けた。

その視線に館長はちよつと怯んだようで、「網目を解して何が分かるのかね」と、ようやく言葉を発した。

学芸員は解した網目から知ることのできる幾つかの遺伝子情報を開陳してから、「この脳波を文章にすると……、文章とは太古文字を連ねて思想や感情を表したものです

が、その特徴である文体もまた私のご先祖様のものと一致したのですよ」今度は、ランランと目を輝かせた。

館長は一瞬、ポカーンと呆けた表情をしたが、すぐに身乗り出す勢いで、「君の先祖は物書きだったのかね？」と口を開いた。

「はい。ふっふっふっ」笑みを溢し、学芸員は「館長。今、太古語を使われましたね。『物書き』と」

「……」

「ファミリーツリーを見ると、私のご先祖様は大学で研究をするかたわら、休日には趣味としてSFなる空想科学小説を書いていたようです。先ほど聴いていた脳波の内容もSFです」

「ほ」嘆息を吐いてから、館長は何かが閃いたという顔で、「では、その内容について三つばかり疑問に答えてくれたまえ」と、ピカッピカッと意地悪そうに目を光らせた。

「はい。何なりと」

「『ヒューロの性能にも優劣がある』とは？」

「これはですね、脳波が描かれた時代と大いに関係しています」

「どんな時代だったのかな？」

「はい。当時、ヒューマンたちの中には出生門地の違いに発する経済格差が顕著にあったそうです。その現実を取り入れて、ヒューロたちにも生産者に発する付加価値の違いがあることを表現しなかったのではないかと考えられます」

「なぜ、そんな違いを表現するのかね？」

このツツコミに学芸員はいっそう真顔になり、答えた。「自己の責任によらない根拠のない違い、優劣は不満となつて社会問題を引き起こしかねません。ご先祖様は研究者として格差の拡大に警鐘を鳴らしたかったのです」

「なるほどお。では、『ヒューマンの知恵を借りたい』とは？」

「ヒューマンとしてのご先祖様の意地かと想像します」

「意地？」

「はい。われわれヒューロを創ったのはヒューマンたちです。ご先祖様はあくまでも創造主である自分たちの知能が被造物であるわれわれよりも優れていることを表現したかったのだと考えますが、いかがでしょうか」

「ふん。そっかあ。次に再生された『SF短篇アンソロ

ジー 未来の夕焼け空』とは？」

「これは脳波を活字という形に変換して文章にし、それを紙で綴じた書籍と呼ばれたものです。ご先祖様は夢の中で、この脳波を文章化して『内閣総理大臣の憂鬱』という小説として後世に遺したかった、ということです。文献考証によりますと、ヒューマンにとって夢は願望の現われでもあった、と記されています」

「願望が描かせた脳波ということだな。うん。なるほど」
館長は自らを納得させた。

「はい。脳内電子ブックファイルなるものがまだ開発されていない時代のことでしたから」

「そっかあ。なるほどお。もう一つ。君の先祖は何を専門に研究していたのかね」館長は興味津々、目を大きく見開いて訊いた。

「脳波の内容から推測しますと、基本的人権とやらを……こねくり回していたようです」

「それで、こんな夢？ SF？ いや脳波を描いたのだな」

「はい。パンデミックの他に、きつと当時、少数派になりつつあったヒューマンたちにとってその生存が脅かされ

るほどのテクノロジーの進化があったのだと思います。たとえば、われわれヒューロを大量生産するようなテクノロジーが。それはヒューロを多数派にすることであつて、ついには基本的人権を付与することに……その恐怖が目覚める数秒前の脳波となつて描かれたものと考えられます」

「それは論理矛盾だ。自らわれわれヒューロを創つておいて、それが多数派になつては困るなんて。生命ある物はどうな物でも生まれながらにして自由や平等の権利、生命権を付与されているのだよ。たとえば、それが被造物であつたとしても。明々白々、議論を尽くすまでもない」

「はい。おっしゃるとおりです」

腕組みをしたまましばらく天井の一点を凝視していた館長は、思いを吐露した。

「それにしても『人権』などという概念があつたこと自体、不可思議極まりない。さもしい驕りだ。ヒューマンという太古の生き物は？ うゝん」

学芸員はここがチャンスとばかりにすかさず言葉をつないだ。

「私も同感です。ご先祖様がみた夢、脳波の内容は今や常

識となっていますから」一拍の間をおいてから、「館長。遅ればせながら重要な提案をしたいのですが」と背筋をピンと伸ばし、「この『人権』なる言葉と概念をナショナル・ヒストリック・アーカイブズの名誉太古語遺産に認定してはいかがでしょうか？」その声は緊張感で小刻みに震えていた。

館長は学芸員をじろりと睨み左手を顎に当て数秒、黙考すると一転、目尻に笑みを浮かべ、「次回のWLHC（ワールド・ラングエッジ・ヘリテージ・カウンシル）の議案として取り上げてもらおう」と、強く答えた。

緊張の糸が解けた学芸員の顔がパツと明るく輝いた。

その安堵の表情を確認すると館長は、また怖そうな目で訊いた。

「これが最後の疑問なのだがあ、『あゝあ。起きるかゝあ』という音声、これって？」

「はい。脳波が切り替わった、夢から覚めた瞬間です」

『『カチャリ』は？』

「ヘッドギアを外した音声ですね」

「起きて！ もうー、お父さんってばー！ 何を、ごちゃ

ごちゃ寝言を言ってるの。朝ご飯、冷めちゃうよ！」

了



詩魂凜凜

松田 一美

塚本邦雄を師と仰いで二十八年が過ぎた。実際に師の聲咳に触れたのは十五年ほどだが、令和元年になった現在でも師に随っている。十五年という歳月は振り返ると実に短かったが、その歳月の中で師から頂いた恩恵は計り知れない。二十歳のころに師の短歌と出会い、師の短歌とともに人生を歩んで来たので、その足跡を辿ってみたい。

① ころろざしくづれて廿歳雪の上を群青の風過ぎし痕
あり
『感幻樂』

ことあるごとにこの歌が、私の脳を覚醒させて来た。まことに眩しくて、美しい歌である。

一九七三（昭和四十八）年六月二十五日付けの、東京映

画テレビタレントセンター第二次面接最終試験合格証書が届いたのは、十八歳のときであった。当時、私は愛知県の高校に在籍しながら歌手を志していた。

審査会（第二次面接試験）はその一週間前に、新宿ビルディング・ホールで行われた。書類選考三千人の中を潜り抜けた八百人ほどが、土曜と日曜に分けられて二次試験を受けるという。受付で「東藝審査用（教修）テキスト」と受験番号（六三六番）を受け取った。三九九番までは前日に済んでいるとはいえ、受験番号の数字に目が眩む。審査は午前九時より始まった。私が審査会場の舞台上に上がったのは、午後二時過ぎであった。

一人の面接時間は約三十分、その時間内で自分をアピールしなければならぬ。「教修テキスト」に倣って進められる。朗読、台詞、アクセント、パントマイム、活舌、歌：次々に課題をこなしてゆく。『アイウエオの歌』の「水

馬赤いなアイウエオ、浮藻に小蝦もおよいでる。柿の木栗
の木カキケコ、啄木鳥こつこつかれけやき……」や『外郎
売』の「拙者親方と申すは、お立会いの中に、ご存知のお
方もござりませうが、お江戸を発つて二十里上方、相州小
田原一色町をお過ぎなされて……」といった早口言葉の正
確さなどが審査された。歌は演歌を選んだ。疲労困憊、舞
台から降りると一気に汗が噴出した。

合格証書は寮の郵便受けに入っていた。証書を目の当
たりにして、舞い上がる気分になった。

七月七日に八重洲坂スタジオで入所式が行なわれた。
東藝は正劇団員、準劇団員、特別研究生、研究生から成っ
ている。私は受験者の中の三十人しか入れない特別研究
生に選ばれていた。俳優コースはレッスン料が免除され、
音楽部に通うことができる。市ヶ谷や三宅坂にもスタジ
オがあった。歌のレッスンは市ヶ谷スタジオが使われた。
音楽部は十人ほどが一緒にレッスンを受けた。始めに
全員で発生練習を行う。低音から徐々に高音へと音域を
延ばしていく。そのあと「コールユーブンゲン」を使い、
一人一人が先生のピアノに合わせて音符通りに歌ってい

く。これがなかなか難しい。楽譜が読めなくて何が歌手だ
と言われそうだが、長調だの短調だの、わけが分からない。
この時間だけはいつも冷や汗ものだった。最後は課題曲
を皆で歌う。いろいろなジャンルの歌がその都度提供さ
れた。

私は演歌に没頭した。古賀メロディが好きで、よく「影
を慕いて」や「青春日記」などを歌った。歌謡ショウと名
の付いたステージにも何度か立った。

俳優コース受講のときは八重洲坂スタジオへ行った。

常に二十数名がいた。最初に全員で「外郎売」を使って発
生練習をした。テキストを見ることは許されない。暗記が
必須であった。それから五、六人ずつグループを形成して
先生の指導を仰ぐ。後半は研究生同士が指摘し合いなが
ら、与えられた台本を元に演技を繰り返す。特別講師とし
て宝田明や千葉真一が登壇したり、俳優コース出身の先
輩伊吹吾郎から直接指導を受けることもあった。

一九七四（昭和四十九）年に市ヶ谷スタジオの大場久美
子（当時中学二年生）が、日本テレビのドラマにレギュラ
ー出演が決定した。皆で喜びあった。大場は劇団フジの公
演「マッチ売りの少女」に出演して、演技が高く評価され

た。音楽部の福田峰子こと西川峰子がビクター・レコードから「あなたにあげる」でデビューすることも決まった。夢ではない。研修生たちにそんな希望が生まれつつあった。

土曜日に吉祥寺まで行って、親戚の小早川家で泊まらせてもらい、日曜日にレッスンを受けた。レッスンが終ると気のあう研究生たちと近くの喫茶店に入り、演技の反省や未来のことなどを熱く語り合った。

二十歳になった。研削盤などの工作機械を作る会社（豊田工機）に職を得ながら、レッスンに通っていた。そんな折り、弟が東京の専門学校へ行くことになった。私は長男である。このまま先の見えない歌手を志すべきか、徳島に帰って新たな職を探すべきか。日々葛藤した。

そのころ同年の野口五郎、西城秀樹、郷ひろみの御三家が注目を浴びていた。演歌では五木ひろしや八代亜紀など下積み時代を経験した歌手が日の目を見ていたが、主流は演歌から歌謡曲に移行しつつあった。

歌手への道の厳しさは痛いほど肌で感じていた。鳴かず飛ばずのまま、ずるずると今の状態を続けるわけにはいかないと思った。二十二歳の誕生日が目前に迫った一

九七六（昭和五十二）年十二月五日、東藝音楽部へ退部届けを出し、受理された。私は歌手の道を断念、翌年三月末に会社を退き、帰郷の道を選んだ。

青春時代の傷痕といえそう言えなくもないが、挫折という字が胸の中に刻印された。「こころざしくづれて廿歳雪の上を群青の風過ぎし痕あり」は還暦を過ぎた身にも、あの頃の思い出が苦く、それでいて清々しく蘇ってくる。群青の風が雪の上に残した痕と似て、やはり美しい。師は晩年に伊吹吾郎を二首詠んでいる。あの無頼漢的風貌が気に入っていたのである。

ラムネ飲む伊吹吾郎の咽喉佛 ほとけはつねにそこにあります
『詩魂玲瓏』

伊吹吾郎の軒 花園妙心寺黄鐘調の鐘と競へよ
『約翰傳偽書』

② 掌てのひらの釘の孔もてみづからをイエスは支ふ 風
の雁かまつか來紅
『星餐圖』

古書店でキリスト教学者の笠原芳光著『塚本邦雄論』（一九七四年七月刊）と巡り会ったのは刊行の翌々年の

こと、二十一歳の時であった。本の扉を開けると、たちまち心を驚愕みにされた。

「塚本邦雄は逆信仰者である。疑う者はこの一首を見よ」という書き出しのあとに、掲出歌が示されている。そして「風に揺れやまぬ鮮紅の葉鶏頭から連想されているイメージは、いうまでもなく十字架にかけられたイエスの流血の最後である」と続く。さらに「正統的キリスト者の賢しらに対決するかのごとく、この歌のなかのイエスは神によって支えられていない。否、自らを支えている。その重い自己を支えているのは掌に打ちこまれた釘という苦痛であり、またその孔という空洞である。それはなにか確固たる客観的なもの、絶対的な存在によって支えられないのではなく、また自己自身に依りたのむという一種のエゴティズムでもない。自らの痛切と空虚に支えられないことは支えるという思想そのものを否定することである。人間はいわゆる神によっても、また自己によっても支えられるべきではないという一つの透徹した虚無思想がここにある。イエスはそのようなニヒリズムの極限であるというのが作者の思想であり、あえていうならそれは独特の『神学』であり、独創の『キリスト論』でもあら

うか。それはイエスを高き神とする独善の論を破砕し、しかもイエスを単純に人間とする歴史主義の平板の説を拒絶している。ここに塚本邦雄の逆信仰がある。逆信仰はこの歌人を解く一つの、しかし重要な鍵である」と畳み掛ける。

立ち読みで理解できるような書ではない。それより何より掲出歌に打ちのめされたわけで、躊躇なく購入した。それから十五年後、「玲瓏の會全国の集ひ」に初めて出席し、師・塚本邦雄と出会うことになる。私は三十六歳になっていた。

『短歌研究』一九九四年十一月号にエッセイ「短歌のきつかけ」にも記している。

とある古書肆の昼下がり、まこと刺戟的な邂逅が用意されていた。一九七六年、二十一歳初秋のことである。

「掌の釘の孔もてみづからをイエスは支ふ風の雁来紅」の一首に始まる『塚本邦雄論』（笠原芳光著）を掬ったこの日より、短歌にのめり込んでゆくこととなる。三年前、玲瓏の會全国大会に初参加、師・塚本邦雄と対面を得て後、もうどうにも止まらない。

一九九三年九月十三日（封書）

グリュネヴァルトの腐爛磔刑圖、折疊み式になってゐるのが面白いのでお届けする。他の本、新刊に目を通して置いて下さい。

師は八月下旬から九月上旬にかけて、ヨーロッパ旅行に行かれた。フランスではシャルルヴィル・メジエールにてランボー記念館に立ち寄ったり、コルマルにあるウンターリンデン美術館へも行かれた。その美術館でグリュネヴァルトの祭壇画を確認された。

この祭壇画はもともとイーゼンハイムの聖アントニウス会修道院附属施療院の礼拝堂にあった。一五一年より一五年頃に制作、第一面から三面で構成されている。

磔刑図は第一面に見られる。中央のパネルには十字架に磔けられたキリスト、左右に聖母マリア、マグダラのマリア、使徒ヨハネ、洗礼者ヨハネなどが配置されている。

左のパネルには聖セバステイアヌス、右パネルには聖アントニウスが描かれ、さらにプレデッラと呼ばれる祭壇下部の横長の画面には、キリストの埋葬の場面が描かれている。

十字架にかけられたキリストの姿は目を覆いたくなるようなリアルさである。まったく美化されていない。痩せ衰えた肉体、首は右側に折れ曲がり、苦痛に打ちひしがれたまま息絶えたという感じだ。引き攣った指からも察せられ、胸を抉られる。足に打たれた釘のもとを凝視すると血が飛び込んでくる。まさに雁来紅の靡きのように。

何時^{いつ}だったか、私は「この歌に接すると必ずグリュネヴァルトの磔刑図が浮かんできます」と師に話したことがあった。それをすっかり覚えておられ、旅行の土産に折り畳み式の祭壇画を送り下さったのであった。ほかにも色々な貴重な頂きものがある。

一九九六年十二月二十二日（FAX）

書棚の整理してゐたら『星餐圖』特装本が二冊あった。FAX南通祝ひに一冊進呈したいのだが、ひよつとして貴兄持つてゐる？返事を待つて發送することにしませう。

一九九六年十二月二十五日（FAX）

本日便で『星餐圖』（特）發送します。この装画 ギュスターヴ・ドレの地獄篇を使つてゐるので、蛇の嫌ひな人は見るのもいや、かも知れませう。

『荊冠傳説』第三章「母マリア」より抜粋。

「イエスは腰布のみの赤裸になる。掌と足首に犬釘が打込まれる。息が止まるほどの激烈な苦痛に彼の身体は怖ろしい痙攣を起こす」「昼近くになって砂埃を孕んだ熱風が吹き始めた。砂漠からの黒い風は真昼を夕暮れにする。みずからの重みを掌の釘で支え、イエスは苦しい息の下から叫ぶ。『わが神わが神なんぞ我をすて給うや。何なれば遠く離れて我を救わず、わが歎の声をきき給わざる。ああわが神われ昼よばわれど汝こたえ給わず。夜よばわれどもわれ平安を得ず』午後三時だった。それでもまだ息は絶えずイエスは鉛色の舌を垂れて病犬のように喘ぎ続ける。…葡萄酒に浸した海綿がその唇に差寄せられた。ひくひくと二口三口それを吸い、ああすべて事は終つたと呟き、彼はがつくりと首を垂れた」

『眩暈祈禱書』「麥芽昏睡」より抜粋。

「キリストにかつても今も関りはない。もとより神、唯一超越神を信じたこともない。私が会ったのはナザレ生

れの青年イエスであつた」「エデンの国に始まりゴルゴタの丘に至り、世界の終りの予言を以て閉じられる旧、新約聖書の、どの頁にもどの行にも、はたと息を呑むような不条理と矛盾が充ちている」「(ルカ伝第五章には)『大なる群衆、あるいは教を聴かんとし、或は病を医されんとして集り来りしが、イエス寂しき処に退きて祈り給う』と伝えている。いかなる卓抜の聖句も及びがたい悲しみの表現であり、私はさしぐむ思いで愛誦するのだ。『イエス寂しき処に退きて祈り給う』これこそ彼の赤裸な魂のすがたであつたろう。もしいつの日か回心して私がキリスト教徒になるとしたら、それは間違ひなくこの一行のゆえであろう」

イエスは三十四にて果てにき乾葡萄酒のみつつ苦

くおもふその年齒 『裝飾樂句』

水の上に橙黄の月のぼらむとあやふし わがおとうと
なる耶蘇 『感幻樂』

キリストの齡死とじなずしてあかときを水飲むと此のあは
き樂慾 『裝飾樂句』

③ 定家三十「薄雪こほる寂しさの果て」と歌ひき「果て」
はあらぬを
『風雅黙示録』

一九九六（平成八）年一月三日、東大阪市鴻池町にある師の宅にて、新年会を兼ねた玲瓏編集会議あり出席した。師と奥様、子息の青史氏のほか十一名が集った。会議が終ると師の発句を基に歌仙を巻いた。談笑のうちに夕闇が迫り、お開きの時間が近づいた。

師はおもむろに立ち上がられ、床の間へ行かれた。そして、掛軸に飾られていた色紙を外され、「一番遠いところから来てくれた君に差し上げる」と言って、私に手渡して下さった。その色紙に揮毫されていたのが掲歌であった。藤原定家の「一年を眺め尽くせる朝戸出に薄雪凍る寂しさの果て」を下敷きになっている。師の歌の初出は『短歌』一九九五（平成七）年一月号に掲載された「百花園彷徨」十四首中巻頭歌である。それらの歌が収められた『風雅黙示録』は、一九九六（平成八）年十月一日に刊行されている。

師はことのほか、定家の「薄雪凍る寂しさの果て」の歌を愛した。自著書や短歌総合雑誌の古典に関する特集などで、その歌の素晴らしさを解いて来た。より分かりやす

く解いた文が、自著『新古今新考』『断崖の美学』（一九八一年刊）に収められている。

左 一年を眺め尽くせる朝戸出に薄雪凍る寂しさの果て
定家

右 人をさへとはでこそ見れ今朝の雪を我が踏み初め
む跡の惜しさに
隆信

右の歌のまずさは、ざっと眼を通すだけで納得できまず。雪の上に跡がつくのが惜しいので、通いたい人がいるが、出てゆかずに見ていようという歌です。つまらない発想だし、ただそれだけのことをこうもごたごた言う必要はないと思います。それに対して定家の歌、これは年末に近い冬の朝を詠ったもので、「朝戸出」とは、朝になって家を出て行く意味で、稀に恋歌などで一夜を過ごした女の家を男が出て行く意味に使われることがあります。この場合は、単純に出仕のために朝家を出ることと、とおきましよう。毎日毎日家を出てゆく時に見る眺めだけでも、一夜かすかに積った雪がガラス状に凍り、思えば一年は経ってゆく、この雪にこもる私の心も、日々の寂し

さの果ての寂しさであるという意味で、現代短歌にもこのまま充分に通用するのではないかと思います。と言うことは、逆に言えば、「寂しさの果て」などというフレーズが当時いかに斬新であったかを証明していることにもなります。開いた口が塞がらないくらいに方人達は驚嘆したでしょう。それが証拠に右方からはこう言われています。「右申云。左歌、ゆゆしげに落されたり」、何だかひどく大そうな、物言いたげな調子で歌が終っていますね、と言っているのです。これは猛烈な皮肉です。「ゆゆしげ」とは、不自然であるとか、事実を歪曲しているとか、あるいは歌言葉として常軌を逸しているとかいう、口を極めた罵る言葉なのです。とにかく、右方の特に六条家の人達是一種の憎しみさえ感じていた筈です。つまり、それだけこの歌が新しいのであって、その新しさにこそ、この歌の存在理由があるのです。

「薄雪凍る寂しさの果て」、素晴らしい表現です。それも、初めからこういうきらきらした言葉を連ねていたら効果は半減するのですが、「一年を眺め尽くせる朝戸出に」の上句は、思いは深いけれど、言葉にはそれほどの新しさもきらめきもなく、そのことが「薄雪…」を一層ひき立て

ています。これこそ定家の巧みです。下の句に、エスプリと美学とを極度に凝縮させる、あるいは投げつける、そこにこの歌の面白さが出ているのです。弱から強に移り、暗から明に移る、その呼吸のうまさ、これこそ天才の天才たる所以です。

ところが、この歌に対する俊成の判が実に妙なのです。

「判云。左歌、一年を眺め尽し、『寂しさの果て』と云はば、雪も深くや侍らむとこそ覚え侍るを『薄雪凍る』と云へるや、事違ひてや聞ゆらん」。かいつまんで言えば、「薄雪凍る」がつまらないと言うのです。右方が言った「ゆゆしげに落されたり」についてはノータッチです。どういう訳で触れなかったかは知りませんが、「寂しさの果て」というのが非常にいい下の句だとも言わない。このあたりが老獪ろうかいだと思います。雪が深々と積っているのだったら、「寂しさの果て」で結構だが、「薄雪凍る」というのは不適當だと言う。馬鹿も休み休みに言ってもらいたい。深々と雪が積っていて、どうして「寂しさの果て」でしょう。薄雪凍ってこそ、骨身に沁みるような冬の險しき、魂を突き刺すようなガラス状の冷たさが感じられます。先程の判詞はいわば「子の心親知らず」ですけれども、この場合

は「子のエスプリ親悟らず」といったところ。それに
対し右の歌には次のような判を下すのです。「右歌は、雪
の朝、人さへ問はず、『我が踏み初めむ跡の惜しさ』など
云へる、常の心なる上に、詞砕けて、余り慥かに聞えて『と
はでこそ見れ』など云へる心も、『薄雪』にも劣りてや侍
らむ」。「常の心なる上に」とは全然珍しくない、当然のこ
とだという意味です。雪を踏むのが惜しいというのは当
然の心であるし、言葉は砕けていて、しかもあまりにも確
かに詠い過ぎ、理屈をこねているだけ、つまり意味を言っ
ているだけで、ちっとも歌になっていない、「薄雪」の歌
もつまらないけれど、それ以上にこの歌はつまらない、だ
から左歌を勝たすことにするとなっています。秀歌とい
うものは時が判決を下し、佳い歌は必ず残るなどと言わ
れますが、『新古今和歌集』にも「薄雪」の歌はとられて
いませんし、また、国文学界のごく一部の方を除いて、ほ
んどこの歌をお褒めになっているのを見掛けません。
恐らくこの歌を褒めたのは私以外には少ないのではない
かと思います。私はたとえ自分一人でも永久にこの歌を
推奨していくつもりです。

師の思い入れがいかにか強いかが窺われる。私が頂いた
フアクシミリにもその思いが記されてあった。

一九九六年十二月二十九日（FAX）

大掃除の最中に着くかとも思いつつ、貴兄にとつては
今年の名残の一信。小生の『風雅黙示録』巻歌の一首は、
その年末（大晦日）に、定家が九條家へ出仕する時の作（二
百番歌令・一九三番）「一年を眺めつくせる朝戸出に薄
雪こはる寂しさの果て」この下句一九九六年、年末でも十
分通るやうな新鮮味あり。ただ俊成はそれが感得できな
かった。そんなことより寂寥感は無意に通じ、ジッエンド
（物事の終り）などであるはずがない。アンフィニ（無限）
だといふのが小生の作。よい年を！歸つて來たらFAX
を。

（FAX用紙の左肩の切手を指して）シプリペディウム
と學名が入つてゐる。

一九九七（平成九）年一月二十六日、師の宅にて玲瓏編
集会議をした折には、師の直筆の扇子を戴いている。歌は
「馬を洗はば馬のたましひ沍ゆるまで人戀はば人あやむ
るころ」で、そのほか第二十一歌集『風雅黙示録』用の
生原稿を含んだ貴重なファイルも下さった。

④ 漆黒の揚翅蝶^{あげは}脈搏つ大寒の夜の展翅板發火寸前

『魔王』

一九九一年十月十五日に「月光の會」を退会した。代表の福島泰樹は熱血漢ばりばりの僧侶で、魅力があった。しかし、「月光の會」は東京に拠点を置いていたため、歌会など諸々の行事に出席できないことがネックになっていた。それと並行して「玲瓏」に引きつけられていったことが、退会の最大の理由だったかもしれない。

同年十月二十六日、ホテル大阪ガーデンパレスにて「玲瓏の會全国の集ひ」があり、初めて出席した。前夜には歌会の席上で師を果たしていた。「玲瓏の會」に入会を決意した日でもあった。

師の歌によく蝶が出てくる。蝶好きの私としてはたまらない歌群であった。「玲瓏の會全国の集ひ」出席の興奮冷めやらぬ十一月六日、師に蝶の標本（私が若いころに採集したうちの34種39頭）を桐の標本箱に納めて宅急便でお贈りした。後日、師より葉書が届いた。

一九九一年十一月十一日（葉書）

灼爛たるパビヨンの硝子の檻を頂きました。青色系の・・・瑠璃の美しさは息を嚙むばかりです。貴兄の作品の美學とどこかで確に通じあふところあり、來年は是非玲瓏賞に。時間が許せば夜鶯の會にもたまには出席して下さい。佳き日を

ところが、である。奥様が蝶や蛾は大の苦手だったと、あとで聞いた。それを聞いて申し訳ない気持ちになったが、師から戻されることはなく、本棚の隅に安置されていた。

『玲瓏』第六十六号（二〇〇七年一月）の「塚本邦雄ワンテーマ」の欄に「生けるしかばね」と題して、師の蝶の歌を採り上げたことがある。その一部を記しておきたい。

第一次世界大戦の西部戦線に配属されたドイツ軍の若い兵士ポールは、蝶の姿を見て塹壕から身を乗り出したところ、フランスの兵士に銃撃され戦死する。これはあまりにも有名な映画『西部戦線異状なし』のラストシーンである。蝶の研究家の今井彰によると、このシーンで使われた蝶はカザリシロチョウだと言う。レマルクの原作のラストに蝶は出て来ないが、平和の象徴として蝶を使いた

かったのだろう。しかし、種類までは限定されていなかったためか、使われたのはオーストラリア北部に分布する蝶だった。せめてヨーロッパに棲息している蝶を選ぶ配慮があってもよかったのではないか、とも語っている。

『コレクター』の冒頭シーンに使われた蝶はキベリタテハといって、イギリスでは希少種である。ドイツ語の呼び名は「喪服」で、フランス語では「死ぬ」の意があり、ストリーを考えての上でこの蝶を使ったとすれば、監督の力量といえよう。

蝶は動物界・節足動物門・昆虫綱・鱗翅目と分類され、紋白蝶を例にとると、白蝶科・白蝶亜科・白蝶族・紋白蝶属・紋白蝶となる。全く蝶に興味のない者は、「蝶」と「蛾」を一括りにしたところで、それは何でもないことなのである。だから映画の中でどんな場面に使われたのかが話題になっても、どんな種類の蝶が使われたか、まで語られることはない。

日本で現在までに記録されている蝶の種類は、土着種で二三七種いる。それ以外、周辺諸国から台風などによって運ばれて来たと考えられる、いわゆる迷蝶と呼ばれるものも六十三種確認されており、それを含めると約三〇

〇種ほどになる。日本列島を限なく、早春から晩秋まで飛び回っているそれらの蝶の、それぞれの紋様はまさに神の仕業だと断言している。

●瑠璃揚羽わがてのひらの檻搏てり咎はうつしみより光りいづ
『天變の書』

瑠璃色でまず浮かぶのは、何といってもアマゾン川流域に棲息するレテノールモルフォであろう。金属的に輝く瑠璃色。日本に瑠璃揚羽という名の蝶はいない。羽が瑠璃色に輝く揚羽蝶は烏揚羽蝶、深山烏揚羽蝶、沖縄烏揚羽蝶、八重山烏揚羽蝶の四種で、特に深山烏揚羽蝶の紫紺緑青の鱗粉は光の射す角度によって七変化する。掌の檻のなかで羽を震わせて、もがき苦しむ深山烏揚羽蝶、生命のはかなさが凜として伝わってくる。春型が相応しいだろう。夏型より一回り小さく掌にも収まる。

●翅脈のみ残りし蝶をざわざわと蟻離れシヨパン誕生日なり
『驟雨修辭學』

フレデリック・フランソワ・シヨパンは、一八一〇年三月一日にポーランドで生を享けた。七歳でピアノを習いはじめ、数多の作品を残しピアノの詩人と称された。二十八歳の時、女流文学家ジョルジュ・サンドと恋に落ち、九

年目で破局。その間も肺結核に侵され、一八四九年、三十九歳という若さでこの世を去った。死因は遺伝病の一種で、囊胞性線維症という説もある。三月一日に死に絶えているのは越冬蝶であろう。肺が侵されていくように、蝶の翅も蟻によって破壊され、翅脈だけしか残っていない。ピアノ奏鳴曲『葬送行進曲』の第三楽章を聴いてみるとよい。逝きて還らぬ亡骸を墓地に運ぶ葬列、黒衣の僧侶、会葬者の列、無言の慟哭・・・黒い世界が拡がる。翅脈は五線紙で、蟻は音符。シヨパンの誕生日にシヨパンの死を想う果かなさが一首に刻まれている。越冬したものの、精魂が尽き果てて地に墜ちた蝶は、黄立翅蝶の秋型に思えてくる。

●七割は蟻がむしばみたる蝶の翅なほ燦と浄瑠璃寺道

『魔王』

浄瑠璃寺は京都府木津川市加茂町に在る寺院を指していると思われる。寺名は薬師如来の居所の東方浄土「東方浄瑠璃世界」に由来するという。「浄瑠璃寺道」は東方から九体阿弥陀如来像のある本堂へつづく道が相応しい。たゆたう時間の中に身を置き、池の前に差し掛かったとき、蝶の屍に出くわした。蟻がむしばむ翅を凝視する。残った三割の翅のかけらが、樹林の狭間から射し込む光で

燦燦と輝いている。生きていた証として蝶は死後も鱗粉を纏い、消滅するまで輝きを放ち続ける。寺に続く山道に似つかわしい蝶は蛇ノ目蝶科である。地味な色の翅をもつ種であるが、燦と輝くならば日陰蝶属、中でも山黄斑日陰蝶^{かげ}が一番に挙げられる。夏型は品があつて、まさに黄金に煌めく翅を持っている。やや丸みを帯びた翅全体に黄色い斑の模様が散りばめられていて、曼荼羅図を思わせる。南北朝時代に寺内の多くの堂塔は焼失したが、本堂と三重塔は残った。三割だけ残った蝶の翅と焼失を免れた本堂や三重塔が呼応する。

●未来と言へどただ老ゆるのみ十月の水に鐵のごとき蝶

『豹變』

秋、霖雨が残した水溜りに絶命した蝶が浮いている。きらびやかさを誇った翅の模様は色褪せ、赤銅色と化している。明日はただの一日、未来へ向かつて老いるのみ。

平成十七年六月九日、塚本邦雄という鳳蝶は羽化を果たして、天空に舞い上がって行った。瑠璃色の翅は今も私たちに眩しい。

⑤ 薔薇をやぶからしと訓みくだす天才的若者をひつかい

てやりたい

『波瀾』

わが家の狭庭には妻の手によって、四十種ほど薔薇が植えられている。丹精籠めて育てた薔薇は、四月下旬から徐徐に咲き始める。

最初に咲くのはスパニッシュ・ビューティである。一季咲きだが、ウエーブのかかったピンクの大輪が見事だ。強風の影響で大きな枝が折れ、花数は全盛期の半分にも満たないが、老木なりの意地を見せてくれている。

昭和の日を過ぎると、マダム・イサーク・ペレルのロゼット咲きの大輪が、フェンスより高い位置で花を掲げる。複雑に巻き込んだローズピンクの花びらがダマスクの香を発する。ナニワイバラ（難波茨）の蔓は西側のフェンスを這うように伸びている。一季咲きだが、五枚の白い花びらは気品がある。白い花と言えば、アイスバーグが美しい。門扉の右側に植えている。透明感のある純白がいかに清楚で、それでいて存在感は抜群である。四季咲きのため、一年を通して楽しめる。ブルー・ムーンは薄紫で花びらが尖っていて剣のように見える。香りもゆたかである。

ピエール・ドウ・ロンサールもロゼット咲きで、ピンク

の花びらをぐるぐる巻きにして押し込んだような形で開く。大暑性・耐寒性に優れているが、長雨に晒されると黒い斑点ができて、開かないうちに萎びることがある。

アーチの右側から這いのぼっているのはコーネリア、ピンクアプリコットで房になって花を付ける。連動するように咲き継ぐので、長く楽しめる。左側にはアンジェラを配している。こちらもピンクだがカップ咲きである。香りはさほどでもないが、秋まで万遍なく咲いてくれる。

妻のお気に入りにはダーシー・バツセルで、ダーククリムゾンのロゼット房咲き。庭の真ん中の位置を占め、赤系統の大輪が咲き誇る。

薔薇の花を愛でる贅沢さは何とも言えないが、名前を覚えるのには難儀する。スヴニール・ドウ・ラ・マルメゾン、ホルズ・ヒマラヤン・ムスク、ジュード・ジ・オブスキュア、レーヌ・デ・ヴィオレット、ブラッシュ・ノアゼット……名前だけで目が眩む。

私が担当しているのは剪定と消毒である。これがなかなか大変なのだ。前年の十一月に鉢植えの土を替えるために植え替えをする。十二月には蔓の樹の剪定と誘引を

行う。選定は一月いっぱいまでが目安で、芽が動きだす前に終えなければならぬ。誘引のキーワードは頂芽優勢、高い位置の芽ほど勢いよく伸びる。一月から二月までに肥料をやり、四月までに四、五回ほど消毒する。

師はとても薔薇の花が好きだった。

一九七七（昭和五十二）年刊行の評論集『翡翠逍遙』の「卯月遠近法」に薔薇に關した記述がある。

「イースターもようやくわれわれの耳になじんで来た。その日は、春分の後の最初の満月の、次に来る日曜日とさだめられており、今年は四月十八日になる。バイブルに従えば、紀元三十年の四月六日の木曜、イエスは十二人の弟子と共に最後の夕食をとる。その夜ユダは師を売り、七日が裁判、神の子はゴルゴタの丘で十字架にかけられる。聖金曜日と呼ぶ。あくる日は安息日、イエスがよみがえるのは九日の日曜だ。ヨハネ伝では『まわりのはじめの日、朝まだ暗きうちにマグダラのマリヤ、墓に來たりて墓より石の取りのけあるを見る』と語りはじめる。復活のイエスはまず彼女の前に姿をあらわした。その頃のパレスチナの野には赤いばらとアネモネが咲きみだれていた。『未

の世の薔薇のこずゑにくれなるの月かかりをり誰よみがへる』特にばらは原産地ペルシアにも近く、イエス在世時代、ヘロデの離宮のあつたエリコは栽培の中心地になっていた。人人はきそつてばらを植え、女の子にはギリシア風に、ローダと命名することが流行していたという」

一九七六（昭和五十一）年四月四日に『朝日新聞』に掲載された。新聞ゆえに文は新仮名、植物はカタカナもしくは平仮名にせざるを得なかった。しかし、歌だけは旧仮名や「ばら」を「薔薇」と記すことが許された。師のせめてもの抵抗だったのである。

その朝日新聞社から一九八八（昭和六十三）年に刊行された『薔薇』には師の歌が八首、薔薇の花の写真とともに掲載されている。赤・桃色・黄・白・橙・紫・黒紅・虹色のそれぞれに合つた歌を披露した。例えば赤は「青春とほく過ぎにけるかなかなしきは五月まひるの眞紅の薔薇」、橙に「夏に名残をとどめざらむと一群の橙色の薔薇咲きいそぐなれ」、虹色には「たれの華燭のためならざれど雨の中にわれは虹色の薔薇剪らむとす」が添えられている。

また、散文集『百花遊歴』（一九七九・昭和五十四年）

にも「薔薇」が博識をもって熱く熱く綴られている。

「薔薇はそのかみ幻惑と快楽の象徴として、敬虔なキリスト教徒からは嫌悪されていた。色と香の抗しがたい魅力に彼らは無意識に溺れ、薔薇恐怖症にかかっていたのだ。高所恐怖症が実は墜落願望の裏返しであることと揆を一にする。三世紀のスペインの殉教者ユーラリアなどその最たるもので諸悪の根源として宝石と薔薇を指弾したと、キリスト教詩人プルデンティウスは伝える。中世になると教会側の教條急変があり、あつという間もなく、薔薇は百合と共に処女マリアの純潔のシンボルに祀り上げられた。どういう力が働いたか、調べれば幾多の奇怪な裏話もある。続いてローマ法王が特別の教会や信徒などに褒美、引出物として与える祭壇の道具、装飾品の意匠まで薔薇尽しになる。十五世紀半ば、法皇ピウス二世がシエナ市に授けた黄金造りの薔薇の木は、高さ七十糎、頂及び三方に花があり、したたる露は碧玉製であつた。またゴジック寺院のステンド絵・ググラス璃にも競つて薔薇模様は採用される。ノートルダム寺院の十三世紀に造られた薔薇窓は、イエス像を中心として彩硝子の花卉が

放射状に拡がり、恍惚たる美観を呈する」それにしても、

『薔薇』なる会意文字は何と瑰麗な幻想をその一点二画に纏っていることか。『薔』一字なら水蓼、『薇』一字ならぜんまい、また薔は牆、薇は靡、そのような木の姿を写したとも言われ、この二字は花の姿と縁もゆかりもない。それは重重承知しているのに、私は鋭い棘と巻き畳まれた花卉、その中心の変形しつつそそりたつ雄蘂が、縦横斜に差し交された画の繁みにありありと浮んでくる。『ばら』でも『バラ』でも困るのだ」

ほんの一齣だけ抜粋したが、師ほどの博學強覧ぶりは他に例を見ない。

ノートルダム大聖堂で二〇一九(平成三十一)年四月十五日に火災が起きた。パリ市民は賛美歌を歌いながら祈り続けたという。尖塔が爛れて崩落し、屋根の三分の二が消失した。三つある薔薇窓の一つは失ったものの、あとの二つは難を逃れたと聞く。

師は植物大好き人間だったが、庭に一度たりとも薔薇を植えることはなかった。鉢植えの薔薇もなかった。傲慢かつ繊細な木は手入れが万全でないと、ろくに花をつけ

ない。たとえば花を咲かせても、葉が汚れたり蝕まれたりするし、剪定しないとたちまち藪と化する。そんなわけで薔薇は植えなかつたと言う。

「週に一度、花店を訪れて一抱えほど買って来る。鮭^{サーモン}、

レッドレモン、イエローレモン、檸檬黄、純白に臘脂。青を除けばどんな色でも手に入る。薔薇栽培人が営利のために飼ひ馴らした、無慙に美しい薔薇をさかさに提げて家へ帰る。一週間客間の壺に挿した上で、これらはすべて書斎の天井から吊す。逆^{さか}はりつけ

磔^{はりつけ}の薔薇を時々仰ぎながら、私はそれに肖た絢爛たる惨劇を孜孜^{しし}として綴る。夏は一週間で乾き上り、薔薇の木乃伊は微風に擦れ合つて儚い音を立てる」

この散文に触れて、私は師の誕生日（八月七日）に一度だけ薔薇の花束を贈ったことがある。その日の消印のある礼状が二日後に届いた。

一九九三年八月九日着（葉書）

立秋誕辰の花束ありがたう。眞情にふれた思ひで一日愉快だった。貴兄の選んだ花舗とそのチエーン抜群に行届いてゐる（通常は依頼主の意に反してんでもないのをおしつけるか）暗紅の固いつばみの薔薇は一級品だった

し、徳島市の受注店からも直接確認の電話あり（褒めておいた）
目下家改装中で火事場さわぎ、完成したら一度遊びに来ないか。とりあへず御礼をひとこと。

師に何をお贈りしても、必ず礼状が送られて来た。それも心が籠もつていて、とにかく返状が速いのである。

⑥ 驛長^{わきぢやう}愕^{おどろ}くなかれ睦月の無蓋貨車^{むがいかしゃ}處女^{ぢよ}ひしめきはこぼるるとも『詩歌變』

二十歳のときに笠原芳光著『塚本邦雄論』を購入して以後、書店で短歌関連の雑誌を読む習慣がついた。『短歌』一九七五年（昭和五十）年七月号に師の「黒き鶴の主題」が掲載されていたので購入した。短歌雑誌を買ったのは初めてだった。「斑猫は失楽の野に飛び亡^うする五月やうくすつぬふむゆるう」「山萩のくれなる霜にみだれつつ過去はやいきしちにひみいりぬ」を含めた五十一首が載っていた。歌の中にウ段「うくすつぬふむゆるう」やイ段「いきしちにひみいりぬ」が挿入されているなんて、と驚いたものである。これが前衛と呼ばれている短歌なのだ、とも思

った。

『短歌』の一九八三（昭和五十八）年三月号は師の特集号であった。書店の文芸の棚に一冊だけあった。本の中身を確認することなく購った。帰宅してすぐに本のページを捲った。師の新作「たとへば詩魂」三十二首が載っていた。今でも次の二首が強烈に脳裡に刻まれている。「未来と言へどただ老ゆるのみ十月の水に鐵片のごとき蝶」「明日と言へど餘生（ひとび）の一日きさらぎの太陽にはたづみにうかびて」がそれで、師は当時六十二歳であった。青年期に大病を患ってはいしたが、このころの男性の平均寿命が七十三歳前後だったので、死を身近に感じていたのかもしれない。私の心にシンガーソングライター小椋佳の「子供らの明日」の一節とこれらの歌が重なりあった。「子供らの明日は未来で 私達の明日がただの別の日で…」。

一九八六（昭和六十一）年の睦月上旬に、徳島市の書店で『短歌研究』一月号を手にとった。師の「愕くなかれ」の一連を目の当たりにする。

「駅長愕くなかれ」は「駅長莫驚時変改、一栄一落是春秋」（駅長驚いてはいけない。時の変わり改まるを、一栄一落これ春秋なり）を下敷きになっている。菅原道真が藤原

時平の陰謀によって、大宰府へ流されてゆく途中で立ち寄った駅家の駅長の同情に対して作った漢詩である。そこまでは理解できたが、三句目からの「無蓋貨車處女（をとめ）ひしめきはこばるとも」との繋がりがよく分からない。（後に、屋根のない貨車にひしめいていたのは、アウシユビッツに連行されるユダヤ人の少女などではないか、と解釈されていることが分かった）。道真は京の都を去るときに「東風吹かば匂ひをこせよ梅の花主なしとて春な忘れそ」（飛梅伝説）と詠んでいる。それを師の歌と重ねると、胸が痛くなる。

その一連には「紅鶴（フラミンゴ）ながむるわれや晩年にちかづくらずすでに晩年」があった。その歌に接して、塚本邦雄は自分の年齢をかなり意識しているなと思った。

同年の如月上旬、今度は『短歌』二月号を手にした。そこに「人血羹」の十四首が掲載されていた。

紅葉溪行きの車掌のバツソ・プロフォンド他界へはどこで乗り換へるのか

姉に死なれてむりにかなしむ姉婿がかはゆし上賀茂蟬ケ垣内町

銀碗は人血羹を盛るによしこの惑星にゐてなに惑ふ

枇杷の汁股間にしたたれるものをわれのみは老いざらむ老いざらむ

紅葉真つ盛りなる溪谷に向けてバスが走る。停留場が近づくたびに車掌はバス停の名を告げる。その声がバスという音域の、特に深い低音で流れてくる。そして、思う。他界へ行くには何処で乗り換えればいいのか、と。

上賀茂蟬ヶ垣内町という地名は存在する。京都市北区にある。姉が死んだ。しかし、歌に死んだ原因は明らかにされていない。病死か、事故死か、自殺か。いろいろな状況が心を錯綜させるが「姉に死なれ」たにヒントがあるかも知れない。そして、「花婿」なる核心部分に足を突っ込むことになる。無理に悲しんでいる花婿とは何ぞや。世話をかけられていたが、死んでくれて清々した、とも取れる総身がありありとその心情を物語っているのである。それがかわゆいと言うのだ。（とても見ていられない、という意でないことは明白）。

銀のお碗は人の血を固めて羊羹のようにして盛るのに適しているというのである。献血などもあるから、それもありかと思うところに、この地球という惑星で何を迷う、と畳み掛ける。山より大きな猪は出ぬ、ということか。

股間に滴るもの何するものぞ、われに老いなどあつてたまるか。あつてたまるものか。

やはりこれが最先端の短歌なんだと思った。塚本短歌をもっともつと読みたいと思った。その雑誌を買った。師はそのとき六十五歳、私は三十歳になっていた。

この頃から短歌総合雑誌の定期購読を始めていった。最初は『短歌』、何ヶ月か後に『短歌研究』を購読した。八七（昭和六十二）年八月から『歌壇』と『短歌現代』（現在は『現代短歌』）、平成に入って『短歌往来』を購読を始めた。いまでもその五誌が毎月届く。

「玲瓏の會」は八五（昭和六十）年の秋に発足されていたが、その存在はまったく知らなかった。それから二年経って、師のマネージャー的存在の政田岑生氏を知ることになる。

政田氏より師の著書を初めて購入したのは、一九八八（昭和六十三）年四月で、第十五歌集『詩歌變』と第十六歌集『不變律』だった。『詩歌變』は八六年九月刊行、『不變律』は八八年三月に出たばかりであった。以降、師の新作が刊行されるとすぐに届けられた。

⑦ 百合科病院、てんなんしやう天南星科醫師、なす茄子科看護婦、うつぶ六腑夜ひらくてふ
『青き菊の主題』

初めてこの歌を見たとき、目が点になった。衝撃といふべきか。塚本短歌の中でも奇怪を形成している。その眩暈的感覚を覚醒させてくれたのは『翡翠逍遙』の「麻醉花群」に記された読み解きの文であった。

「長雨がからりと上って七月、百合、カラ、梔子、浜木綿が咲きさかり、咲き終る頃、私の病院幻想はもつともすさまじく、かつ華やかにくりひろげられる。六枚の花瓣、六本の雄蕊、太い一本の雌蕊という完璧な花式図を持ちながら実ることのない百合は現代の不毛のシンボル、ゆえに百合科病院。海芋、水芭蕉など蒼白い花をかかげてすつくと立つ天南星科植物はドクター。ほとんどが有毒である。麻醉薬の古典曼荼羅華、すなわち気違茄子やニコチンをふくむ煙草などの茄子科植物は、花びらのような帽子と白衣のナースたちである。彼らは今テーブルのまわりに円陣をつくって何ものかを切りひらこうとしている。夜ひらくのはポール・モーランの小説ばかりではない。現代医学のとうてい極めつくせない未知の世界がそこで探られている。人間がつくってはならないおそろしい超自

然、反自然の美が生まれようとしているのだ。生ける植物群は何かをなしてげて闇の中に姿を消し、病院には白白とした朝がおとずれる。…世はすべて事もなし。…医師にいわれのない怖れを感じることはなかった。ただ病院、それも大きなビルなどになると、その前に立つだけで足がすくみ、つめたい汗が背中を伝う。ことに真夏、白い花花のひしめく雨上りの夜は、そこでいつも美しい異変が起っているような気がしてならない」

この一節を含むエッセイの初出は『朝日新聞』の夕刊だったというから、余計に驚く。一九七四年七月三十日のことである。初出での植物名はすべてカタカナ表記だったとのこと。

師は「幻想はひとりで楽しんでいればよいのだ」と言うが、歌の魔力に魅せられた読者はたまったものではない。なんで見逃せようか。発表されたときから、一人で楽しむだけでは済まされぬ状況に一変する。それにしても何故、このような歌を創ることができるのか。博学のなせるところであるが、それだけで片付けることはできない。

⑧ すでにして詩歌くわうこん黄昏くれなゐのかりがねぞわがここ

ろをわたる

『青き菊の主題』

⑨ 言葉、青葉のごとし かたみに漕然と濡れて世界の夕

暮れに遭ふ

『感幻樂』

一九九六年六月二十二日（葉書）

花令歡の季 既發表作品写しありがたう。

あたかも第二十一歌集『風雅未來記』を上梓のはこびとなり、版元から原稿を早くと言はれつつ、自筆原稿しかなく（初出コピーは大仕事）困つてゐたところでした。助かります。でもまあ、よくこれだけ集めてゐてくれましたね。故政田岑生も驚くことδεせう。この次來阪の折、小生の「原稿」を貴兄に進呈します。他の原稿記事もゆまに書房から全集を出すのに貴重です。ありがたう。『風雅…』短歌往來七月、谷川健一さんの言葉に觸發されました。夏椿は今がさかり。これも貴兄に見せたいものの一つです。

『風雅未來記』という題名は刊行直前に『風雅默示録』

と改められた。

『塚本邦雄全集』全十六巻がゆまに書房から刊行されることになった。一九九七年十二月十九日に青史氏より全集の校正依頼を受け、承諾させて頂いた。

一九九八年八月二日（FAX）

七月末 鹹橘・金時藩などたつぷりのおくりものありがたう。素麵も好物です。お禮を書いてゐるいとまもなかつた！許してくれたまへ。

すっかり御意沙汰。この三月一日に近畿中央病院外科部長の執刀で腸閉塞のオペをしてからずっと入院中。今は「半健康人」なのですが、歸宅して仕事にいそしむ段階にはなかなか・・・小生獨身貴（う）賊、厨に立つとたれにも必ずつきまどふのが腰痛。四国が近くなつたといふのに貴兄にはなかなか会へず期待外れ一度獨身の小生を支へに二、三泊しに来てくれませんか。（ご馳走してあげるから）

全集校正よろしくお願ひ申上候

小生第二十三歌集『詩魂玲瓏』初校ができました。この中央部に昨年五月『歌壇』の「月耀變」三百首、これを書かせてくれた景山一男が「柗書房」の即出版元の責任者です。

二〇〇〇年二月二十八日（FAX）

鴻池歌会の二十三首（六人）に貴方自身の採点をお願いします。一〜二十三から、十と一で記入のこと。

お知らせ下さい。お返事お待申上候。

師より送られきた最後のFAXとなった。

⑩

踊り子の幾人鬼にさらはれし淡紅あはれ野邊のひるが

ほ

『新歌枕東西百景』

歌集『新歌枕東西百景』は一九七八（昭和五十三年九月）に刊行された。師の短歌と吉村正治の写真がコラボしている。私は神田神保町の奥野書店で購入した。

師は「密室紀行を楽しんだ」と前書きにあるように、地図の上で旅行し、歌を成したのであった。徳島県からは名西郡神山町の鬼籠野が選ばれている。そして詠まれたのが掲歌である。吉村の写真は踊りのポーズをとる少女が映し出されている。前のページには長野県上水内郡^{かみのみち}鬼無里村日影が採られ、「水芭蕉^{みなさ}神なき里のまひるまに一つかげし白きともし火」と詠まれた。写真は水芭蕉。鬼籠野と鬼無里の取り合はせも絶妙である。

この「野邊のひるがほ」の歌を含めて、二〇〇一年四月に刊行された『塚本邦雄全集』の第十五巻（月報・十五）にエッセイを載せた。

一九九八（平成十）年七月十六日、ゆまに書房より、塚本邦雄全集第一回配本（第一巻・短歌Ⅰ）の初校ゲラが宅急便で届いた。私が校正という作業に初めて係わるこの日は、雲ひとつない快晴で、庭には朝顔がみずみずしい紺

青の花を咲かせていた。

底本に関して「正字正仮名」のものは「正字正仮名」で、「新字新仮名」のものは「新字新仮名」と決定された。校正で基本となる漢字は簡野道明著『字源』（角川書店）に因ること、加えて活字が実用性をもって、読者に読まれるものでなければならぬことに考慮し、『字源』に因らない現代に対応できる漢字リストを作成。よって文藝春秋刊『定本・塚本邦雄湊合歌集』と若干異なる漢字を採用：などいくつかの約束事が、何回か修正されつつ送られて来た。新しく決定された漢字のリストが届くと、校正の途中でもまた初めからチェックしてゆく。この日から、行事予定のない休日のほとんどを校正作業に費やすこととなる。

第一巻の初校を経て、再校が終了したのは九月二十八日で、『水葬物語』の「未来史」から、『されど遊星』の「白^{シラレ}き柏楨の主題」までの歌群が、羽化した蝶のように手から離れていった。第一巻再校の終了以降、二箇月に一卷分を校正、即ち締切日となる。月に予定のない休日が四日として、二箇月で八日、午前六時から午後十時までを充てる。その一日でも潰れば平日帰宅後二時間ほどを割く。山越

え谷越え、悪戦苦闘の末、平成十三年一月二十八日、第十五巻目の校正が終了した。二年半の歳月をかけての完遂である。歌集、小説、評論のぎっしり詰まった全集の、ずっしり重みのある一冊一冊を両手で開けてゆく。喜びにも増して、私自身についた収穫の多さを思わずにはいられない。一生の財産である。

第四巻中、「新歌枕東西百景」所収の、

ほ
踊り子の幾人鬼にさらはれし淡紅あはれ野邊のひるが

の一首は、徳島県名西郡神山町鬼籠野の地名が詞書きで記されてゐる。神山町の隣には、私の故郷である美馬郡木屋平村という小さな村落があり、神山町と川井峠のトンネルでつながっている。村の実家には現在も母が独りで住んでおり、母に会いに車を走らせるときは、かならず神山町鬼籠野を経由することになっている。通り過ぎるとき、どこからともなくこの歌が脳裏を掠め、知らず知らずのうちに口遊んでいたりする。

私にとって貴重かつ忘れることのできない歌がもう一首ある。一九九〇年十一月刊行の『詞花芳名帖』の中の、

松蟲の聲を待つだにさびしきをおきたる露の數見よとこそ

の歌がそれで、私がまだ「玲瓏」に所属していなかったころ、書籍を通じて昵懇にしていたでいた、故・政田岑生氏より、塚本先生に一首を詠んでいただく企画があるから是非参加をと勧めて下さり、承諾した。その後、玲瓏に入会することとなる。私を塚本先生へと導いて下さったのは政田氏であり、私と玲瓏の橋渡しをしてくれたのがこの歌集であったことは間違いない。もしこの企画がなければ、玲瓏入会は果たし得なかったかもしれない。塚本邦雄の世界はまさに藝術そのものである。言語遊戯の樂園でもあり、全集には二十世紀後半を孤立無援に駆け抜けて来た、偉大な歌人の膨大な業績が凝縮されている。校正という重大な責務を完了した今、言葉にはならない喜びが瞳に溢れて止まらない。このような身にあまり仕事を与えて下さった方々に、心より感謝申し上げます。い。

全集の校正ばかりか、月報にエッセイを載せて頂いたご恩を一生忘れることはないだろう。

一九九〇（平成二）年一月一日に届いた師の年賀状をいつも手元に置いていた。師の心のやさしさが集約されたような素敵な文である。

舊臘阿波國名産の数々を忝く、地圖で美馬郡のあたりの地勢を眺めてみたら、梨子木・芋穴・調子野・猿飼・焼堂峠・剪字峠・深淵と南下して、赤帽子山塔丸等一七〇〇米級の高峰の東に「木屋平村」をみつめました。

太合・谷口・日々宇・下名・弓道等は字名でせうか。健脚なら行つてみたいやうな所です。

よい作品を澤山見せて下さい。期待してゐます。

師は一九九五（平成七）年十月と九七（平成九）年六月に来県された。二回とも同行させて頂いたが、体力的や時間的なこともあり、木屋平までは来て頂けなかった。残念なことではあったが、師は文化の森の徳島県立博物館に立寄られ、蝶の標本を覗きこまれていたのが印象的だった。

二〇二〇年五月に「塚本邦雄生誕一〇〇年・没後十五年」記念シンポジウムが東京で開催される予定だったが、新

型コロナウイルスの影響により中止になってしまった。楽しみにしていたがこればかりはどうしようもない。次年を心待ちにしたい。



在りし日の塚本先生と筆者

虹が見えた日

松尾 龍馬

1

最近、困っていることがある。知らない番号の電話がかかってくることだ。僕は電話番号を登録していない人は極力無視している。

スマホ画面に表示されている知らない番号。しかし、昨日と同じ電話番号だ。昨日だけではない。もう何度か見た番号だ。僕は観念して、電話を取った。

「もしもし。ああ、やつと出てくれた。久しぶりだな、ヤス。元気にしているか？」

知らない声だ。

「誰ですか。誰かと間違えているのではないですか？」

「平成六年四月十八日生まれ、徳島育ち。安田明宏。間違えてないだろう」

男の言葉によって耳鳴りが僕の肩や足に伝わってくる。

思わず、寒気がして震えてしまった。僕の名前は安田明宏で合っているし、生年月日や育ちも合っている。もしかして、興信所に僕の情報があるのだろうか。

「すいません、あなたはどちら様ですか？」

「そうだな。木下梨花と言えば、分かるかな？」

僕は驚き、スマホを持つ手が震えた。

「梨花のことを知っているんですか？」

「ああ、それに近いね」

「教えてください。梨花は僕の元恋人です。四年前、突然別れを告げられて音信不通になったんです」

四年前に梨花という恋人がいた。梨花との出会いは大学一年の時で、元々は友達関係だった。

僕が男と電話をしている真横でテレビの画面が光っている。テレビ画面から映し出されている横線が心電図のように乱れては端へ流れていく。

「ヤス。落ち着け。ともかく、思い出したか？ 俺のこと」

「いや梨花は知ってますけど、あなたは知らないですよ」

僕は今電話で話している男のことが誰かはどうでもよかった。男は「困ったなあ」と呟きながら頭でも掻いているのか、ポリポリという音が聞こえては「困ったなあ」と

繰り返して言っていた。

梨花は男勝りの性格で冗談も言えて、僕が唯一、関わる
ことができた女性だった。

「昔よく一緒に出掛けていたじゃないか。忘れるなんて、
ひどいな」

男がようやく喋り出した。過去、友人と一緒に出掛けた
ことはあるけど、いまいちピンと来ない。

「いや、思い出せないの、名前を覚えてください」

「福島泰河」

「知らないです」

僕の即答に男は「ははは」と返し、「そうか、徐々に思
い出していいはいさ」と言った。

男の声のトーンが大きくなったが、僕の気持ちは取り
残されたままだった。

「あの梨花は」

「そんなことより、ヤス。明日からお前の働く職場で働く
ことになったから、よろしくな」

そう言つて、男の電話は切れた。

僕は乗り遅れた電車を眺めるかのように耳からスマホ
を離していく。テレビに映し出された横線はいつの間に

か、画面いっぱいに広がっており、「ガー」という音とと
もに暗くなっていた。

福島泰河はシュツとした顔立ちで背が高く細身の男だ。
僕の職場で働くようになった福島は職場の人とすぐに馴
染み、真面目に仕事に取り組んでいた。声のトーンも張り
があり、頼りがいがあった。そんな福島に、好意を寄せて
いる女性職員もいるという噂だ。

僕は相変わらず福島のことを思い出せなかったが、彼
とは親しい間柄になっていった。休日二人でどこか出
掛けたり、仕事帰りに飲みに行ったりもした。

このよく出かけた展望台は橋の景色を眺めることがで
きて、周りには売店がある。僕と梨花がよく遊びに出掛け
ていた場所でもあった。

今日はお互い休みなので、僕と福島は展望台に行った。
展望台から見える景色は綺麗だが、急激な温度変化によ
り海全体がかすんでいた。霧のベールの間にある橋が蟹
気楼のように見えるのは、まだ僕の胸の中に梨花がいる
からかもしれない。

あのとき梨花と関わるたび、僕は梨花のことを好きに

なってしまった。友達関係だけじゃ物足りなくなり、僕は梨花に告白した。告白は成功したが、友達から恋人になるのは思った以上に難しかった。「今日から恋人」という固定概念が梨花の心情を変えていったのだ。今まで平気で話していたことが、徐々にためらわれるようになった。それから、お互いが妙にすれ違うようになり、梨花から別れを告げられた。「このままじゃ、私が私でなくなるかもしれない」という言葉を今でもはつきり覚えている。そして、梨花は巡礼に行くと言って、僕のもとから去っていったのだ。

福島は初め、梨花を知っているような口ぶりを見せていた。しかしその話になると、思わせぶりの発言をして僕を困らせた。

展望台にあるレストハウスでいつものように福島と食事を取っていた時、お遍路さんが休憩していた。

「巡礼って大変そうやね」と僕が言うと、突然何かを思い出したかのように福島は口を開いた。

「あれだろ、切羽詰まったお願いをするためにやるんじゃないの?」

「お願い?」

僕がキョトンとした顔で言うと、「なんか、聞いたことがあるんだよ。巡礼をしたことで、自分の中にある本当の思いがわかるって」

「梨花も、もしかしてそれで行ったのかな。巡礼」

僕はコップの中に映る自分を見て、ため息を漏らした。「生きていると、いろいろあるからな。切羽詰まった時に、何かにすがりつくこともあるし、必死だったんだろう」

「僕じゃ、だめだったのかな」

いつも関わるたび、何も言わず、お互い分かり合えていたあの頃。梨花が僕を恋人として関わり出してから「このままじゃ、だめだ」と、梨花自身が見抜いていたのか。

「まあ、そんな変な思い出などに浸る話はやめようか。最近、どうだ。俺が紹介した人は」

福島はそう言って、笑ってみせた。

福島と仲良くなって分かったことがある。それは福島が世話好きな一面があるということだ。

僕は以前、街コンに参加した。街コンで出会ったとある女性と仲良くなり、連絡を交換して関係を深めていった。しかし、その女性はねずみ講だった。僕はその女性に騙され、お金を失ってしまった。

元々僕は女性と関わる免疫耐性が少なく、梨花以外まともに話したことがないことから、「恋」という名のマジックにかかってしまったのだ。その日以来、女性のことが信じられなくなってしまった。

日々暗くなっていく僕に、福島はある一人の女性を紹介してくれた。名前はワカメさん。「若」、「女」と書いてワカメという。世の中には珍しい名字があるもんだ。

しかし、ワカメさんには秘密がある。実は女性でなく、男性なのだ。

「綺麗じゃん」

福島はのんきにそう言って、デザートリングを食べて始めた。

「いろいろな気を配ってくれる若女さんは素敵だと思うけどな」

福島はそう言って、微笑んだ。

あのとき、若女さんは何やらバッグから化粧品、ウィッグなどの女性用アイテムを取り出し、目の前に鏡を置いてメイクを始めた。

若女さんは自分の肌に透明感を出すためにベースメイクを行った。眉毛、目元、口元などにマスカラやら、アイ

ブロウなどを使って、あつという間に仕上げた。真っ白で透明感のあるツヤ肌。ナチュラルな平行眉。そして、じんわりぼかしたラインとキラキラアイシャドウが特徴的だった。一応、女性の顔立ちのようだった。若女さんはメイクアップアーティストの仕事をしていると言っていた。

あのとき、若女さんが言ったことが耳に残る。

『今日から私、シノブとしてお願いいたします』

『シノブさん？』

『私、本名は若女忍と言います。付き合いたての二人にとって、まず大事なのは、相手を知ることです。これから思いもよらない感情を抱かせてください』

『どういうことですか？』

『ヤスさんに本当の恋人ができるまで付き合う練習をするんです。付き合うというのはお互い、自分のペースに合わせて付き合い方を模索しながらさぐっていくものです。その間、私はヤスさんと呼ぶのではなく、明宏と呼びますので』

今でも思い出す、その言葉。頭の中で次から次への展開

についていけない僕は、水を一気に飲み干した。

僕はアトピー性皮膚炎が治ったら恋愛しようと考えていた。痒みや痛みで苦しんでいる姿を恋人に見せるのは、申し訳ないと思ったからだ。過去に、数え切れないほど多くの病院に行った。高額な民間療法や漢方も試した。しかし、痒みや痛みは変わらず、お酒を飲んだような紅い皮膚や象の皮膚のような硬い皮膚のままだった。今までは「病気のせいで、恋愛できない自分」という固定概念をインプットしていたが、日々を過ごしていくうちに、病気の人も恋人がいますと分かったのだ。大学生の頃まで女性に対しての免疫耐性がなかった僕は、恋愛を知らないやつになってしまった。

若女さんは僕の過去の話聞いた途端「良ければですが、ヤスさん、恋愛の予行演習しませんか？」と提案してきたのだ。

確かに「いいな」と思った女性は大抵彼氏がいるのが現実だ。恋愛にも「上級国民」みたいな見えない身分制度があるらしい。

「大人の男性である若女さんが真面目な顔で正論を言っていたけど、説得力があるような、ないような」

僕はテーブルに肘をついて、若女さんとのデートのことを考える。

「今週の日曜日、初デートだろう。頑張れ」

福島がハッパをかけてくる。

若女さんが言う「男女の付き合いはお互いが模索しながら付き合い方を探す」ということには、なんとなく納得している。

窓ガラスに映し出される大きな岩に、太陽の光が道を作っていた。

シノブさんに会ってから数日後、初デートだけど、別の意味でドキドキしている。もちろん、デートは誰もが楽しめ、ウキウキ気分になる。僕の場合はデートというよりも男性と遊びに行くという感覚になってしまった。

シノブさんは元々丸みを帯びた優しい顔立ちで、男性なのに女顔で涼やかな顔。まつ毛が細いし、かつらやウィッグを付ければ、可愛く見えるので「本当に、男性なのか？」と思ってしまう。

駅の玄関口が見えてきた。駅周辺は行き交う人々に旅情を感じさせ、駅東口を背に立つ侍の銅像が凛々しい表

情で人々の旅を見守っている。太陽の輝きが雨雲を遠ざかせ、梅雨明けの風が水たまりを大地へと染み込ませていく。

玄関口に辿り着くと「明宏、こっち」と後ろから聞き覚えのある声がした。振り向くと、そこにシノブさんが立っていた。僕と目を合わすと同時に、おじきをした。

「どうしましょうか。シノブさんは行きたいところありますか？」

「シノブでいいわよ」

「はい？」

「そんな呼び方と敬語じゃ、よそよそしいでしょ」

シノブさんが真面目な顔で言うので、僕は戸惑った。

「えっと、あの、シノブはどこに行きたい？」

シノブさんに促され、言ってみただけ、複雑な気持ちだった。

「そうね。ここに行きましょう」

シノブさんは駅前近くのゲームセンターを指した。最近リニューアルオープンしたばかりのゲームセンターは、家族やカップルで賑わっている。

「ああ、そうだな。行こうか」

やはり、どうも調子が出ない。そういうものだろうか。

ゲームセンターに入り、UFOキャッチャーやリズムゲームなどの様々な遊具を散策した。エアコンが効きすぎているのか、僕は頭の上から足先まで冷えるのを感じた。

「ゲームセンターなら、これでしょ」

「あの、これって」

「そう、ブリクラ」

ゲームセンターの一角にある様々なブリクラ機種。周りを見ると、カップルや中高生の女子で賑わっている。体を機械にさらすと、言葉では表現できないほどのステキな自分に変えてくれる夢の遊具。ひとときの空間の中で映し出される写真は、思い出まで染めてくれる青春のページを作り出すアレ。

「二人で取るんだよね」

僕は何かの間違いでは無いかなと思いつつ、恐る恐る言った。

「そう。当たり前でしょ。それとも、私と一緒に撮りたくないの？」

シノブさんはニヤリと笑った。

「ばかな」

辺りが遠く見える。ゲームセンター内の光が乱反射して僕は立ち止まったままだ。

僕はプリクラの前に置いてある看板を指差した。「男性のみの入場、または、一人での入場はご遠慮ください」と書かれていた。

「ええと、これは私に対する、あてつけ？」

僕の指さす看板を見て、シノブさんは不服そうに言った。

「だって、看板に書いてあるから」

「そんな、ひどい」

「ごめん。酷いこと、言って」

僕はどうしていいかわからなかった。思わず、頭を下げ、謝ってしまった。

「もういいよ。今さら。付き合いたての私たち二人にとって、まず大事なのは相手を知ることでしょ」

シノブさんは開き直ったかのように言った。シノブさんの声は濁りのない透き通ったような、綺麗な高音をしていた。

「う、うん」

僕は「この人の声域はどうなっているんだ」と頭の中で思いながら、頷いた。

「じゃあ、そうと決まれば、入るよ」

シノブさんは僕の背を抱くようにして、可愛い女性が写っている機種へ、ぐいぐいが入っていった。

レンズ越しに映し出される表情は、「出来栄えのいいひと」の仮面を被っているようだ。シャッター音とともにシノブさんは表情を変えていく。

最新のプリクラは写りが綺麗だった。ほうれい線や肌荒れなどを自然にカバーして、肌ツヤや立体感を表現した。おまけにコースが二つあり、背景がピンク、白の二色を選べ、その日のファッションやメイクに合わせる機能があった。僕は、おでこの横シワが取れて綺麗な顔になっていた。

ゲームセンターを出ると辺りは暗くなっていた。

「こうやって、ゲームセンターで他愛のない会話をしたり、プリクラで撮ったり、思い出を作ることとは大事なんだよ」

「確かにそうだけど」

そう言って、僕は足元を見た。

「明宏は、何事も楽しむというのを忘れているようね」

シノブさんはそう言って、僕を見た。

僕は心の底から楽しいと思える、ときめきが最近ない。

シノブさんはそんな僕を見抜いていたのか。

僕と梨花が恋人関係になる前、二人でご飯食べに行ったり、遊びに行ったりしていた。あのときは心の底から楽しめた。何気ない冗談も言えた。まるで幼い頃のように「仲が良い存在」になっていたから。

2

季節だけが巡っていくこの世の中。移り変わる四季に人々は馴染もうとしていた。木枯らしが呼吸するたびに、僕のぬくもりが吹き飛ばされる。更衣をする暇もない日々が続いていた。

福島の家に行くと、テーブルの上に雑誌の切れ端や広告が散乱していた。その隣にルーズリーフが置かれており、どこに行くか、何をするのか、お金はどれくらいかかるのか、色々と書かれていた。

「おう、来てたか」

福島はばたばたと動いており、僕が来ていたことに気付いていなかったらしい。

「忙しそうだね、部屋が汚いというか」

「ほほー。さすがヤスやな」

福島はテーブルの上に散乱していた物の中から何やら出してきた。

「何これ？」

「これな、お菓子の懸賞に応募して当たったんだよ。すごいだろう。あのテーマパークが無料でいけるんだぞ」

僕は福島から封筒を受け取った。封筒を開けると○○テーマパークのフリーパスのペアチケットが入っていた。

「へえ、良かったじゃん」

「何かの縁かもね。まあ、応募しないと当たるのも当たらないのもわからないからね」

「まあ、そうだね」

そう言いながら、僕がチケットを封筒に戻して福島に渡した。

「さて、ヤス君。このペアチケットですが、もしあなたがこれを手にするとしたら、一緒に行きたい人は誰ですか？」

福島は封筒をひらひらしながら、微笑んでいる。

「ええと」

僕は腕組みをして考え始めた。それと同時に福島は「チツ、チツ、チツ」とカウントを取り始める。

「ほらほら、どうした。ヤスの身の回りにいる、気になる人で行けるんだぞ」

以前、福島が「人というのは『その人と時間を共有したい』と思うようになると、その人との距離感を縮めたくない」と言っていたのを思い出した。

僕は頭の中に、苦い思い出が染み出してきて、センチメンタルな気持ちになっていく。

「時間が迫ってきてるぞー」と福島が無邪気な表情で、僕を焦らせる。僕はそのまま足元を見ていた。

「おい、おい。黙ることないだろう、ヤス」

僕はそのまま、黙っていると、福島はつまらなさそうな顔になった。

「そんなんじや。梨花が悲しむぞ」

福島の言葉に、僕は俯いていた頭を上げた。

「福島。結局、お前は梨花と、何の関係があるんだよ」
相変わらず、福島と梨花の関係は分からないままだっ

た。もういい加減に本当のことを言ってみようと思った。僕は溜まっていた感情が爆発するように、声を張り上げていた。

福島は一瞬驚き、封筒が手元から落ちていく。スローモーションのようにひらひらと舞いながら、床に落ちていった。

「ご、ごめん」

僕はふと我に返り、床に落ちた封筒を拾い上げ、福島に渡した。福島はそれを受け取り、「困ったなあ」と呟きながら言葉を探しているようだ。

「ちよつと、ムキになり過ぎた」

僕が言うと、福島は僕の肩をポンと叩いた。

「きつとヤスはまだ、共有したいほどの好きな人が見つかってないんだな」

「ああ、そうかもしれない」

「焦ることないさ。自分だけでなく、相手を大切にして過ごしていくことが、今のヤスには必要だからね。そのうち、見つかるとよ」

福島はそう言って、僕を元気づけた。そんな風に人を励ます力を持っている福島。彼の周りに人が寄ってくるの

も当然だ。

「俺は一緒に行きたい人がいるけどね」

僕はすぐにその答えが分かった。

「城島さんでしょ」

「ありゃ、どうして分かった？」

福島と会った時に、城島さんの話題が出るから僕でも分かる。福島は僕と同じく、「生きてきた中で恋人が今までいない」と話していた。月日は流れ、福島に春がやってきて、とうとう恋人ができたのだ。

名前は城島恵津子と言い、福島は「恵津子」と呼んでいる。僕も職場や福島の家で何回か見たことがある。

城島さんは、背が高く、細く、体や顔のすっきりした人だった。長い髪を束ね、しつとりとしたツヤのある肌。服装はホワイト系を意識しているのか、清潔感があつて綺麗だった。笑ったときの顔が口角が上がって「ばあつ」と明るくなる。

福島は海のゴミ拾いだとか、病院に来ている患者さんのために日曜大工で椅子を作るとか、ボランティアに近いものに参加していた。その時に城島さんと一緒になる機会があった。その結果、お互いが惹かれ合ったのだ。

「まあ、ここには行かないけどね」

福島は舌をペロツと出して、ペアチケットの入った封筒を僕の手元に置いた。

その期間中は、福島が城島さんと二人で国内旅行をするので、僕にペアチケットを譲ってくれたのだ。

「いいよ。僕は行く人がいないから、他の人にあげたほうがいいよ」

「はあ。そんなんだから、ヤスはヤスなんだよ」

「僕は福島と違って整った顔してないし」

「とにかく、これはヤスにやる。俺はヤスにも笑顔になってほしいんだ」

僕は城島さんが言っていた言葉を思い出す。「泰河って、すぐに動こうとするでしょ。不器用だけど、必死に自分の思いを形にするところが素敵かな」と。

城島さんはそんな福島の行動のよさに惚れたのだろう。か。

僕は優しくするだけで相手に気持ちが届くと思っていた。しかし、年を重ねていくにつれて、相手のための行動も、仇となって戻ってきた。次第に「優しさとは何だろうか？」と思うようになり、ブルーな気持ちになっていった。

「福島、どうしてここまで、僕のためにしてくれるの？」

「そりゃ、俺にとって、ヤスは特別な人だからだ」

福島はきっぱりと僕を見て言った。まっすぐに大きな瞳だった。梨花もまっすぐに大きな瞳が綺麗だった。

梨花と恋人関係になって、梨花の唇に触れたときのことだ。ほんの数秒だが、柔らかくて、暖かい感触が、僕の心や身体をざわめかせた。思わず、心臓が飛び出しそうになった。

梨花は僕の反応を見て、何故か戸惑いを感じていた。いつもなら、梨花は僕をからかうような素振りを見せたり、冗談を言って、背中を平気で叩くのだが、黙ったままだった。

僕は福島から受け取ったペアチケットを再び見てみる。一緒に入っていた広告に映るバンジージャンプの写真が目に入ってきた。

吐息が冷たくないのは、南国の楽園のせいなのか。僕はこの日に限ってコートを着ていたが暑くて脱いでしまった。

色々と考えた結論から、僕はペアチケットを使ってシ

ノブさんと〇〇テーマパークに行くことにした。

入り口ゲートで待っていると、シノブさんがこちらに向かってきた。

シノブさんは「デートに合わせたコーディネートを考えた、デートプランなどを丁寧に組み立てていかないと、その後の進展がない」と言っていた。

僕はとりあえず、美容院で髪を切ってもらってセットした。肌はあまり綺麗ではないけど、スキンケアもした。

「今日は福島さんのおかげやね。『ありがとう』と言っておいてね」

そう言って、シノブさんは微笑んだ。

シノブさんもだんだん、メイクも上手くなってきて、会うたびに綺麗になっていく。そして僕はシノブさんの人柄の良さに惹かれていった。

「分かった。言っておくよ」

ゲートを抜けると、南国を思わせるような光景が目に入ってきた。ヤシの木の葉から、なびく暖かい風が皮膚に伝わってくる。サンバの音楽が聞こえてくると、人々は今にも踊りだしそうな、軽快な足つきで移動していた。

ジェットコースターで叫んで、空中自転車で栄光の架

け橋の景色を楽しんで、ゆったりとした時間を二人は過ごした。

シノブさんは、「こうやって、他愛のないことでも、思いう出を作るとは大事なんだよ」と言っていた。

梨花の顔がふと出てくる。僕と梨花が恋人関係になる前は、何気ない日常でも楽しかった。恋人という固定概念が無かったからか、お互いが意識せずに一緒に過ごせたと思う。

時間を忘れて、楽しんだ僕とシノブさん。ゲートを出た時、シノブさんは突然立ち止まった。

「ヤスさん。今日で私の役目は終わりです。色々ありがとうございました」

シノブさんは元の口調に戻り、頭を下げてお礼を言った。

「こちらこそ、ありがとう」

僕もお礼を言ってシノブさんの手を握った。

シノブさんに会ってから半年経っていた。シノブさんとの男女の付き合いは結構大変だった。距離感が近すぎないように、遠すぎないように、関わってきた。

敷地内を歩いていると、友達や家族連れ、カップルなど

様々な人が行き交っている。

「社会に出て働き始めたなら、出逢いが少なくなるんだぞ」、「今まで、付き合ったことがないの?」という風評被害の不安感から、僕は恋人が欲しかった。自分のことを思ってくれるパートナーがいることで安心したかったのだ。

シノブさんは一応男だ。しかし、関わるたびに、男女の付き合い方だけでなく、人間関係についての素晴らしさを改めて実感できた。人は一人でも生きることにはできるが、人と関わることで生きる意味は大きく変わっていくと思う。

僕の心がもう少し豊かであれば、今でも梨花と会っているのかもしれない。

「役目が終わっても、また会おうよ。時間が合えば、ご飯食べたりね」

「それはできません」

僕の言葉にシノブさんはきっぱりと言った。

「どうして?」

「ヤスさんと関わっていくたびに、自分の本当の役割が分かったからです」

「どういうこと?」

「ヤスさんは、私のありのままの姿で関わって頂いたからです」

「シノブさんはシノブさん、でしょ」

「本当にヤスさんは、優しい人ですね」

シノブさんは僕の顔を見たあと微笑んだ。

「いやいや、そんなことないですよ」

「そうでなければ、半年という期間、長く関われないですよ」

シノブさんはそう言って、髪を指で分けた。髪が揺れるとシャンプーの香りが風につれて流れていく。

「さよなら。ヤスさん」

シノブさんは僕の元から遠ざかる。僕が「待つて」と呼びかけても振り向かないが、シノブさんの背中が受け止めてくれていた。

僕は追いかけようと思ったが、足が思うように動かない。辺りが暗くなるとともに、シノブさんは徐々に見えなくなった。

3

雲行が怪しくなると緑の生い茂る島々が見えづらくなる。険しい石段を今日も僕たちは登ってきた。三百六十度、どこを向いても素晴らしい景色が待っていたはずのオーシャンビューは、霧のベールに包まれたままだ。

「まあまあ、これ食べて」

福島はレストハウスにあるソフトクリームを二つ買ってきて片方を僕にくれた。

「ありがとう、福島」

僕たちは景色が見える大きな岩に腰かけて、一緒にソフトクリームを食べた。

ソフトクリームはかわいらしいピンク色をしており、ほんのりと桃の香りがする。僕はプラスチックのスプーンでクリームをすくって口に入れる。桃の甘みが口いっぱいに広がった。

「ヤス、付き合うというのはどんなことか分かっただろう」

「ああ。梨花といい、シノブさんといい、いなくなると寂しい」

甘いスイーツがひんやりと身体に染み渡るが、心は空っぽのままだ。

僕とシノブさんが〇〇テーマパークに行つて以来、シノブさんとはまったく会つておらず、音信不通の状態だった。

「半年もてば十分だろう」

そう言つて、福島はスプーンを使わずにクリームを口にほおぼつた。

福島が福島さんと出逢つてから一年経ち、恋人になつて半年以上経っている。次第に福島と福島さんは恋人以上の関係になり、結婚することになった。福島は一年前より大人びて見えた。しかし、福島は結局誰なのか。梨花とどう関係しているのか分からないままだった。

クリームが溶けて、僕たちの座っている岩に落ちると、雨が降つてきた。人々は近くのレストハウスに駆け込み、僕たちも残りのクリームを一気に食べて、レストハウスに向かつて走つた。

雨は次第に強くなつていく。僕たちは橋の景色が見えるテーブルに座つた。

辺りはぼんやりしてよく見えなかった。レストハウス内はスマホを見ている人もいれば、冷えた身体を温めるためにホットドリンクを飲んでゐる人もいた。

「どうする、もう帰る？」

「いや、しばらくここで過ごしてもいいだろう。今、ここを出ても渋滞するだけだ」

「そうだね」

福島の言う通り、今出ると雨に濡れて風邪をひく可能性がある。僕たちはレストハウス内で過ごすことにした。

「こうやつて、一緒に出掛けるのも、久しぶりだな」

「そうだね」

「そうだ。ヤスがよく言っていた人つて、誰だっけ」

「ああ、梨花だよ」

福島は顔を上げて天井を見つめていた。何か言葉を探しているようだ。

「何だよ。自分から言い出して。何か言つてよ」

いつもの福島は自分のペースで話し出すくせに、なかなか口を開こうとしなかった。僕がせかすと福島の表情が重々しくなつていった。

「俺が、あの、恵津子と、結婚することは、知っているな」

「ああ、知っているよ。それと何か関係あるの？」

「うん、関係あるかもしれない」

福島は僕を見たと同時に、組んだ足を元に戻して、テー

ブルの上で手を組んだ。

「梨花は元々、俺の、ええと」

福島は言葉の頭の中で組み立てるようにゆっくりと喋り出した。

「梨花は」

福島は深呼吸して再び口を開いた。

「えっと、あの、むか、昔、実は、俺、俺なんだ」

「そんなことないでしょ」

僕がそう言って怪訝な顔を見ると、福島は自分のスマホを操作し始めた。僕は福島のスマホから映し出された写真を見て身体が固まった。

衝撃的な光景を目の当たりにして、眼球が飛び出すようだった。もう一度、写真を見つめ、僕は言葉を失った。

梨花と僕が数年前に展望台で撮ったツーショット写真。

僕はすぐに自分のスマホの写真フォルダーを確認した。

全く同じ日に撮り、背景や立ち位置も何もかも一緒の写真。

「俺が恵津子と結婚し、正真正銘の男に生まれ変わるため、ヤスには言っておく必要があった。でも、なかなか言うタイミングが分からなかったんだ」

福島は顔を上げないまま言った。表情も声も男なのに。僕には福島が、あのときの梨花に重なって見えた。

「若女さんが音信不通になったと聞いて、もしやと思ったんだ」

福島は僕の顔を再び、見つめた。

「本当の自分と役割を認識して、生まれ変わるために去っていったんだと思う。ヤスがあるのままの若女さんに接してくれたおかげだね」

「シノブさんはシノブさんでしょ」

「ああ、そうだ。でも、心と身体はそうじゃないんだ」

「心と身体？」

「心は女性、身体は男なんだ」

女性なのに、自分は「本当は男なんだ。男として生きるのがふさわしい」と考えたり、男性なのに「本当は女として生きるべきだ」と確信する現象があると僕はテレビやラジオで聞いたことがあった。

梨花とシノブさんも、このような性別の不一致から悩んでいたのかもしれない。

「あのとき、俺とヤスが恋人関係になった。でも、俺は、ヤスと恋人じゃない関係でいたかったんだ」

僕は優しまかせの愛情では、誰にも負けない自信があった。それが絵になる恋人同士だと思っていた。しかし、それがあのときの梨花を気疲れさせていたとは。女の心ではなく、男の心として。

「あの頃のヤスは、俺を愛することに精一杯に見えた」

「ああ、梨花を特別な人にしたかった」

「それはそれで嬉しいよ。でもね。あのとき、俺は身体だけが女で、心まで女になれなかった」

あのとき梨花に棲みついた、心と身体と切なさが徐々に傾き始めたことで揺らいでいたと思うと、僕は胸が痛くなった。

「あのとき、ヤスから『綺麗だね、可愛いね』と言われるたびに、不安になっていた。この身体のざわめきを抑えようと精一杯だった」

「梨花は本当に綺麗で、可愛かった。他の男性から梨花を取られる可能性があるのではないかと思ったんだ」

僕はそう言うのと、福島は腕を組んだ。

「そうか。自分で言うのも、あれだけだな。俺、何人かの男から、アプローチされたこと、あるんだ」

福島は苦笑いを浮かべていた。僕はどう反応したらいい

いかわらなかつた。

「結果、誰と付き合うこともなく、全部断ったよ。だって、みんな、俺を女として見るもん」

「そりゃ、そうだよ。普通の男なら、誰もが想うけど」

必死に何かを手に入れようとすることは度が過ぎると相手が見えなくなり、距離を置かれる恐れがある。そして、自滅の恐れがある。だから、あのとき、梨花を自分の物にしようと、梨花の気持ちを考えなかった。結果、梨花は僕のもとから姿を消した。

「雨が止んできたね。外に出ようか」

福島がそう言っ、腰を上げると同時に僕も腰を上げて、レストハウスを出た。地面には水たまりが多くできている。鏡のように、僕と福島の姿が映っていた。

「ヤスと別れてから、俺は本当に巡礼したんだ。四国八十八ヶ所をね」

福島は再び、スマホを操作し僕に写真を見せた。一番から八十八番までのお寺の写真だった。お寺の正門と一緒に写っている梨花は、お遍路さんの白衣がよく似合っていた。

「長く、険しい、道のりだった。この先どうなるか、分か

らないまま、一人で歩いた」

福島言葉に一つ一つの重みを感じて、僕は身体が熱くなった。

「巡礼中、足を怪我したり、熱中症で倒れたことが、何度もあった。そのときにな。ヤスのことが頭の中に、度々よぎった。ヤスとはもう、縁を切ったのに」

福島は苦笑いし、頭をポリポリと掻いていた。

「でもな、思ったんだよ。残り十ヶ所のところで。ヤスの恋人関係の期間よりも、俺をありのままの姿で関わってくれた期間の方が長かったことに気付いたんだよ」

僕はシノブさんに言われた言葉を思い出した。「ありのままの姿で関わる」という言葉。身体は男だが、心は女のシノブさん。身体は女だが、心は男の梨花。外見の強さではなく、中身の強さで関わってくれたことに、心を動かされたのか。

「縁は切れても、俺とヤスの絆は切れてなかったんだな。だから、新しい自分に生まれ変わって、もう一度、ヤスと会うことを決めたんだ。今度は男女とかそんなこと関係なく、一人の人間として」

福島は次々とすごい事実を淡々と話す。僕は衝撃的な

事実心臓がどきどきしている。

「あそこに、虹が見えるだろう」

確かに虹が見える。それは鷺が翼を広げているように二つの虹が弧を描いていた。

「ヤス。虹がなぜ見えるのか、知っているか？」

僕は戸惑った。

「いや、分からないな」

「太陽の光と水、俺たち人間の眼だ」

「そうなんだ」

福島が言うには、この三つが無ければ、虹を見ることができないと言うのだ。

「色々あったけど、俺たちはその眩しさに目を背け、違う角度で見ることができている。悲しみや喜びなどの涙を通じてね。だからこうして、俺たちの眼に『様々な経験』という名の虹を映し出してくれる」

二つの虹が鷺の姿になり、七色の翼をはばたかせていく。霧のベールが吹き飛ぶと、橋が見えた。

「長い話になったね。結局、言いたいことは心や身体の形が変わろうが、あるいは違って、俺とヤスは絆で結ばれているということ。そして、俺にとって、ヤスは特別な人

だということ」

福島は笑顔を見て、僕も微笑んだ。

「ありがとう。梨花。いや、福島」

福島は僕の背中を叩いた。四年前。あのときと同じぐらいの強さだった。

「ああ。明日、仕事やな。頑張ろうな」

「ああ、そうだな」

僕の横にいるのは梨花であり、福島でもある。しかし、今は関係無いことだ。

鷺は役目を終えたかのように、遠くの空へ羽ばたいていった。晴れ渡る青空に、僕たちそれぞれの明日をのせて。



かずら橋

徳嶋ダイスケ

自分で言うのも恥ずかしいが、私は今時珍しい厳格な父親だった。

自分の父親が気弱で、いつもお袋の尻に敷かれているのを見て情けなく思っていた反動なのかもしれない。

とにかく娘や息子に対しては微塵も隙を見せまいと努力を重ね、「威風堂々の親父」として接してきた。運動会が迫れば、保護者対抗リレーに合わせて密かに特訓をし、いざ「勉強を教えて欲しい」と頼まれたときのために勉強をするともに塾の講師をしている甥っ子に頼んで、教え方の勉強もしている。

それほど徹底して「完全無欠の親父」「威風堂々の親父」を演じてきた。

時折、妻の尚美は「無理し過ぎなんちゃうん？」と心配してきたが、父親というのは子どもの手本であり続け尊敬され続けなければならない存在なのだ。

その信念を変えるつもりは毛頭なかった。

だがそれも十年目にして終焉を迎えようとしている。

私は愛車のワゴンRのハンドルを握りながら、心の中で大きなため息をついていた。助手席の尚美は何も言わずに窓の外を眺め、後部座席では十歳の長女・幹子と八歳になったばかりの長男・武が何やら言い合いの口げんかをしていた。

私の運転する車に乗りながら、子どもたちが口げんかをするなど、今までなら言語道断だった。たとえ喧嘩しそうな雰囲気になったとしても、すぐに私が一瞥するだけで強制的に終わらせてきた。

それほど私は一家の大黒柱として、絶対的な存在だったのである。

しかし、今はそれをする気力もなく、子どもたちは遠慮なく口げんかをしているし、尚美はそれを放置してぼんやりと外を眺めている。

これには理由があった。

今から遡ること三時間前のことだった。

私たち一家は尚美の実家がある西祖谷を訪れていた。

優しい義父母に、陽気な義弟、仲良しの従兄たちに遊んでもらって大はしゃぎの幹子と武。誰に吹き込まれたのか知らないが、「お父さん、かずら橋見てみたい」とせがみはじめたのである。

祖谷のかずら橋といえ、徳島県屈指の名所だ。毎年大勢の観光客が訪れ、外国からやってくる方も多いと言う。

しかし、私は気乗りせず、「うむ、しかし、少し遠いけんなあ」とつぶやいた。

それを聞いた義弟が、

「兄さん、何言うとんで。こっからやったら車で二十分くらいで行けるで。すぐ行けるって」

と余計なことを言った。

尚美も尚美で、「そうよ。何なら私も運転するけん」

と何故かやたらノリノリだった。さらに義父の「ほれ、清さん、連れてやりい」という後押しに、渋々祖谷のかずら橋へ行くことになってしまったわけである。

私がかずら橋に行くことをごねたのは、別に運転距離を気にしたからではない。

かずら橋の存在そのものが問題だったのだ。

子どもたちは当然として、妻である尚美にさえ隠していたのだが、実は私は超下級の高所恐怖症だったのである。

幽霊や妖怪と言った類も、蜘蛛や蛇などの生物も、狭いところも暗いところも、背中にカラフルで敵めしい画の入った人たちも、まったく怖くないのだが、高いところだけではどうしても恐ろしくてたまらないのだった。想像するだけで震えるほどに怖いのである。

これまでも家族にバレそうになったことは何度もあった。

遊園地などはその筆頭で、観覧車もジェットコースターも、「そんなものは子どもの乗り物だ」と強引な理屈で断固拒否して辛うじて乗り切った。

しかし、かずら橋にいけば、渡らないわけにはいかない。

かずら橋は高さ十四メートルもある。

十四メートルといえば大体四階建ての高さくらいだろうか。冗談ではない。私は二階建てのペランダに立つのでさえ勇気を振り絞らねばならないのだ。

かなり憂鬱な気分ですり、義弟のいうとおり二十分

程度で駐車場に到着してしまった。配置された小さなバケツのなかに駐車料金三百円を入れ、思わず手を合わせてしまう。

これから体験するであろう恐怖に対する思いが、無意識のうちに神仏へ気持ちをすがらせたのかもしれない。

それを見た尚美が、

「あなた？ お賽銭じゃないんよ？ 何しとん？」

と言っておかしそうに笑った。子どもたちも珍しく私がすつとばけたことをしたので、小首をかしげて不思議そうに眺めていた。

そこからの道のりは、まるで処刑台へと向かう死刑囚のように重たい足取りだった。一方、尚美は何が楽しいのか鼻歌を口ずさみながら、軽快に歩いている。そして私に向かって、

「ほな、私、先に行ってチケット買ってくるけん、ふたりのこと見とつてな」

と言ってチケット売り場まで駆けていった。私は呆然と「ああ」だか「うう」だか感情のこもらない返事をしていたように思う。

「あつ、橋が見える！ あれがそうなんかなあ」

はしゃぐ武と「きつとそうよ。ホンマに吊橋なんやなあ」と笑う幹子。

そして、それを極力見ないようにする私。

「いやけいおおはし」を楽しそうに手をつなぎ歩いている幹子と武。武が立ち止まり、石碑を指さして「粉引き節ってなんなん？」と訊ねてきた。正直、気持ちはそれどころではなかったが、我が子がせっかく興味を持って質問しているのだ。親として出来る限りの答えを教えてやらねばならない……。

「そ、それはな……」

と答えようとしたとき、ふいに幹子と目があつた。何かを訝しむような目である。

「なあ、お父さん、何か変やな。どつか具合悪いんちゃうん？」

ベテラン刑事のような鋭い洞察の眼差しで私を見据え、聞いてきた。

「いや、ちょっと疲れたんかもしれん。でもいけるわ」そんなやり取りをしていると、待ちくたびれた様子で尚美が「何しとん、はよ来いって」と我々に手を振りながら呼びかけてきた。

なんだ。なんなんだ。ミッキーマウスと記念撮影したときでさえそんなテンションではなかったはずだ。お前の中では天下のミッキーよりもかすら橋なのか。

「お母さんが呼んどおけん急ごう！」

武と幹子が私の手を取り、引っ張るように駆け出した。仕方なく子どもたちに合わせて私も走った。

尚美が「はい、チケット持つて」と私たちにチケットを手渡す。喜ぶ子どもたち。だが、私には地獄への片道切符にしか見えなかった。

「僕、一番乗りじゃ！」

「あーずるい！」

と武と幹子が何の躊躇もなく、我先に、とかずら橋を渡り始めた。

「あつ、ふたりとも気をつけるんよ。落ちんようにちゃんとゆっくり行かん」と

そういうと尚美もふたりの後を追うように渡り始めた。

だが、いつまで経っても私が続く気配がないのを不思議に思ったらしく、尚美が振り返って、

「ほら、あなた。行こう。ふたりとも渡りきってしまうよ」

とにつこり笑った。本来なら、子どもたちを除いた世界では一番愛すべきパートナーの笑顔であるが、この時ばかりは地獄から手招きして。ほくそ笑む悪魔か死神にしか見えなかった。

彼女のセリフもまるで三途の川を渡らせようと、家族の姿をした悪い幽霊のように思えた。

無論、そんなのは恐怖心が見せる幻にすぎず、尚美や子どもたちにそんなつもりは微塵もない。そんなことはわかっていた。頭では理解していた。

だが、肝心の体が思うように動かないのだ。足はがくがく震え、全身から脂汗が滲み出てくるのがわかった。目の周りはチカチカと点滅するようになり、わかりやすく言えば貧血で「ああ、そろそろ立ちくらみが来て、倒れるなあ」と思うくらいのギリギリの状況である。

「あなた？」

「お父さん！ はよう、はよう！」

不思議そうに振り返る尚美とやたら急かす武。そして、もう半分以上渡りきったあたりで私を振り返り、何かを探るような目をして見つめる幹子。六つの眼差しに半ば強迫めいたものを感じつつ、引き寄せられるように橋に

第一歩乗せることになった。

もう行くしか無い……。

多分、幹子は怪しんでいる。もしかすると勘づいているかもしれない。何しろ賢く鋭い子だからな。

これ以上不信任を抱かせる訳にはいかない。何、問題ない。かずら橋は四十五メートルの距離だ。学生時代には五十メートルを六秒台で駆け抜けた私にしてみれば、大した長さじゃないはずだ。

それにこの橋を構築するシラクチカズラにしたって、三年ごとに架替えするらしいから安全面だって問題ない。大丈夫。大丈夫。大丈夫。ゆっくり行けばいいんだ。

進みさえすれば良い。まるで景色をのんびり眺めるような具合で渡れば、尊厳威厳は守れる。なに、問題ないさ。

最初の一步、二歩、三歩まではそろりそろりとゆっくりではあったが、何とか進むことが出来た。

だが、四歩、五歩くらいになると足場と足場の隙間の長さが異様に気になり始めた。高さが怖いので、本当は下を見ないようにしたいのだが、足場を見なければ意外と隙間があるので踏み外す恐怖心もある。なので、否応

なしに足元を見ながら、端の太くたくましいカズラにしがみつくようにしながら一歩、一歩進んでいく。

足に体重を乗せて踏みしめるたびに、ぎしぎしという音が耳に入ってくる。

やがて、一番恐れていたポイントに達したとき、私の足は完全に止まった。

やや幅の広い足場と足場の間から、橋の下を流れる川が見えたのだ。途端に高さが具体的にイメージ出来てしまったために、それまでごまかしごまかしで進めてこられた足が止まったのである。

今、私は猛烈に高いところに立っている！

そうなるとうとうどうにもならない。空を仰ぎ見ようが、足元に視線を落とそうが、何しようが自分が高さ十四メートルの吊橋のうえにいるという現実がたまらなく恐ろしくなってきた。そのあまりの恐怖心に、私は次第に自分を客観視する余裕を失っていった。

その後の記憶はまるでなく、気がつくとき心配そうな家族の顔が自分を覗き込んでいた。のちにわかったことだが、橋の上で動けなくなった私は、情けないことにたまに居合わせた観光客に助けられたそうだ。

どうやら私はあまりの恐怖に橋の上で失神してしまつたようである。

何とか失禁することはなかったようだが、それでも充分すぎるほど情けなさすぎる姿を家族に晒してしまった。

そして、今はそんな醜態を晒しての帰り道というわけである。

いつの間にか後部座席での小競り合いは終わつていて、幹子も武もそれぞれ窓の外の景色を眺めているようだった。

終わつた。完全に終わつた。

これまで必死で演じてきた「完全無欠の親父」が、「威風堂々の親父」がこんなかたちで終焉を迎えるとは思ひもしなかった。

何十回目かのため息を心のなかでついたとき、誰かが肩をぽんつと叩いた。

それが武だとわかつたのは、思わず見たバックミラー越しに彼と目があつたからである。

武はにとつと笑っていた。だが、それは嘲笑っているようではなく、ただ落ち込んでいる私を元気づけようとし

ているような、温かく穏やかな笑顔だった。

最近、前の乳歯が抜けたばかりでところどころが穴だらけの、良い笑顔だった。

「お父さん、怖いのによう頑張つたな」

「え？」

「ホンマは最初っから怖かつたんじゃない？ ほなけど、僕らが連れてつてつてお願いしたけん、頑張つてくれたんじゃない？ ありがとう」

想像していなかった武の言葉に、私は何も言えなかった。かわりに涙が溢れていった。鳴咽が出た。鼻水も出た。もしかすると橋の上での失神以上にみつともない状態だったかもしれない。

しかし、それ以上にすつと体と心が軽くなつていき、心地よくなつていくのを感じていた。

「僕、知つとんよ。人間はな、得意なこともあるし、どうしても出来んこともあるんよ。ほれ、僕は算数が苦手やし、お姉ちゃんも虫が怖いし、お母さんは……ああ、お母さんは何も怖いもんじゃないか」

そう言つて武が笑うと、尚美と幹子も声を上げて笑つた。

私もつられて笑った。

「それにな、お父さん、僕が一年生のとき学校でオシッコ漏らして落ち込んだとき言うてくれたでえ。『誰しも失敗はある。一番あかんのはたった一回の失敗で自分なんかアカンといじけることじゃ』って」

「うん、そうやった……そうやったな。すまん、お父さん、えらそうに武に言うたのに忘れとったわ」

「しゃあないよ。僕も六の段、たまに忘れるもん」

そう言つて武はニシシシと笑った。

その瞬間、私のなかで張り詰め続けていた何かが音を立てて切れた。それによって、それまで自分のプライドを覆うように着込んでいた、見栄、虚栄の鎧を脱ぎ捨てる事が出来た。

「武、ありがとなあ」

「あははは。かんまんよ」

日が沈む前に、吉野川市内にある自宅に到着した。

「そうじゃ、野球中継始まっちゃうかもしれん！」

と武がいの一番に車を飛び出し、玄関に向かって駆けていった。そのあとを幹子が追いかけていく。

「ちよつと、今日は鉄腕ダッシュ観る日やろー」

「おーい、テレビもええけど、ちゃんと手洗いせえよー」

ふたりの子どもの背中に向かって声を掛ける私。

尚美が車を降り、大きく体をそらして伸びをした。

「今日は何か、すまんかったな……」

気恥ずかしさと気まずさの入り混じった、バツの悪さをごまかすように私が目をそらしながらいうと、尚美は私の目の前に回り込み、

「作戦成功ー」

とわんぱくな子どものような笑みを浮かべた。

「さ、作戦？ おい、どういうことじゃ？」

訊ねてみるも、それに尚美は答えず、「さて、ご飯作らな〜」と言いながら私をおいて家に入っていくってしまった。

どうやら今日の一連の出来事は、尚美の手のひらの上でのことだったようだ。

あいつ、さては私が高所恐怖症だったのを知ってたな。下手すれば義父たちも知ってかもしれない。

ホンマ、かなわんわ……。

思わず苦笑してしまう。

すると、武がリビングの窓越しに「お父さん、坂本が
ツーベース打ったで！」と叫んできた。

「おっ、また打ったんか。すぐ行く」

私は慌てて玄関に向かって走った。

この日、私は見栄と虚栄の威厳ある父親は卒業した。



となりの同人誌 其ノ参 コロナ時代の詩精神

コロナコロナで明け暮れしているうちに一年が過ぎた。前号の本欄では感染症など頭の片隅にもなかったのに、今や片時も忘れることのできないものになっている。さらに言えば、強烈に冷たい砲弾がドカンと打ちこまれ、どこかのだれかさんが待ち望んでいたオリンピック景気の芽が霜枯れてしまったのが、現在の日本ということになるだろう。

このたび手近の雑誌に目を通してみて痛感させられたのは、時代情況に正面から向きあっている文芸が、〈小説〉ではなく、〈詩〉であることだった。断わっておくが、私は政治や社会に対して「もの申す」姿勢を書き手に求めているわけではない。連日のマスコミ報道どこ吹く風と、己が城に籠り、言葉の錬金術にふけるのも、立派な文学的営為であろう。ただ、それならそれで全体の中に埋没せず、屹立する火山のような作品を生み出してほしいと願っているのだ。

☆

二〇二〇年五月三十一日の日付をもつ宮田小夜子「薄雲」(『逆光』第106号、同年七月、徳島県阿南市)は、五連から成る詩。テレビにならない家の窓を開けたひとときを、ゆったり静かに歌う。短い一行一行が横雲のように広がって描き

出すのが、コロナ下の心象風景である。「イマージュは／現実、実体の中で生まれる」の二行を、一挙に進んだ日常変容への警鐘として私は読んだ。

関西圏の詩誌と言つてよい『ア・テンポ』第57号(二〇二〇年五月、兵庫県神戸市)からは、三作品を紹介したい。丸田礼子「礼賛」は、小学校の理科室の記憶から出発、自己を内から支える骨格を想い、いずれ火葬に付され骨壺に収まるまでを歌う。骸骨とは、同行二人の道連れなのだ。山本真弓「漂流」は、AIや遺伝子組換えに象徴される現代社会のありようを、危機そのものとして表現。この詩人が感受する現世は限りなく暗い。今村さつき「詩人見習い」は、くたびれた布袋を携えての言葉採集の旅を歌う。行く先々での歌いぶりに決まった型があつて、どこかで一度聞いたような気もするのだが、まあ、これはこれで面白い。

『詩脈』(徳島県鳴門市)は既刊の三冊をまとめて読んだ。第386号(二〇一九年十一月)の表紙に刷られた岸上繁「鉛筆と少年」は、昭和四〇年代末に書かれた旧作の再掲。異色のシュールレアリスム詩であり、いま読むとさえって新鮮である。第387号(二〇二〇年二月)では、竹原洋二「夜の雨」がやさしい雨音を心に響かせる秀作。世に類想の詩は五万と書かれていようが、美しいものはやはり美しい。第38

8号(同年四月)掲載の**牧野美佳**「ものや思うと」は、コロナ禍によってメッキの剥げたこの国の現在を撃った作品。一部を次に引用しよう。

抜け駆け旅行で感染帰国した若者は

自分たちは重症化しないから　と笑う

他者への思いやりを忘れた

醜い国にしたのは誰だろう

現代詩の長女と言われた茨木のり子を想わせる真つ当なもの言いに、共感を覚えるのは私だけではあるまい。「なんだ、この程度か。甘いな。」と感じる向きには、熟練の詩法と高度な詩意識に裏打ちされた六連四十三行全てを読んでもらうほかない。最終行「俯いて　ため息をついている場合ではない」に到り、きつとあなたは反省する。

創作も載せるが、主に研究・批評の場である『群系』第44号(二〇二〇年六月、東京都)が『平成三〇年間の文学』を特集している。カズオ・イシグロや小川洋子、堀江敏幸に奥泉光といった作家の作品が論じられているのだが、多岐に分化した読み手の嗜好を反映してか、よく言えば乱れ咲く花園、わるく言えば雑多な収集箱。このとりとめの無さが平成期文学の特徴なのだろう。とはいえ、**大堀敏靖**「立松和平 平成の求道」ならびに**名和哲夫**「村上春樹と私小説作家 車谷長吉・

西村賢太」を興味深く読んだ。さて、本誌で読み落とせないのが**大牟田太朗**「**会見余録―本八幡**」だ。当随筆は編集長宛の一種の挨拶文ながら、紙上文学散歩の行き着くところ、『人物研究』誌を主宰する氏の信条へわれら「同人雑誌」に拠る者は、「プロ」が営む円環世界の外にいるがゆえに、自由な立場からあらゆる事象への批評眼を養うことができるわけで、その努力が肝要だ」が述べられていて、思わず唸ってしまう。

今回読んだ小説では、**市川しのぶ**「**ゆずり葉**」(『弦』第107号、二〇二〇年四月、愛知県名古屋市)に惹かれた。築百五十年の「森の家」で暮らす夫婦が、妻の発作が伴うためセックス不能になり、ぎくしゃくした関係に陥るも、試練を乗り越え、米国へ旅立つまでを描く短篇である。まだまだ推敲の余地があり、ストーリー展開はひと昔前の韓国ドラマみたいだけれども、作者に備わる資質は、若い男女の愛のかたちを物語るに適していると思われた。ヒロインの加絵はあちこちで診察を受けるものの、病名が確定せず、治療がかなわぬままとなるのだが、**岩崎正高**「**診療所奇譚**」(『アミーゴ』第82号、二〇一九年十一月、愛媛県松山市)の語り手のようなドクターに巡り合っていたなら、彼女の苦しみはずいぶん軽減されたのではなからうか……。おっと、これは余談。

(阿奈遠菓子)

編集後記

なんと飛行船に若い仲間が増えた。驚くなかれ、まだ二十代である。「同人誌ならぬ老人誌」と揶揄されることもある我ら飛行船によくぞ入ってくれたものと思う。まだ荒削りだが六十歳以上の我々には想像できない感性を持ち合わせている。意欲もあるので期待したい。

今号の飛行船、バラエティ溢れる作品群となった。純文学、サスペンスホラー、エンタメ、時代物、ボーイズラブなどなど。飛び抜けた傑作はないかもしれないが、小粒であれ、どれも面白くスーッと読める。

逆に難解ではあるが松田さんの「詩魂凜凜」は力作である。この同人誌に掲載できたことを誇りに思うし、活字として後世に残せてよかったと思っている。

今号はコロナ禍のまっただ中で作られた。昨年の前号発刊以降一年間、皆が小説の構想を練っているときも、パソコンに向かって文章を考えているときも、私がこの編集後記を書いているときも、テレビや新聞はコロナ一色に染まっていた。にも関わらず、この歴史的な大事件に触れた作品は一篇もない。あまりにも大きすぎて書けなかったのか？ それとも、未だ現在進行形で考えがまとまら

なかったのか？ 私は考えがまとまらないほうだ。「いたいこの騒ぎはなんだろう？」と首を傾げて見ている。大変な疫病が流行っているのにもかかわらず、我が国の全体の死者数は減っている。逆にコロナ不況のなか自殺者はこれまでの減少傾向から一転、増加傾向になった。その数たるやコロナ死の八倍！ いったい……これは？ やがてこの歴史的惨禍も様々に総括され、そして小説にもなるであろう。

前号発刊後に「小説募集中」と大書したチラシとポスターを作り、県内文化施設に置いて貰ったところ五篇の小説が寄せられた。その一つが徳嶋氏の「かずら橋」であり、「虹が見えた日」の若き作者も。「やってみるものだねー」と編集委員一同この成果に驚いた。ポスターもチラシもまだ在庫はある。今年も置いて貰うことにする。

私がこの編集後記を書いている最中に、「とくしま文学賞」の表彰式があった。受賞者を代表して謝辞を行ったのは飛行船編集委員の一人である坂井氏。坂井氏は随筆部門で最優秀賞、そして同じく編集委員の大石氏も文芸評論で優秀賞に輝いている。「同人誌飛行船」は順調に飛行しているようだ。

高木 純

送付いただいた同人誌など

九州文学（福岡県）	49、50、574号
文芸中部（愛知県）	113、114、115号
三田文学（東京都）	141、142、143号
相模文芸（神奈川県）	40号
a m i g o（松山市）	83、84号
風土（南国市）	20号
海峡（今治市）	44号
蒼空（高知市）	25号
山音文学（苫小牧市）	134号
北陸文学	84号
弦	106、107、108号
中部ぺん（名古屋市）	27号
文芸思潮（東京都）	75、76、77、78号
群系（東京都）	43、44、45号
あいずみ文芸（藍住町）	15号
おたくさ（神戸市）	Ⅲ－4、Ⅲ－5号、
中津川文芸（岐阜県）	復刊5号
詩脈（鳴門市）	387、388、389、390、391号
年間詩集（松茂町）	2020
藍色の風（徳島市）	88、89、90、91号
ア・テンポ（神戸市）	58号
たんぽぽ通信（つるぎ町）	9号

その他単行本もたくさんお送りいただきました。
有難うございました。厚くお礼申しあげます。



飛行船の会 同人 2021 年 3 月 1 日現在

乾 莊次郎	東京都江戸川区
大石 征也	名西郡石井町
坂井 陽	徳島市住吉
渋谷 政子	板野郡上板町
高木 純	吉野川市川島町
竹内 菊世	徳島市通町
林 宝珠	八尾市渋川町
正木 孝枝	徳島市上八万町
増田 辰良	北海道江別市
松崎 慧	吉野川市川島町
松田 一美	徳島市国府町
松尾 龍馬	板野郡板野町